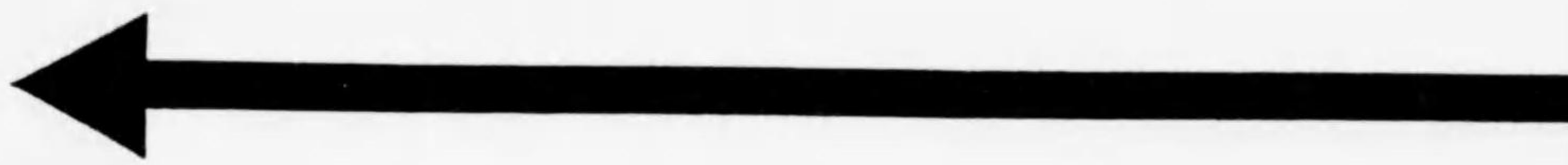


予を鏡る人

330

406

始



物235
607



予を繞る人々

|| 越後屋から三越まで ||

林 幸 平 著



日比翁助氏の病床に此書を献ぐ

日比翁助氏は元三井銀行の要職にあり。故中上川氏に認められ、傾けるをちごやの商運挽回を託せられて、三井呉服店裡の人となり、苦心經營大に努力する處ありしが、時利あらず、三井家の四大事業中最も振はざるの故を以て、遂に一大改革の運命に接す。氏は従業員の失業するを哀れみ奮然として起ち、明治三十七年末三井家より老舗の名義を貰ひ受けて、同志と共に株式會社三越呉服店を組織し、爾來奮勵努力、部下を激勵してよく緊張せしめ、身を以て衆を率ひ、遂に今日社運隆盛の基礎を固む。氏は事に當りて果斷、一度決するや勇往邁進せらる、然も其裏面には慘憺たる苦心と、周到なる注意の存するを見る、其身を持するや謹嚴、公私共に廉潔にして、苟も節を屈する事なし。此偉大なりし人格は常に善良なる感化を青年子弟に及ぼし、衆皆其義務に服し、全力を傾けて尙及ばざるを懼る。氏は限りある肉體を以て、限りなき勞苦に當り遂に病を得て起たず、かの強健なりし體軀も明晰なりし頭腦も、摺り減らされて強度の神經衰弱となり、由來今日迄春風秋雨己に二十年門外不出の人とならる、洵に悲しき極みなり。

此書を讀みて氏が病床に献ぐ、希くば氏が病苦の幾分を慰むるを得ば望外の幸なり。

昭和五年七月二十五日

林 幸 平



專務取締役時代の日比翁助氏

歐米留學當時の著者



少年店員時代の著者



最近の著者とその家族

自序

日常錢厘の利を争ふて小成に一喜一憂する身の静かに考ふる暇とはなきに、偶々氣管支加答兒に犯されて夜具を重ね、枕かついで横に立ち、天井板を眺めて呆然たること數日自由の活動を封ぜられて聊か皮肉の苦痛は感ずれど、利慾の外に超然として自己を客觀するの機會を與へられたるは嬉し。

思へば人世夢の如く、百年必ずしも永からず、十年亦必ずしも短かしとせず、その苦しきは永きが如く、樂しきは短きに似たり。

自ら三十九年の過去を顧みて兒戯に等しき波瀾曲折を思へば、轉た感慨の無量なるものあり、眠れぬまゝに秩序もなく順序もなく思ひ出での片々たる落葉をかき集め、題して『予を繞る人々』となす、徒らに骨折りて天井板の空目を數ふるには勝らん 阿々

昭和五年六月上浣

林 幸 平

ポ ー ト セ ツ ト	牛 の お 産	ハ ー ビ ジ ネ ス	ス ケ ー ル	川 と 言 ふ 字	ハ イ ド パ ー ク の 夕	歸 路	絶 對 命	醉 つ ば ら ひ	難 問 題	歌 迎 會	テ ム ム ス	メ ー ブ ル	ロ ン ド ン	大 西 洋	ポ ジ シ ョ ン
.....
一六三	一六一	一六〇	一五九	一五八	一五七	一五六	一五〇	一四八	一四一	一三六	一三四	一二六	一二一	一一七	一一四

ク リ ス マ ス	次 の 下 宿	装 飾 學 校	研 究 雜	紐 育 市 (<small>ファミリー</small>)	世 界 大 博 覽 會	初 航 海	洋 服 屋 の 店 頭	お 樂 さ ん	工 場 監 督	落 合 先 生	益 さ ん	古 家 さ ん	運 動	夜 兵 檢 査
.....
一一一	一〇九	一〇五	一〇二	九八	九〇	八五	八〇	七三	六三	五三	四二	三七	三四	三三

スエズ運河	一六五
印度洋	一六六
シンガポール	一七八
香港	一七一
故國	一七九
設計と製作	一九〇
月給	一九一
平等院	一九三
吉野	一九六
シベリヤの一番鎗	二〇〇
災難	二〇二
大使館の裝飾	二〇八
常陸山	二一五
研究	二二一
チヌーリストパーティー	二二四
.....	二二六

|| 了 ||

冬 眠

日本橋は駿河町の一角に、二百餘年の老舗として薄暗き太鼓暖簾の内側に十一軒の賣場を鍵の手に設けて來客を待つ、眠そうな聲で小僧や御召の中柄に紅絹を持つて來い、小僧は晒板ひしいたを下げて立上り、オーイーと返事をしながら絹庫に走つて行く、晒板に山と積んだ柄が、お客の氣にいらなければ三度でも四度でも往復する、日に何百回となく往復する小僧の足で絹庫と木綿庫の御影石の入口はツル〜と本磨き以上に光つてゐる。二階三階に登る樺の階段などは踏み板の真中が凹んで滑ること夥しい、山と積んだ品物を抱へてツルリと來た日には、どんな負傷をするか知れたものではない。

倉前には帳場係があつて四五脚の机を並べて、森田さんや片山、石井などいふ老人連が五寸も厚い横長の出入帳を前に控へて品物の出入りを記入してゐる。前には持出すべき商品品を改めながら、チョウターデン(長太郎殿)やリヤウキッデン(良吉殿)が自慢の聲を張り

上げて、

三四七十五錢ガエ ミエントコロケイサーセン、ガエ、七圓五十錢トコロエンサマルーガ
一エ、

とやつてゐる。

絹庫の脇から臺所へ行く廊下の左側には、金網格子を隔て、仕人方がある。

絹方は一色さんがへらで金板を叩く様な聲で、

それはカイエントコロケイサー、

向ひ側の木綿方では村田老人がはげ頭をツルリとなでながら、エー夫れはシャウエンサ
センとーしよゑー

右側が便所で飛び石二つ程先きが臺所。廣々とした板の間の西側に階段があつて、二階が
男部屋その階段の左側には帳場格子を折廻らして、机の前には御家流の名手夏目正之助と
いふ行司の様な名の老人が、賄監督とあつて後ろの戸棚に寄り掛り頻りに船を漕いでゐる

その又隣りの山本老人は元新川酒店の番頭で、酒店閉店後は賄方の助役となる、樂焼き
の土瓶宜しくといふ頭を机の上に轉ろがしてゐる。この時分には鼻で息してゐる骸骨見た
様な連中がなか／＼多かつた。

風呂場の前には今御出入の髪結床が箱道具を右に置いて頻りに中僧の頭を刈つてゐる。
待合の腰掛には若い衆や小僧が三人程順番を待ちあぐんで、鼻から提灯を下げたのや懐ろ
手を帯の下まで突込んでとんだところを握つてゐるものもある。新聞でも読んで居るのは上
等の部である。

やがて来るべき嵐は如何なる惨狀を呈するか、知らんとも欲せず知る由もない、あゝ天
下は泰平である、實に無智なる泰平である。

臺 所

臺所の大流しでは風呂番が頻りに井戸から水を汲み込んで、板前の徳助は昨日大高と
あつて今日は魚の御馳走、さわらの切身に串を刺して足から照焼きが始まる、大高でなけ

れば河内山(ヒジキに油揚げ)か竹に虎(葱に油揚げの汁)と来る處だ。飯番の宗藏は大釜の下に火を入れながら頻りに向ふ脛の傷を氣にして居る、どうしたのかと聞いて見ると一昨日向ふ脛を摺りむいて痛むから、拾つた膏藥を張つたら、うみが出て困るといふ。膏藥は見れば藤田さんが探して居た吸ひ出し膏藥と知れて大笑ひ、膏藥なら何んでも宜いと思つて居るのが可愛い、藥が餘つて勿體ないと飲んでしまふのはかう云ふ手合だ。

お盆の中日には萩の餅を喰はせる、經一尺位のめい／＼盆に三個並べると兩の端が盆の外に喰み出す程の大きさである。然もお代り勝手次第とあるから、この日は朝飯を控へ目にして待つて居る。さて晝飯の時間となると皆腹によりを掛けて詰め込む、僕も二つお代りして都合五ツと平らげたが、流石に咽喉までつかへて肩で息をする様な有様、とう／＼夕飯は抜きにした。

何日であつたか氣に喰はぬ事が有つて徳助を困らせる爲めに小供一同が申合せて賄征伐をやることに一決した。毎月一度位朝飯に黒豆を喰はす日がある、あすは飯と汁を抜き

にして豆計り喰つてやれと云ふ、僕も賛成して大きなお椀に二杯山盛り平けたが實に腹が張つて閉口した。

一方賄方では大狼狽、汁と飯とはうんと残つて黒豆が一粒もない、オイ豆を呉れ、もう無いんです、べら棒め今何時だと思ふまだ七時じやないか、シミツタれたことを云ふな、豆位ひ儉約したつて仕方があるかい、若い衆や役人衆迄グズ／＼云ふ、賄の徳助頭をかいて閉口頓首、小供は舌を出してクスリ／＼。

差 し 番

夕方になるとランプ部屋から石油臭い助藏が、空氣ランプに灯を入れて各賣場の天井へ釣り下げて廻る、廊下の隅には四角な網張りの臺行燈があつて、種油がチ／＼云つて居る、庫の中は不用心とあつて、手提げの網行燈に臘燭をつけ、各要所々々には玄番と稱する木製の丈夫な燭臺を置き、それに蠟燭がとぼしてある、當時はそれでもさのみ暗いとは思はなかつたものだ。

表番は水引暖簾と太鼓暖簾とつるして外側には格子戸を立て、内側には六尺間毎に溝のついた付け柱を立てる、中庭を後ろにして中柱と云ふがある、各賣場を後ろから一と眼に見張る支配人が、帳場格子の中にピタリと座つて店內をねめ廻して居る。

差し番一と一聲號令が掛ると、小供の中の大粒が踏み臺を持つて廻つて鴨居の上に二枚宛のせて留めてある戸を、付け柱の溝と溝との間に落し込む、廻り戸を全部締め終ると、今度は差込み錠を戸の上部に差込んで廻るのである。

賣場の若い衆某が、オイ小供や今日の差番は誰れだい、私です、夫ぢや東の隅の錠前を一本あとで頼むぞと小さな聲、仕方がないからへい。彼は今夜抜け出して吉原へ出掛ける積り、悉く錠前を差込んで鍵がなければ出られない、鍵は宿直長の支配人が握つて居る處でもしこの若い衆の云ふ事をきかなければ蒲團部屋や土蔵の三階で引バタかれる、たまつたものぢやない、十時の時計がチンチンと鳴ると一同宿直長の前に座つて頭を下げる、宿直長は帳面と判をもつて順々に名前を呼んで點呼する。

平之助ハイ、初太郎へい、孝二郎などとやり出す、中には作り聲などして人の名前に返事をし、更に改めて自分の時には地聲を出して聲の使ひ分けなどする奴がある。この點呼がすむと小供は一同二階の蒲團部屋に駆け上つて夜具の包みをかつき出し、下の角店の東の隅から上役の床を席順に敷いて廻る、先づ役人衆、上座、平頭、平と敷き廻るとあとは自分達の床を敷いて丸に越のついた唐草の蒲團にもぐり込む。

夜遊び

榮どーんオイ頼むよ、差番の小僧は前後に氣を配つて東の隅の戸を二枚一緒にスルスルツと二尺許り持ち上げる、若い衆はその下をくゞつて外へ出る、榮どんは再び音のせぬやうに戸を下して錠を差し込む。

それから若い衆の夜具の中にはさも本人が寝てゐる様に、座蒲團や寝間着で換へ玉を作つて押込んで置く、夜中に宿直長が薄暗い提灯をつけて廻つて見ても大方は眼あつても節

穴の如き老人がお役目で形式的に廻るに過ぎないからめつたに發見せられるものでない。籠を離れた小鳥のやうに、若い衆は馴染の仕立屋に立寄つてかねて預けてある衣物と着換へて且那のやうな恰好に早變りして、出入の宿車にスピードの馬鹿に早い強の者を選び向ふ鉢巻を勢ひよくアリヤリヤ〜、ホーヲヨ先きへ行く車をグン〜抜いて提灯を振りながら淺草へ出て、馬道から吉原土手へ掛る時分には車上の若旦那も夢中になつて掛け聲のおまつだい、やがて文華と云ふ店でお出入の引手茶屋へ上る、車屋は過分な御祝儀を頂戴して引き下る、一方は酒肴よと大急ぎ、藝者たいこに取巻かれてのスツチャン騒ぎ、有頂天になつて隠し藝のありつたけを盡して御引けとなり、馴染の手管の甘言に鼻の下を延ばして、色男は天下われ一人と他愛もない夢を見てゐる頃には、もうそろ〜と東が白らむ。

店の格子を外さぬ中に立ち上がる、敵娼は肩につかまつてねー旦那、お近い中に、キツト忘れちやいやですよ、

後に心は亂髪、見返り柳衣紋坂、昨夜の夢を車にのせて急ぎに急ぐ、本町で車を下りてコソ〜と店の格子の外に立つ。

やがて表番が眠むさうな眼付きで外側の格子戸の鍵を開けると、オイ表番レコ（親指を出して）はまだ寝てゐるのか？

オイ頼むぜと這入り込み、コソコソ自分の冷たい床の中へ羽織着たまゝもぐり込む。

其日は昨夜のお疲れとあつて賣場の方は暫らく助役に頼んで、他愛もなく床部屋の蒲團包みの間に高いびき。

御三日

今日は御三日とあつて平以上には晩飯の時肴と酒が一本その他には餡ころ餅が一皿づゝ上戸は人の分まで飲み賄の男を胡魔化して更に一本と内證でねだる。少々廻つて來ると他愛もない氣焔を吐く同氣相集まる不良青年がオイーと慕、僕は成田屋の不破をやる、君は音羽屋で名古屋三左、よいか成駒の留女は小平君がやれ、ウフツ馬鹿にするない、マ宣い

てことよ。

摺古木や物差を腰にたばさみ、米磨きざるを頂いて臺所の板の間を舞臺に見立て、各々得意の聲色。

通ひ廓の大門を、這入りや忽ち極樂淨土、歌舞の菩薩の君達ちが……

など、夢中でやり出す、中にはもう酔つた勢ひに乗じて吉原へでも繰り込みたくつてうづうづして居る奴がある。

忽ち便所へ行くと見せて仲間を外した宇田川の孝どん、豫て此處からと研究してある洋服店の廊下は便所の手洗ひに足をかけて、廊下の屋根につかまつて足をバタ／＼やつてゐる。

曲者見つけたとばかりに密かに近寄りバタ／＼やつてゐる足を箒の柄でかつ拂ふ、平常はむづかしい面がまへして小僧や茶を持つて來いなど、威張つてゐるが斯うなればとんとき意氣地がない、向ふ脛をカツ拂らはれて痛い々々と半べそをかきながら漸く屋根へと這上

がる。先づ登りは登つたが向ふへ下りるのが大變だ、東の曲り角に置いてあつた絨の空き箱を目がけて下りやうとしてゐる。ヨシ來たと許り此方は窓に差込んだ鐵棒の間から長い棒を突き出して絨の空箱を、足の届かぬ方へ四五人掛りでエツサ／＼と突き倒す、足臺を失つた宇田川氏は困り果て、亦上に登り、歸ることも出來ず行くことも出來ずウロ／＼して居る、やがて決心したものと見へ、雨桶の丈夫さうな處を見つけて其處につかまり、ブラリと下つて足をバタ／＼やつてゐる。此方は心得たりと棒の先きで尻の邊をいやと云ふほど突き飛ばす、先生雨桶から手が外れてドスンと計り石疊の上へ尻餅をつく、此方の悪戯者はヒラリと黒暗に身を隠して様子如何にと窺へば先生龜の尾のあたりを打つて暫しが程は起きも上らず、漸く腰をさすつて立ち上り恨めしさうに眞暗らな廊下の中を睨みつけたが、誰の仕業か判るものでない、やがて洋服店の鐵柵をよち登り、頂邊をまたいで向ふ側へ廻る時、三四人の小僧が一齊にコラツ！

三井銀行の請願巡査はサーベルガチャ／＼廻つて來たが毎度のことと心得てゐるから何

んとも云はずに向ふへ行く。
色男はやう／＼の思ひで、この垣一重の黒鏡を越へて例の通り雲霞みよ北の方へ飛んで行く。

蛇の道

此時分賣場員の給料などは三圓か四圓位、衣類は通帳があつて身分相應な品物を選定して通帳に付け支配人に検印を受け、半期決算の後賞與として下されるが、現金の収入としては表向き三四圓の小遣ひに過ぎない。それがどうして吉原で大持ての底抜け騒ぎが出来たものか、大方言はれぬ筋道も有らうが、僕は蛇でないから蛇の道は知らない。

賣場員が客に接して註文を受け、自ら註文帳を付けて月末には自から請求書を認め、誰れが読方の帳簿と突合せて検印するでもなく、その儘定廻りの男に言ひ付けて集金させる其勘定は皆賣場で一應受取つて調べ書を付けて勘定場へ入金し、定廻りは賣場員から若干

の祝儀を頂戴して、給料以外の雑収入が意外に多い。賣場員と定廻りとは馴れ合で中々密接な關係があり、定廻りの男が賣場員を見ること主人の如く仕へる、唯に資格の相違による階級的觀念ばかりではあるまい、いや然し僕は蛇でないから蛇の道は知らない。

此様な弊風が永く禍ひして改革後のちこやにも、坦々たる大道を踏み外して首を切らるゝ者數知れず、道ならぬ色に染まつては容易に抜ける物でない、然かも首が胴から離れて世間に迷ひ出た亡者で、悲しや一人も成功した者はない。オネステイ・イズゼ・ベストボリシーは西洋計りで必要な文句じやない。

僕は初めから洋服店に廻はされて働らいて居たが、諸官省の入札などは相當に悪い事が行はれたものだ、商人同志が茶屋へ集まつて先づ相談し合つて、最低値段を定めて入札する、そして落札した者が幾割かの罰金を出すと、其金は落札しなかつた人達で平等に分配する、其分配に預つた金は入札に顔を出した番頭さんのポケットへ這入つて、店の雑益にはならぬらしい。若し落札すれば法外の利益を占めて然るべき不當利得が番頭さんのポ

ツケットへ這入り込む、どちらにしても損はない、よくくゞチを踏んで損失があればそれは店の方へ振り向ける、月給の安い番頭さんは意外なる収入の間道を心得て居るらしい。全店擧げて此様な有様では、商賈の成績が擧がる筈がないと思つた、然し僕は蛇でないから蛇の道は知らない。

休 暇

休暇は三ヶ月目位に一回ある、殊に秋は大和が出入の茶屋で、芝居を店費で見せる。休暇は毎日賄方から割當の通知に接し、明日は誰れ々々が休暇ときまる、久しぶりに自由の空氣が吸へる。朝は暗い中から飛び起きて鐵道馬車で雷門まで行き、吾妻橋を渡つて三圍の稻荷に參詣する、玉子焼と海苔に味噌汁位で、朝飯は必らず三圍で食べることにきまつてゐる。それから思ひくゞに上野淺草と飛び廻つて、夕方六時頃には伊豆勝といふ店の近所の料理屋に集まつて、夕飯を食べて、一同打揃つて店に歸ることになつてゐる。

賣場の助役などになると、もう生意氣を覚えて、米糸の羽織に博多の帯、白紬の足袋などを近所の仕立屋に預けて置いて、茲で身分不相應なりに着換へて、向島へ車で乗りつける、小僧も十八九歳になると、一ツ端し蛇の道をおぼえる、蓋しこれを役徳と心得てゐるから、まことに始末が悪い。

風 呂

晩方風呂が出来ると先づ總支配人の藤村さんや、山岡、一色、村田、森本などの元老連が順次に這入り、それから別格、支配人格、役人衆、平頭、若い衆など順々に汚れて來るわれくゞ小僧の這入る時分には、一滴の湯の中に幾億の細菌がウヨくゞするやうになる、幸ひにして衛生思想などが、頭の中に存在して居なかつたから、事なく過ぎ去つたやうなものだ、知らぬが全く佛である。

寄 り 合 ひ

毎月一回寄合ひと云ふのがある、平頭ひらがしらや小供頭が小供一同を集めて、御談議を聞かせる。これが大概夜の十時から十二時位までかゝる、小供頭が先づ小供一同を、二階の樺造りの廊下にヅラリと席順に並べて、静肅にして向ふの廣間へ呼び込まれるのを待つてゐる、廣間では何やら愚にも付かぬ雑談に耽つてゐる、何がサテ薬罐に豆腐の殻でも詰めたやうな頭の持主が、唯だ意地悪く時間を引延ばして、小供達を苦しめ、これが皆小供に取つては修業になると思つて居るのだから堪らない。

一方可憐なる小供達は、寒中火の氣の無い板の間に座り込み、晝の勞れに眠むい眼をこすつて、待ち草臥びれてゐる、早く呼び込んで早く済ませて、寝かせて呉れよばよいがと徒らに時間の經つのを憤慨する者、豈に獨り僕のみならんやである。

やがて小一時間も待たせた後、小供頭の聲に廣間へ一同恐る／＼呼び込まれて、平蜘蛛のやうに頭を疊に摺りつけてかしまる。

紋切形でエヘンと一と聲、心太番頭の御談議を拜聴する。

「エー、御一同日々御苦勞様で、皆も精々やつて居るのであらうが、我々の眼から見ると、もう一と呼吸のやうに思はれる、それに兎角この頃の小供は生意氣でいけない、動もすると上役に向つて口答へをする、言ひ付けられた事はスツボかして置くから、用事が足りないで始末に負へない、先づ賣場の小供から云ふと、一體仕打ち者(表裏ある者)が非常に多くなつたやうだ。エー金之助！貴様は一體生意氣だぞ、年中小さな本を懐中に入れて置いて、倉の三階あたりで晝の忙しい時分によく讀んで居る、それに自分の賣場丈は精々やる様だが、外の賣場で呼んでも一向返事もしない、そんな事でどうなる何んぞと云ふと理窟張つて仕方のない奴だ、これから充分氣を入れ換へて、注意せんとヒドイ目に逢はずぞ。アー、榮藏！貴様は年中芝居の眞似計りしてゐて始末にいかん、この間などは何んだアノ狀さまは、二階の階段の上から、「エー落ちこちまーす」と怒鳴るか、何をするかと思へば、火の一パイある金火鉢を落ことしやがつて、おまけに階段の途中まで降りて来て見得を切つて居やがる、馬鹿者め、夜具の包みと火鉢とはわけが違

ふぞ、若し火事にでもなつたらどうする、重くて持てなければなせ男(小使)にでも頼まない、始末にいけない奴だ!

十日も前の過失を今晚又改めて御叱言を頂戴する、何せよ教育するのではなくして、御役目で叱言を言つて時間をつぶし小供を苦しめれば彼等はこれによつて小供等がインブループすると思つて居る、否な彼等はその幼き時、同様の待遇を先輩から受けて育つたので後進の下役に對しては、その埋め合せに斯くすることが、低級なる彼等にとつて一種の痛快を感じしむるのであらうが、それも叱言だけならまだ恕すべし、自分の氣に喰はぬ奴は引張り出して差面(物差しで引抛く)を喰はす、更らに強情な手に負へないのは、廣帯の眞卷棒の太やかなるに霧を吹いて、それで毆ぐる、このお處刑を喰つた小供はヒー／＼泣く。

當時の制度は一切御無理御尤もで、一步でも上席の者に對しては、絶対に服従を強制せしめられて居る、ニタ言目には上役に對して貴様何を言ふ!と來る、道理も人格もあつた

ものでない、面從腹背は當然のことである。況や年少の氣鋭叩けば愈々堅く、打てば益々跳ね返す、百年一日の如き壓制主義が何時まで押し通せるものぞ。

龜吉殿かめきちが頻りに叱言を云つて居る時、理吉殿りきちは自分の番が來るまで、後ろの壁に倚り掛かつて聞いて居たが、その中に眠氣を催したと見えて、コクリ／＼と船を漕ぎ出した果ては不行儀に膝を崩したから、大切たいせつのものがブラリと顔を出す、お口の方は締りをゆるめて涎れまで垂らして見せる、實に御念の入つた馬鹿サ加減である。

やがてゆすぶり起されてウム／＼と眼を覺まし、居すまいを直して顔を拭いてから、エー、サテ御一同、日々御苦勞様で、皆も精々やつて居るのであらうが、我々の眼から見ると、もう一と呼吸の様に思はれる……。

ヘン文句までがすっかり前の先生と同じで、活版摺りよろしくと云ふ體たらく、氣の利かないこと夥しい。

この様な馬鹿氣たことが毎月一回づゝ繰り返される、實にスツチャンマン／＼、カンマ

ンカイノ、オツペラポーノキンライライだ、アホラシイヤオマヘンカである。

役 換 へ

毎年二度つゞ役換へがある元老を初め支配人、役人衆、上座、平頭、平、墨前髪、小供に至るまで席順にちやんと列んで、支配人から夫れ／＼役換へを申渡される、その時式目と云ふものを讀んで聞かせる、いはゞ店員心得のやうなものであるが、何時の頃に出来たものか文句が馬鹿に古めかしい、世の進歩につれて改正するなど云ふ頭の持主は無かつたと見える。

一ツ 御政府御規則御法度の趣き固く相守り可申事。

一ツ 一寸の裂たりとも無駄に致し候ては冥加に叶ひ申間敷事。

一ツ 病何とかして怠り候はゞ薬便々と喰べ申間敷事

曰く何、曰く何と皆覺えて居るには、僕の頭はあまりに粗末な出来であつた。

維新の大業も憲法の發布も科學の文明も、この店には何の交渉もなく、茫然として無智の大平を續けて居た。

眼 覺 め

太鼓暖簾に眼をふさいで、永き眠りに落ちて居た越後屋呉服店も、維新以來そよ／＼と吹き來る文明の風に、漸く覺めかけて來た、蓋し三井家の祖先が延寶の元年に鐵を入れて種を下したのは、この呉服太物業であるが、星移り物變つて世は明治維新の大業を成就せられ、兩換店は銀行となり、貿易業は物産會社となりて起り、續いて鑛山會社が出来、本家本元の呉服業はさらに振はずと雖も、銀行物産鑛山は新人を容れて隆々と發展し、今は三井家四大事業として、最も貧弱なるものは呉服店であると云ふことになり、是非とも茲に新材を採用して局面を轉回する必要を痛切に感じたのは大元方である。

明治二十九年に及んで、新人高橋義雄氏が選まれて、銀行より理事として呉服店の改革

に手を染めた。

先づ在來の制度を全廢して月給制度となし、不正を行ふ者は何人と雖も容赦せぬ、人材登用を宣言して衆を激勵し、これまで目白押し（ましろおし）の心太主義（こころたしぎ）を一切やめて、實力ある者はズンズン登用せらるゝことになつた、白雲頭の番頭さん、浮か々しては居られない。

大福帳は西洋風の簿記帳に改正し、是迄賣場から出た請求書は、仕譯帳から抜き書きして帳場から出すやうになり、入金是集金者から直接出納へと云ふことになつて、いよく黒鼠手も足も出ぬ、その中に慶應出の書生がドシ／＼店員となつて這入り込む。

茲に番頭連の眠りは全く醒めて反對同盟を作つて、自己の地位擁護に努めて見たが、大勢すでに定まつては如何とも爲し難い。

在來の座賣制度は、最も不經濟とあつて陳列式に改め、手初めに二階大廣間を全部打抜いて陳列場となし、續いて階下十一軒の座賣場を全廢して總陳列場とし、商品は倉庫から運び出したり仕舞ひ込んで整理したりした物は、悉くショーケースに飾りつけて、一ト目

に見えるやうに改正し表通りにはショーウエンドーを造つて、往來の人の足を停むるやうに工夫し、洋服店は經營宜しきを得ず、引合はぬとあつて一時閉店（明治二十九年末）した。出納係員や計算係員はドシ／＼銀行員の古手を振り向け、雁首をすげ換へる。然しこの二番物の銀行員や書生連には、日曜も大祭も休まず勤務時間も朝早くから、時に夜業も續くと云ふ長時間の労働には、かなり尻古垂れてゐたやうである。

N さ ん

Nさんは慶應出の書生で、初めは仕入の計算係として入店したのであるが、外の書生連とは其選を異にし、其勉強振りは非常なものであつた。僕は今迄此人位ひ勉強する人を見た事がない、然かも其熱心なる研究的態度にはホト／＼感心せしめられた、其時分仕入係長は〇〇と言ふ京都の人で、云ふ事はサツパリわからず、する事は一向締めくゝりのない人で、しかも大變な日連信者であつた、僕は其の南無妙法蓮華經の下役となつて、有附即ち商品調べを命ぜられ、Nさんと二人で整理をしたものである、Nさんは計算上の事は詳

しいが商品の事は未だ幼稚園。

前月の繰越高に今月の店出^{あきだす}数を加へて、賣場から報告して來た瓦斯双子の現在数を減いて見ると幾何の不足数が現はれる、是が賣高となつて計上せらべき筈であるのに、反つて商品が過剰して來た。

君！此様な馬鹿な事は無いじゃないか？

僕は言下に夫れは糸入瓦斯と混同したのです、糸入瓦斯の口座を調べて見ると少し賣高が多過ぎる。

君！絞り絹も在品が多い、

夫れは板メ絹との入れ狂ひでせう、

米澤糸織も多過ぎる、

縞八丈との入れ狂ひです、

僕の答へは極めて明確である、流石の先生驚いて、早速僕と共に絹藏や木綿藏に行つて

現品を調べて見ると、必ず僕の云ふ通りである。それも其筈だ、僕は以前に倉番をして倉庫の中の商品は手に取る様に知つて居る、そのみならず、僕といふ者は上州は桐生町織物の本場で、チャン、チャンカラコンと機織りの音を聞いて生れ、小學校から歸つて來ると糸を繰つたり管を巻いたり、果は機^機あしの上にあがつて辻糸^{つじいと}をたどりながら紋を引く、下では機織女が自慢の聲を張り上げて唄つて居る、

ハア！可愛い男が出たよな出ねよな面影^{おもかげ}さしたと思へば風だよ……チャン、チャンカラコン。

向ふの隅では糸張り男が、絹を疊んで槌で叩いて仕なしをする、

トン／＼ストン、トン／＼／＼、源はミナモト藤^{ふじ}はフジなぜに吉^{きち}の字やよしと讀む？
コリヤストン／＼／＼トン。

是では織物のことは禿頭の番頭さんより詳しい筈、織物の組織からその産地品質の特徴品名の區別、そのプロセスの概略まで相當趣味をもつて研究したものだ。それに機^機の構造

も高機、イザリ、ドビー、ボタン、ジャカード、力織機など大方は調べて、アウトラインは呑み込んで居る。

Nさんは研究的の努力家であつた、知らぬ事は小僧からでも教はつて、一向不見識とは思つて居らぬ。何時も紛らはしい商品の區別は僕が説明する、僕は記帳や統計の作り方をNさんから學んだものであつた。

僕が仕入研究生として桐生へ轉勤を命ぜられた爲め、今迄手掛けた商品有附けの仕事は度應出の城田君に引繼いで、懐かしい故郷に仕入研究の身とはなつた。

ストライキ

僕が東京を去つて二三ヶ月の後であつた、東京の店では舊店員と、新入書生店員との間に軋轢が起り、待遇問題で不平を起し、舊店員の方では書生ばかりで此商賣が出来るならやつて見るとばかり、小笠原、長谷川、酒井、岩崎、星、茂木、玉上、村田、宇田川、西田などを初めとし我親愛なる下つ端の益さんに至るまで『シノノメのストライキ』と深川の

眞盛寺へ三四十人立籠り辭職届を出すやら請願書を提出するやら大騒ぎ、一方幹部は急を京都大阪の各支店に報じ、極力支店員の臨時招集を行ひ、焦眉の急に應ずるなど摺つたもんだの大騒動……。

彼はアーして是はこうして一件のゴタスタも事なく解決、拙者は向ふ川岸で高見の見物三年鳥が笑つて居る。

商品有附け

桐生に居ること僅かに半年、亦再び本店に逆戻り、どうしたことかと思つたら、例の小面倒なる商品有附け問題が、城田君の努力によつて減茶苦茶となり、是を更らに高塚君に引繼いで、亂麻を飴の中に投げ込んで掻き廻した様になつてしまつた。

事務の整理は教育の力のみで満足の結果が得らるゝものとは言ひ難い、是を整理するには宜しく僕を桐生より呼び返すべしとは、Nさんの主張であつた相な。

藝が身を助くる程の不仕合せ、然かも僕の去つた桐生の出張所では、本店から検査を受

けて惨々の不始末を暴露した、計算係の門田、庶務係の佐藤、仕入係の神山等揃ひも揃つて遣ひ込み、早く申せば御店の金を無断に拜借通く言つても助からない、若氣の至り道たらぬ委託金を融通して、花柳の穴へ注ぎ込んだのである。小さな桐生の出張所ではだけ御拂ひ函になれば、残るは所長と小僧と小使だけ、時の所長〇〇南無妙法蓮華經の面目玉は丸つぶれ、それでなくとも此人の眼玉は先天的の藪隈みだ、夫に相違は御座なく候だ。

其頃F君は慶應の先生であつたが足を洗つてゑちごやの計算係となつてNさんの後を引受ける事となつた、そこで僕は亦F君と商品有附けの調べをやることになつた、F君はNさんが一日の先輩とあつて、商品學を同君から授けられた。九寸＝片圓幣、七寸＝男幣、五寸＝羽二圓令子、と云ふ工合である。

日比さんが銀行から廻つて来て支配人になつた頃である、K君が建言して毎日の商品残高を見やうと云ふ、即ち店で賣れる商品は受取傳票を復寫にして一枚を客に渡し一枚を手許に集めて、品名口座から引落し仕入れた品物は是も傳票によつて記入し差引残が手持ち

商品となる、組織は簡單であるが其實行が出来やうかと、支配人から相談があつた、苟も有附け調べに經驗ある者は出来ると思はぬ。

F君は出来ぬと云ふ僕も亦同感である、只提案者と支配人は出来ると云ふ、結局是が實行となつてK君と僕が任命せられたのである、僕は出来ぬと云ふ事をやれと命ぜられたのである。蛇足ではあらうが其出来ぬと云ふ理由を茲に説明して見ると、傳票の品名が正確に記されるものならば更に問題はない、處がなか／＼そうは行かぬ、同じ品でも見やうによつて、瓦斯双子とも糸入瓦斯とも細双子とも木綿綿とも云へる、綿八丈と米澤糸織との間違ひは愚かな事、千差萬別の商品が品名口座の通り傳票に記入せられるものでない、甲は乙と入れ狂ひ、乙は丙と誤られ、正確なる残高を見ることは、現在の番頭さんの教育程度では不可能に屬するのである、然しながら僕も亦奉公人である、上司より命ぜられた事を拒むなら足を洗ふより仕方がない。まゝよヤツ付けろと云ふので引受けた、然かも其時僕は日比氏にキツパリ明言した、私は正確に出来ぬと思ひます、しかし御命令ですから出来

る積りでK君を助けてやります、同君の尻古垂れる迄必ずやります。

爾來精々と朝は早くから夜は遅く迄可成り努力したものである、處がKといふ男は一寸頭の良い男で、案は立てるがサテ實行となると面白くない仕事であるから、自然努力が續かない。拙者は小僧の時から面白くない仕事に散々努力しつけて居る、辛抱する位なことから、するい書生などに負ける者でない、僕は相變らずコツ／＼と一生懸命誠心誠意でやつて居るが、K君は既にあきが來て何かもつと樂で面白い氣のきいた仕事の方に廻りたい、幸ひ僕が熱心にやつて居るから、僕に若干のアツシストを付けて、自分は秘書にでもなる積りでコツ／＼運動して居る、僕はとうの昔に是を見抜いて居るが、知らぬ顔の半兵衛で精々とやつて居る、時折彼れに皮肉をあびせかける、彼も元來負けしみの強い男でそれが頗る苦痛である、病氣と稱しては缺勤が續くが、依然として僕は夜遅くなつても、毎日の仕事をキチンと片付けて居る。

或る時日比さんが僕を呼びに來て、Kは外に廻す積りであるから、今の仕事を僕に引受

けろと云ふ、此時僕は容かたを正してキツパリ斷つた、私は自信の無い仕事を引受けるのは困ります、K君が責任者となるなら全力を傾けて是を助けます、K君が全く是は不可能であると尻古垂れる迄助けまじやう、私の考へは今も尙ほ完全に出来る物でないことを確信して疑はんで御座います、是には先生も頭をかいて、ウンそうげなあゝ！。

序ついでで甚だ相済みませんが、子供副監督を御免蒙りたいのです、
ナゼ？

私は何日迄も子供の監督をして居たのでは向上する事が出来ません、
ウム……やめてどうするかね？

英語の夜學校へ通ひます、

然し後任者が無ければ困る、君は適當な後任者が有ると思ふか？

中島君が適任と思ひます、

宜しい君の學費は全部庶務に命じて店から出してやる。

夜 學 校

爾來僕は夕方から神田の正則英語學校へ店費で通學をして居た、店費通學は僕が初めてである、何せよ終日の勞働にかなり勞れて、然かも難解な英語を習得せんとする、校長の齋藤秀三郎氏が教へる時には割合面白く頭に這入るが、平凡な若僧が教へる時にはどうも眠たくなる、夏の夕べなど一つの教室に三百人もギツシリ詰つた時には、其暑いこと非常なものである、見れば舟を漕いで居るのが中々多い。

實に此夜學校位玉石混合して居るものはなかつた、非常な英傑も此夜學から輩出するが御苦勞千萬にも此混雜の中へ、わざ／＼舟漕ぎに来るヘナチヨコも仲々多い、冬などはストーブ一つ焚くではなし其寒いこと一通りでない、外套を着たまゝ縮こまつて聞いて居る、順序もなければ秩序もない、早い者勝ちに座席を占領し、遅れた者は後ろの方に本を開いて立つて居る、實に雜然たる物である、之を要するに教へた生徒が出来やうが出来ま

いが、教師は順序通り説明さへすればそれでよい、覺えるのは生徒の勝手といふ有様、甚だ以て自由である、代りに親切氣も師弟の親しみもあつたものでない、その職業的なる點に於て、月謝さへ嚴重に納めしむれば後はどうでも宜いのである、誠に以てサツパリしたものだ。

徵 兵 檢 査

僕と雖も一年に一つ宛年を取る、丁年に達したとあつて徵兵検査の招集を受け、郷里に歸つて検査官の前に立つた、體量僅かに十貫九百五十匁、身長四尺九寸五分兵役を免すと来た、然かも僕と一緒に兵役免除の恩命に接したる者の中に、盲目が一人、偏癡が一人あつた、實に道づれが感心せぬ、何も兵隊に取られて三年間吞氣大平樂に無駄飯を喰ひたいと云ふさもしい考はないが、門前拂ひは心細い、今少し何とか愛嬌はないものか。

是では如何にも貧弱である……嗚呼！若い時には兎角煩惱の種が多い。

運 動

チンダウのバンフレットを見ると自分の發明した運動方法によつて、若い時貧弱なりし體格の持主は今や堂々たる骨格筋肉隆々として、鬼とも組まんず偉丈夫となつて其對照の寫眞が示してある、ヨシ！僕も此方法で一つ體格の改造を計るべしと、早速玩具屋から三ポンドのダンベルを買求め、運動形式日々表を作り、朝は四時頃に飛び起き、風呂場の板の間に鏡が掛けてある、其前に姿勢を正し貧弱なる裸體に猿股と腹巻を締めて立ち、型の通りに運動をやる。初めは僅かに三ポンドであり、運動の数も少ないので二十分位ですんで仕舞ふ、それから溜桶に汲んである水を片手桶で汲み出して頭から五十杯づゝかぶる。寒中水道の水をかぶる時初めは冷たく、次は痛く二十杯以上は全く感じがなくなる。水を浴びたら身體を拭かずに直ぐ着物を引掛けると、暫くしてポツポツと湯氣が立つて綺麗に乾く其時の心持ちは亦と得難いものである。運動も段々數が重なり毎半期毎にダンベルの

重量が二ポンドづゝ増加して既に十五ポンドに及んだ頃は、筋肉隆々として發達し我が身ながら見違へる程になつた。然かし運動の數は愈々加はりダンベルの重量は益々重く朝の四時から七時半頃迄も、毎日ピシリ〜と音を立てゝ續ける様になつた頃は實に其辛いこと非常なものであつた、斯くの如き肉體の勞苦は嘗て經驗せざる所である。一體人間はどの位の肉體的困難に堪ゆるものか、試みて呉れんと迄考へたものである。然し毎日此困難なる日課を終へて水を浴びた其後は、何もせず腰を掛けた丈けのことが非常な愉快であつた、甘い物喰ひたければ腹をへらせ、楽しい思ひをしたければ骨を折れ、樂は苦の種苦は樂の種、霖雨（あめ）の後に晴天を仰ぎ、悲しみの森を過ぎて幸（さい）の花咲く野邊に出る、苦痛は人に幸福を與ふる階段であるといふ尊い經驗を味ふことが出來た。

其頃僕が毎朝四時半頃から雨の降る日も雪の日も、素裸になつて腕の筋肉と胸の筋肉とが打突かる度に、ピシリ〜と音を立てゝ元氣にウンウンやつて居ると、若い連中も此艱苦と闘ふ勇ましい音の刺戟に夢を覺まして、我も我もと流行り出した。然し皆薄志弱行の

輩らである、夏は元氣にやつて居るが寒くなるとやめる、風邪をひいたと云つてはやめる半歳続いたのは川島と中島の二人だけ、結局僕の一人舞臺となつて了つた。然し毎朝の烈しい運動に風呂場の根太を踏み抜いてお叱言を頂戴したこともある、数日の閑を得て郷里へ歸つた時など、恰も嚴寒天地も凍て付く正月のことであつた、生憎ダンベルがないので體操は出来なかつたが、せめて水浴は続けやうと裏に流れて居る二間餘りの小川に飛び込んで、有合せた飯櫃の氷を割つて、流れの水を汲み込んで數杯を頭から被つて見た、實に其時の冷たさは亦格別で忽ち髪の毛からツララが下つた、流石剛情な僕も驚いて早速家に這入つた。翌朝は親戚の井戸のポンプを女中に突かせながら被つて見たが、之は亦ポツポと湯氣が上つて暖かい事昨の比ではない、兎角して難業を續けることは苦しいには相違ないが、此艱難に打ち勝つの誇りは若き胸中に抱ける希望の前途に、一道の強き光明を認むるものがある。

僕は思ひ立つてから一日も休まず一日も病まず、二ケ年と六ヶ月間打續けたが、洋行す

るので止めて了つた。

一日、不眠不休の努力は誰れもする、十年撓まさるの努力は貴い。

古家さん

古家さんは、洋服店では、相當古顔の方で位置も既に中軸以上である、商賣が洋服屋であるからスマートな洋服は着て居るが、英字は讀めないし無論英語などは話せない、昔からの小僧上りで順押しに上つて來た心太の番頭さんに過ぎない。元來が江戸ツ子で宵越しの錢は持てない方で月給を取ると直ぐに飲みたがる、それどころではない借金しては飲む何時も借金の爲めに働いて居る様なものだ、そして飲むと甚だ以てだらしが無い、何時も借金でピー／＼して居るくせに飲めば忽ち氣が大きくなる、料理が氣にいつたと云つては板前に祝儀をやる、後引き上戸でしまいには居眠りをしながら飲んで居る、料理屋でも迷惑だからそれとなく火を落しますからと婉曲に斷りに來るが一向通じない、まあ宜いじや

ないかと云つた調子でなか／＼尻が重い、漸くの事で追出されてヒョロ／＼しながら往來に出ると大道の真中で覺束なくもズボンの釦を外して御手製のビールをはちき出す、半分は往來へ半分はズボンの中へといふ念入りのボンブ、手の先きがフラ／＼してノヅルの始末が付かない、いや早手数のかゝた代物であるが、氣前は馬鹿に宜い、コラ！車屋、己れの家までやれ！御宅はドチラで？

ドチラでもかまはない！オイ急げ日が暮れるぞ、旦那御戲談でもう夜が更けて東が白みますよ、一體御宅はドチラの方で？

ウン御屋敷はソツチの方ですよつと、チチチン／＼だ！右に曲つたり左に折れたり漸くたどり付いた時分には先生とうに白河夜船、旦那サア／＼御宅ですよ、ウーイアー宜い心持ちだぜ夜風に當るのは、オイ車屋！御苦勞ソラ酒代だつ！五圓札を一枚バツと投げ出す、へい是りやどうも多分に有り難う御座います、マア御休みなさいやし。翌日先生五圓札の行方を考へて大いに萎れて溜め息をついて居る、思へば罪のない男である。

其頃僕はまだ十四歳の小僧だ、去年桐生の出張所から東京へ廻されて、今は洋服店の方で働いて居る、桐生ではMさんが出張所長で其下にF君と云ふ若い衆が居た、此二人が兩方も獨身でなか／＼の道樂者、Mさんが夕方上の梅月へF君は直ぐ後から下の青柳へ毎晩のやうに遊びに行く。稀には臺所へSがソツと来て小僧さんすみませんが一寸Fさんをなぞと云ふ事がある、今亦東京へ来て古家さんの様な代物を見る。

小僧や早くそこらを掃除して仕舞ひなと古家さんが怒鳴つて居る、へいと返事をして僕は床を掃いて揚板の中へ塵をはき込んで仕舞つた、古家さんは忽ちコラツ！と怒鳴つた、貴様そこに硝子の破片が落ちて居なかつたか？、ハイ落しの中へはき込みました、馬鹿！なぜ別に捨てない、若し塵屑を掃除する者が知らずに手でも負傷したらどうする、なる程是は僕も悪いと思つた、ハイ是から氣を付けます、ウム貴様忘れない様に差面を喰はして置くから覺えて置けと其處に有つた碼差を持つて僕の横つ面をひつばれた。僕は痛いのには左程に驚きもしないが残念でポロ／＼涙をこぼした、フン痛いか、痛けりや忘れるな。

狗鼠！誰れが忘れるものか、貴様こそ此事を忘れるな、……と心に叫んだ。

僕小粒なりと雖も日本語の通じない様な唐變木じやない、物の道理は話せばわかる、満座の中で腕力を以て弱者に迫るとは何たる卑怯者だ、それが先輩として後進を導く法と思ふか、誰れがそんな教育に服従するものか、此仇きはきつと取るぞと僕の心には深く此事件が焼き付いて忘れる事は出来なかつた。星移り物變つて店は株式會社となり、僕は海外に留學を命ぜらるゝ事二回、歸朝してから室内裝飾部主任として、製圖室に専ら室内裝飾の設計をして居た。

古家さんは呉服の賣場に廻されたり陳列場係となつたり果ては大阪支店に轉勤せしめられたが、持て生れた酒呑みのくせが禍ひして永年勤めた店も勤まり兼ねて暇を取るべく餘儀なくせられた。世間に出ては御店育ちの片輪者ななか世智辛い世の中に呑氣な事ではパンが逃げ出す、其後可成辛酸を嘗めたらしい。流れ／＼て今は如何はしい銀行の長期預金勧誘員となつて知り合の家を廻つて居る。ある年の暮であつた、僕が製圖板に向つて頻り

に考案に耽つて居たが、ひよつこリドアを開けて這入つて來たのは古家さんだ、彼はもう昔とは大分態度も變つて、ペコ／＼しながら恐る々々僕の處へ來た、ヤ！久しく御目にかかりませんが此頃は何をして居られますかと、僕もニコ／＼しながら愛想よく立つて彼の肩に手をかけた。

彼れは店を出てからする事成す事目算が外れて、慘憺たる苦勞をしたあげくに今の身に落ちぶれた事をきまり悪るげに物語りした後、誠に申兼ねるが妻も有れば子も有る、今の身の差迫つた此暮が越し兼ねるから三十圓許り貸して貰へまいかと哀願する、此男に貸した處で返す氣遣へはない、僕は三十圓包んで進呈した。

彼は亦着物がなくて毎日の仕事に困る、僕の洋服なら丁度着られ様と思ふから古いのを譲つて呉れといふ、夫れもよしと僕の家へ來る様に約束して、三着計り中古の背廣を揃へオーバコートも一枚付けて彼に與へた。與ふる者は受くる者より幸ひなり。僕は是で二十年来忘れなかつた差面さしめんの仇は見事に討つた、然し彼れに對する一掬同情の涙は僕の眼底に

光つた、聞けば其後古家さんは死んで、彼の娘はどこかで藝者をして居るとやら……。

益 さん

益さんは僕より一年程前に入店した一日の先輩で、八角時計を踏みつぶした様な不規則に角張つた顔はして居るが、無邪気で悪戯な面白い男だ、僕が新子で判取をして居る時、彼は茶番子をやつて居た。賣場で孝二郎殿が鼻に掛かつた眠むさうな聲で茶番やーと呼ぶと益さんが自慢の大聲でハアアア……と物の二分もかゝらうかと思はるゝ程な永い返事をする、當時靜かな東京の町は風の工合で此聲が空町から日本橋まで聞えたと言ふ。其頃誂方に織本といふ支配人格の八釜敷い梅干見た様な老人が居た、閑に任せて茶ばかり飲んで居る、茶番子は亦老爺が……と計り、何時もなるべく色の濃い出がらしの番茶を汲んで行く、一と口飲んで見て加減が悪いと、茶番子の手をグイと掴かんで、グリ／＼をやつたりツネツたりして仕方のない老爺である。今日も濁つた聲で茶番やーとやつて居る

益さんは今日こそと何かうなづいて茶碗棚の中に首を突込んで居る。見れば茶の中へ鼻糞の丸薬を投げ込んで、其上へ澁茶の馬鹿に濃いのを差して茶碗を盆にのせ、左の手首の内側には何やら黒いベタ／＼した物が付いて居る。

織本さんは知らぬが佛、澁茶を取つてグツと一口飲んで見たが馬鹿に澁い、ヤイ手を出せ、益さんは大人しく左の手をそつと出した、織本さんは其手をグツと掴むと、手首の内側でグニヤリと五本の指に何かベツトリついた物がある、アツと手を放すと益さんはガラ／＼笑ひながら逃げて行く。

織本さんの指には、糊に墨汁をコテ／＼と練り合せたやつが、ベツトリとついて居る。此畜生！と恨めしさうに益さんを睨み付けて、右の手をフラ／＼させて居た。

毎朝早く表番が炭俵を茶所に運んで炭の箱に開けて行く、其時必ず五つや六つは前の三和土に炭をこぼして行く、毎朝此處を通りかゝる乞食が必ずそれを拾つて背中の肩籠に投げ込んでスタ／＼出て行く小面がにくい。益さんが今朝も見ると、例の乞食がやつて

来る、早速茶釜の下の黒い大きな炭を火箸ではさんで前の三和土に投げ出して置く。やがて乞食は例の通り手で掴かんで見たが今日のは馬鹿にあつい、アツ！と其處へ投げ出した時、釜の影にかくれて居た釜さんは、多角形の顔を満面にくづして、チマー見やがれ！、乞食は顔をしかめてスタ／＼逃げて行く。

當時の先輩即ち番頭さん達は、實に呑氣な無教育な心太計りであつた、修養に志す者や向上發展の勇氣ある者は殆んど無かつた、然し世の中はズン／＼進歩して行く、如何なる風の吹き廻しか、此大勢がチラ／＼見えて頻りに煩悶する者は、十四五歳の小僧ばかりであつた。

僕と釜さんは其頃小僧仲間の投書を集めて回覧の雑誌を作つて居た、毎晩夜の十一時まで薄暗い廊下の隅で、幼稚な文章を綴つて居た。

オイ釜さん腹が減つたね、ウム、何とか工夫は無いかなア、ウム少し待て……と立上つたのは釜さんである。彼は元來惡戯者の天才である、惡戯にかけては神算鬼謀たちどころ

に成る。三十分ばかり経つと兩手に湯氣の立つ大土瓶を下げて来た、一方は茶めしで片方は湯豆腐だ、しかも寒い折柄なか／＼結構である、聞けば賄方に磨いであつた米に、土瓶の中へ醤油と水とを加減して飯を焚き、手桶に沈んで居たあしたの朝の汁の實を奴やつこに切つて土瓶むしにしたのだ、是から毎晩夜業の辨當は之ときめた、駒吉の奴は何も出来ないくせに、此茶飯が喰ひたいばかりに毎晩夜業の手傳ひをする。

田舎の農園から冬瓜を澤山送つて来た、賄方の土間には冬瓜の山が築かれた、それから毎日冬瓜攻め、朝の汁の實も冬瓜、晝のあんかけも冬瓜、いや早やたまつたものではない同じ思ひの釜さんは夜陰に乗じて是を襲撃した、彼れが右の手には焼け火箸の眞赤になつた奴がひらめいて、冬瓜の尻からズブリ／＼罪もない冬瓜は皆此焼け火箸で尻を炙ぐられて、腹の中は次第／＼に黒くなつて腐つて行く、お蔭を以て二三日の後には冬瓜攻めから救はれた。

或朝の事である、釜さんが鹽鮭の焼いたのを喰はんかといふ、辱けないと御馳走になる

其後兩三回も馳走になつた、ある日飯番の宗藏が何か頻りにブツ／＼云つて怒つて居る、見れば御歳暮に貰つた鹽鮭が、ズラリと壁ぎわに並んで掛けてあるが、皆向ふ側の半ペラが無い、ハハー益さん亦やつたな。

正月は七草の夕方であつた。中柱の前の大三寶に安置せられてあつた直径三尺大の御供へは、最早や臺所へ下げるとあつて、神棚番の助藏が満身の力を込めて御供へを持ち上げた、何ぞ計らん見掛けによらずペラポーに軽い、それも其管御供への尻はとうの昔しにゑぐり取られて、中は眞空となつて居る、助藏は饅頭笠の様になつた二つの御供へを眺めてしばし茫然として居た、遠くの方で益さんはニ／＼笑つて居る。

片山さんはもう五十以上の年配で、支配人格であるが、眼のグリツとした色の黒い、小肥りな慾の深かさうな物のわからなさうな老爺である、意地が悪くて、下役の者をいじめから、皆が曲右衛門といふ尊號を奉つた、是でも若い時分には一寸好男子で、室町の卵屋の娘に思はれて、浮き名が立つたかと思ふと吹き出したくなる、此人にしてなほ且つ此

ロマンズがある、世の中はそう悲觀した者ではない、然し片山マイナス慾と式をたてる、とイクオールゼロと云ふ答へが出るのかも知れない、こと程左様に彼れは慾深である、それで無類の臆病者と來て居る。

片山さんが宿直の晩であつた、十一時頃提灯を付けて呉服店と洋服店との接續點になつて居る長い廊下をトボ／＼藏前へ迄やつて來た、すると薄暗い廊下の天上からスル／＼ツと下つて來たものがある、見れば網行燈に紙を張つて化者の顔をかき、何か白い着物を着せた奴だ、片山さんは碌々見もせずキヤツ／＼と驚いて雲を霞みと逃げ出した、暗黒の中でガラ／＼笑つて居る化者は、どうやら益さんらしい。

明治も廿九年となり、越後屋の永き眠りも文明の風に覺めて、チョンマゲを切り拂ひ、太鼓暖簾や水引暖簾を外して十一軒の座賣を廢し、商品を陳列販賣式に改め、シヨウウ牛ンドーなどを造つて、米國の百貨店式に改良し始めた。その頃ハイカラな高橋さんが、三井銀行から轉じて此改革に手を染めたのである、その中に人材登用と稱して、是迄の様な

心太の順押しは止めになり、技倆のある者はドシドシ先輩を抜いて進むといふ道が開かれ、慶應義塾あたりから盛んに學生が店員となつて這入り込む。茲に新舊の軋轢が起つた、僕等はもう心太の番頭式には愛想がつきて居るので、兎角新智識の書生さんに親しみが多かつた。その頃僕と益さんは、シヨールウキンドーの裝飾を引受けて、西洋の雑誌を見たりなどして色々な事を試みたものだ、鐘どんが亦仲間の一人であつたが、此男が亦クレバーなもので、メカニカルムーブメントは大概君の工夫に成つたものだ、飾り換への時になると僕はチャント計畫を立て、先づ圖案を作り、それから取毀すのであるが、益さんは行きなかり叩き毀はして、それから考へながらどうにかかうにか纏めてしまふ。彼は行き當りばかりであり、何でも來いである、縦横自在即興たちどころに湧き出る天才である、そして彼は永久的の建設より一時的のマヤカシ物が得意で、廻り燈籠の様な眼まぐるしい變化を樂しみ、僕は亦深く考へて百年不變の永久的建設を喜ぶ、彼は好んで柳暗花明の里に遊び僕はこれに近付くを懼る、彼は大風に灰を撒いたるが如く取留めがない、我は重箱に詰め

たる赤飯の如く、逆さにして尻を叩けば、四角のまゝ型もくづさず飛び出さうといふ、性格に於て正反對、然し彼は彼たり我は我たり、四十年間未だ曾て争つたこともない、仲の宜かつた萩原光質や本莊義美は、店を辭して北海道に行き、關口省吾や成澤十四三は米國に行く、取残された僕等は何だか意氣地がない様な氣がして尻がムヅ／＼した。

明治三十五年であつた、とう／＼益さんも米國は紐育へ飛び出した、勿論店と縁を切つたわけではなく、半分自費と云つた様な形式で出掛けたのだ、せめて二年も留學するかと思つたら、半年たゝぬに歸つて來た、先生の事だからゾーツと一通り視察して要領を得たことであらう、碌々言葉もわからぬ亞米利加に永くマゴ／＼して居るのは氣が利かねーと思つたのだらう、西洋料理が鼻に付いてお茶漬けが喰ひたくなつたのだらう、濱町あたりに逢ひたくもなつたのだらう、付度すれば際限もない。是を皮切りとして其後度々彼は西洋へ仕入れに出張した、英國に佛國に獨逸にオースタリヤに露西亞に米國に、言葉の碌にわかりもせぬ彼が死にもせず、相當に要領を得て品物を仕入れ使命を果たして居た、

矢張り彼は只の小僧ではない。

その頃僕は店費で正則英語學校に通つて居たが、明治三十七年七月室内裝飾研究の目的で、歐米へ留學を命ぜられた、米國に一年英國に一年半研究して居たが、巴里大使館の仕事を受けて十ヶ月間程歸朝し、再びシベリヤを経て巴里に出張し用件を果して後は再び研究に入り、前後五ヶ年の歳月を外國に暮して歸朝し、僕は室内裝飾を丁君と共に創立經營し益さんは商品部主任兼ウキンドー・デコレーターとして活動して居た。

大正三年の博覽會の時であつた、益さんは久原三井其他各會社から博覽會裝飾の依頼を受け、いやとも云はれず引受けた數が、あまにり多くてどうやら手廻り兼ねるらしかつた明日は開會といふ前の晩會場へ様子を見に出掛けたところ、丁度店のショーケースは出来上つて飾るべき品物は呉服部から持込んで早く飾つて欲しいと待つて居るが、裝飾係は一向に廻つて來ない、僕は其時全くの門外漢だが少々氣になるから彼方ら此方らと見て廻つた、益さんは今工業館で車輪に指揮をして居るが、仕事が多過ぎて到底手が廻りそうもな

い、僕は其儘歸つても差閫はないのであるが、明日開會して獨り店のケースが飾つて無くては不體裁此上もない、突然のこと甚だ困るがこの儘には歸られない、ヨシーとつ遣ッ付けると、飯野君を相手に昔とつた杵柄で店の裝飾に取掛つた、見て居た呉服部の人達はこれでホツとしたらしい、とうとう苦心慘憺して出来上つたのは夜の明け方である。同業白木、高島屋などは未だ頻りにこね返して居る、益さんは僕がやつて居るのを遠くでチラツと見たらしかつたが、頼むとも何とも云はずに行つてしまつた、親友が無言の助力を彼は心の中に感謝して居たに相違ない、僕が手を付けたらもう安心と彼は思つたらしい、その時僕は逆さまだが、持つべきものは友達であると思つた。

ほのぼのと明けそめた東の空を眺めて漸やく店へ引揚げた時は、重荷を下した様な宜い氣持ちがした、すべて人は最善の努力を盡した後は、事の成敗に論なく心中頗る愉快なものだ。

益さんは未だ部下と共に奮闘して居る、平常店に居る時はブラリブラリとして滅多につ

かまらぬ男だが、一朝事あれば夜が明けても平気で働く、到底方圓の器に従ふ代物でない。確か僕が二度目に洋行する時であつた、日露戦後でシベリヤ鐵道は未だ道が開けたばかり無論旅行する者は極めて稀であつたが、僕と益さんと二人で出發することになつた、そして僕が新橋のステーションに来て見ると、見送りの人は大分見えて居るが益さんは未だ來ない、今や汽車が出やうとする時飛び込んで來たのは益さんである、この男は何時もこの傳をやる、時間がギリ／＼一パイになるまで、新橋のや柳橋のとふさけて居る、さて無事に飛び込んでヤレ／＼と思ふと、アツ！ 旅行券を忘れた、露西亞は旅行券なしでは一歩も入國することが出來ない、早速横濱から電報を打つて後から持つて來る様に命じたが、落付いて時間表を調べて見ると、敦賀出帆に間に合ふ便がない、結局益さんは取残されて更に一週間便船を待つことになつた、僕は心寂しくも一人戦後のシベリヤを一番鎗と進軍した。

一方益さんは名古屋まで引返して、お馴染の藝者を集めてスツチャン騒ぎ、處へ電報飛

來直ぐ歸れ！、イヤ早や東京へ歸つて御大日比にお眼玉頂戴。兎角多少の缺點はあるが亦と得難い代物だ……と、虎の子のやうに愛せられたも無理ではない。

落合先生

敢て先生の尊號を奉る、川柳の所謂先生と云はるゝ程の馬鹿ではない事勿論である、先生は元北海道で小學校の訓導をして居たそうであるが、氣のきかないくせに存外の野心家である、一攫千金を夢見て、北海道では有名な鱒網に手を出して、なけ無しの小錢を櫛つて了ひ、不義理の借金も出來たとかで、一家を疊んで東京に出て來た、そして職を求むる爲めに店の庶務人事係の前に立つたのである、その時應接したのは秋藏といふ六尺豊かの大男だが右の人差指は半分しかない、智恵の分量も亦人差指に似て少々足りない様であつた。

何か私に適當な仕事はありますか？

そうですなア使出で車を挽くんですがどうです？、車を挽く！……フム！……。

（）やがて先生は小供監督として入店した、其頃は段々小僧の數も増加して八十人程になつて居た、今迄の監督は最上さんといふ天下の奇人で、教育もなければ理想もない、常識もなければ徳望もない、元より人を教へ導く才能など有る筈がない、善人ではあるが偏狹な感情一片の人である、眼玉のグリツとした出ツ齒が特徴の人であつた。

落合先生は此人から小供を引繼いで甲乙丙の三組に區別し、時間を定めて夜分教育する事になつた、實に小僧に對して教育の道を啓いたのは此時からである。暫らくして僕は兼小供副監督を命ぜられた、一人では到底手廻り兼ねるからである、宜くいへば勤直、悪くいへば老爺地味で居るといふので僕に白羽の矢が立つたのである、副監督と云へば女房役差詰め八十人のお母様、なか／＼大變な事になつたものだ、僕は全體小僧上りだ、格別纏まつた教育を受けたことはないのであるが、只僕と同じ運命の下に獨立自活の第一歩を踏み出した少年の前途に對しては、多大の興味と深き同情を有する者である、凡そ物事の研

究は人を教へるよりよきはない、教ふる前には必ず深き研究を要するからである。

僕は親切なる兄となつて數多の弟達を導く積りで一層謹嚴ならざるを得なかつた、僕と先生とは八十人の小僧と寢食を共にした、夏の夜などには食傷で苦しむ者、下痢に悩む者脚氣でうなる者、大勢になるとなか／＼世話のやけるものだ、先生は籤醫者の様に熱を計つたり脈を見たり、時に或はヒマシ油位醫者に聞かずに飲ませたものだ、脚氣患者を夜中看病したこともある、其時分の小僧は割合に歩止りがよく、素質も宜かつた、今も各方面で主要な地位に或は中堅となつて居る、蓋し其時分の教育法が前後を通じて最も熱があり且つ理想的であつたと思ふ、人生意氣に感ず、豈に教育の量の多少のみを論ぜんや。

僕等の部屋は臺所の二階の大廣間で、東北の隅に十疊計り仕切つて眞中に昔の看板で造つた樺の机が二脚角火鉢が一個若干の書物、後ろの押入に夜具と衣類、裝飾と云へば四枚の襖に、僕が自ら丹青をこめた山水の風景畫と、綴山東洲の書いた白樂天の詩と、東坡の詩が横手二枚の襖に墨痕淋漓、是が全體の道具だてである。其處で二人は毎日交代に自炊

をしたものである、敢て儉約の爲めのみでない、是も亦一つの経験と思つたからの物好きである、自炊と云つても殆んど他炊で、飯は小使が焚いてくれ、新香は店へ出入の車屋の親方高久さんに頼んで運んで貰ふ。只三度の惣菜を作るのが精々自炊と稱する範圍なのだ。僕は元來貧乏人の家に生れた丈けあつて、平常父が炊事をするのを目撃して居たし、自分も料理には趣味を持って居たから、喰へる物を提供すること位は、さのみ困難を感じなかつた、茶碗蒸が出来る、月見玉子が出来る、鱈とうどの甘煮が出来る、牛肉の煮込みなどは餘程窮した時の材料であつた。

然るに先生の番になると、座禪豆か佃煮か鹽鮭の焼いたやつなどは上の部である、何か變つた工夫をされた日には大變な物が出来る、いつであつたか變手古な汁物が盛つてある、汁がドロ／＼して少し生臭い、何やら質を喰つて見ると、薩摩芋と相手はどうやら餅の様だ。

オイ是は一體何といふ料理だい？

ウム、そうだなア、先づ芋鮓とでも云ふかなア。ウフツ是は奇抜な料理だが、一體何だつて此んな變手古な代物を拵へたのかい？

何アに葱を買ひにやつたら葱が無くつて、小使が見計らいで芋を買つて来た、面倒臭いから叩き込んで汁にした。片栗めんが無いからとておかめの面を買つて来る手合ひだ、凡そ料理番に面倒臭がられた日には喰ふ奴は災難だ、是から先はどんな化物が飛び出すか分らないと心細くなつて来た、高久の娘にハツちゃんといふ七ツになる鼻たらしが居た、これが毎日蓋物を取りに来ては新香を運んでくれる、處が先生來ながら風呂敷き包みの蓋物を振り廻して彼方へ打付け此方へ打付けするから忽ち鯀ヒコが入つて毀れて仕舞ふ、鹽味噌の茄子を喰つて見るとガチリと音がする、蓋物の破片が交つて居るのだ、脚氣になつた鶏ではあるまいし瀬戸物のかけは閉口だ、度々蓋物を割られた日には、新香もなか／＼廉く付かない。

落合先生は右の眼の上に眞赤な痣があつて、然も非常な近視眼、右が三度で左が十二度

字を書く時など紙に顔を押し付ける位である、とう／＼木偏を鼻の頭に書いてしまつた事があるといふ、まさかそうでもあるまいが北海道に居る時分、田圃中を夕暗の黄昏時に歩いて知らず前に居る者に打つかつた、誠に済みませんと頻りに謝罪したが、何ぞ計らんそれは馬の尻であつた、兎も角餘り好男子ではない寧ろ随分まずい面の持主だが、年は若いし酒も少しは飲めるし色氣もある、銀行から廻つて来た西川君と堀井君とは、先生の飲み仲間時々は柳花一圓の春も買ひに行くことがある様子、然し元より極内である、先生は僕を木佛金物石佛け色里の様子などは、一切萬事御存じないと思つて居る、所が何ぞ計らん先生位を觀破するのはお茶の子だ。

君、今日は家に用事があるから一寸頼むぞ、と出て行く様子がそわ／＼して居る、彼は元來正直な男だ、實は奴の處へ一寸行くのだと顔に書いてある、翌朝ボンヤリ歸つて来る僕は早速堀井君の顔を見に行く、格別變つた様子もない、それから西川君の處へ行つて見ると、西川君はチトフラ／＼して居る、テツキリ相手は此奴だと思ふから一寸鎌を掛ける

オイ西川君昨夜は落合君と何處へ行つたへ？ウム君知つてゐるのか、ハ、例の通りの北方さ、ヨシ是で悉く要領を得た、晝にはチャンと鳥録から親子井が二人前取つてある、オイ落合君御馳走が來てゐるよ、昨夜は僕を欺いて西川と北の方へ行つて、飛んだ用事を済ませて來た罰金だ、此仕拂は君がするんだ、ワー知れたか、ヒツテイ奴だなア！其後屢々此手でやつた。

僕は將棋をさすが落合は碁を打つ、之ではとんと話しにならん、處で僕が落合に將棋を教へて見たが、到底指せる様になる見込がない。そこで僕が落合から碁を習つた、筋道を聞いて初めは暫らく六目で打つた、此方が遙かに物になる、やがて段々上達して二目となり先となり互先となり、終ひには向ふが六目置く様になつた、いや早や恐らく天下に此位弱い男は無さそうだ。

小供監督は其頃庶務係に屬してゐた、時の係長はUといふ男であつたが、髭の中から眼鼻が出てゐる様な顔で玩具の熊公に似てゐる、そこでテテベヤーといふ稱號を奉つた、其

頃は未だ電話も少なかったが、四五人の婦人店員が電話番号として庶務に属してゐた、其電話番の中にKといふ博多人形の花魁に似たのがゐたが、此花魁とテテベヤ一の間にローマンスが織出された、或日僕は自炊の當番で晝飯の惣菜を作るべく、臺所の二階の自分の部屋へ上つて来た、どうやら誰か僕の部屋にゐる様な氣配がする、可笑しいと思ひながら部屋の前迄来ると、ガラリと襖を開けて飛び出したのはテテベヤ一である、何か非常に狼狽した様な様子でへどもどししながら、ヤア！今病人があつてね、と部屋を指差してコソコソ下へ行つた、様子が少し變だとは思つたが、その儘部屋に這入つて火鉢に鍋を掛けながら見ると、例の花魁が僕の座蒲團を枕にして横になつてゐる、僕は別に其時怪しみもせずにおイKさんどうかしたのかい？ハ一少し氣持ちが悪う御座います、と小さな聲を出してゐる。僕は自慢の寄せ鍋で晝飯を喰ひながら落合の分を残して、長居は無用サツサと下に降りて来た。

それから一週間程経つと僕は米國へ留學の命が下り、同時にテテベヤ一と電話の花魁は

兩成敗とあつて、この玩具箱から放り出された、そこでテテベヤ一は僕が密告したのだと云つてゐるそうだが、本人の僕は全く知らない、誰か外に彼等のローマンスを報告した者があるに相違ない、今にして之を思へばあの時には神聖なる拙者の部屋で、助平なる玩具共が怪しからぬ自然主義を享樂して居やがつたのだ……狗鼠！今更怒つて見た處がもう手遅れ。

僕は一人者の氣輕さ、旅装も心持ちも輕々と、スタコラ米國へ、後は野となれ山となれテテベヤ一は玩具箱から投げ出されて家へ歸れば大騒動、ヒステリーの妻君が流れ河へ身を投げて死んだとやら助かつたとやら。著まめもなく禍ひなものだ、彼奴ツ其時は眼を白黒させてゐたらうと思つて、後で聞いて吹き出した。

歲月流るゝが如く米國と英國に二ヶ年半浮き世の浪に散々もまれて、而も今度は大きな責任を負はされて、印度洋を廻り遙々日本へ歸つて来た。僕の留守中二年有半の間に亦一つのローマンスが染出された、電話番号の女店員中にHといふ未亡人がゐた、聞けば子供も

あるとやら、年はまだ三十二三其頃流行つた改良劍舞でもやりそうな女だ、然し人間は確かり者らしい、之が我が落合先生と戀に落合つて又兩成敗、改良劍舞の割鍋に近眼先生のとち蓋、軍鶏と家鴨の夫婦連れは「此處へ來う」と云ひながら、住み馴れた鳥屋を出て行つた黒板扉から花道にかゝつて、
美登志をぢや！、落合さん！
と云つたかどうか……。

僕は十餘年來の友人を店から失つて心中甚だ寂寥を感じた、然し今はそれ處でない、僕に取つては榮辱浮沈に關する大事業に熱中してゐる、やがて其仕事も一段落となり、戦後のシベリヤを一路巴里へ向ふ旅人となつた。

歲月更らに二ケ年半、夢の如くに過ぎ去つて歸つて來た時には、落合先生も家庭の係累に禍ひせられて、散々流浪の辛酸を嘗め、高利貸しに苦しめられて四苦八苦の状態と聞き以前同氏に世話になつた連中に奉加帳を廻し若干の資金を集めて、首を締めてゐる高利貸

の縄目を切り放した。

其後先生は滿洲に渡り營口に足を留めて藥屋を營み、無智の支那人に大人々と尊められ、鐵井竹庵先生タカチヤスターゼやピオヘルミンを勿體らしく投藥してゐるそうだ、今では土地でも有力者で押しも押されもせぬ藥屋の旦那様、商業會議所の副會頭殿で納まつて居らるゝそんな、イヤ其後死んだといふ噂も聞いた……其後はトンと音信もないが或はそれが事實かな。

工場監督

洋服店の後には三和土の廊下續きにかなり大きな仕立工場がある、毎日百人位の職工が出入してミシンの音が賑やかだ。瀧口さんは此工場の監督をして居るのだが、年頃はもう六十近く、間口は馬鹿に廣いが奥行が薄ツべらで、丁度張板に手足を書いて切抜いた様な腰の曲つたよぼよぼした人だ此奥に眼ありといふ金壺で齒のグラ／＼した髭面の老爺である

幸どんお前はほんとに小粒だねーと他愛もない事に染みく／＼感心して居る。

小粒でも瀧口さんには負けなよと僕はやり返す、ハツハツハーアにチビが、ヨシーそんなら一ツ相撲を取らうか。

五尺七寸と四尺三寸は工場の板の間でヨイショツと取組んだ、僕は呼吸を計つて右の足を向ふの内股に突き突み、左の足をからんでグンと押した、ドスンと云ひたい處だが瀧口さんは、安物のポール箱を落した様にガサリと倒れた、腰の骨を机の足に打ち付けて、顔をしがめ暫しが程は起き上ることも出来ない、周囲を取巻いた職工達は手を打つて大笑ひ、僕は年寄を可愛そうなことをしたと思つて、早速瀧口さんを助け起して痛む腰をもんでやつた、どうも済みません御免なさい、まさか吐言も云へないと見えて苦笑して居る。

寄る年波の瀧口さんは永く勤めも出来なかつた、代つて現はれたのが素的な千兩役者だ、姓を中村名を茂兵衛といふ、十九歳のあげまきから臺所の隅にくすぶつて爾來茲に三十餘年、僕などは今一べん母親の腹に逆戻りして、更に出直して來ても及ばぬ程である。先生

本名を莊吉といひ、飯番めはんで此店に奉公して名を壯藏と改められ、更に出世して壯助となり累進して壯兵衛となるに及んで、先輩に石井宗兵衛といふ番頭さんがあり、これに敬意を表して茂兵衛といふ、親から貰つた本名とは似ても付かない上等の名前を賜はつたのである、小使格として位人臣を極めた者であるが、今は準店員格となつて居る、忠臣藏なら差詰め寺岡平右衛門といふところだ、此人の頭の禿工合が芝居の熊谷に似て居るので、熊谷といふ尊號を奉つた、此人自慢ではないが讀み書きが出来るではなし、常識が有るではなし、力技ちからわざをするには少し年を取り過ぎて居る、只グチ／＼と筋も通らない小八釜しい口吐言をいふ位が關の山の藝當である、随つて監督といふよりは、番人といふ方が適當かも知れない、職工の受けが宜くないのでは是も永くは勤まりそうにない。

第三に現れたのが最上といふ再勤者、此先生は元小供の時分から永年勤續して相當の地位になつたが、何かの都合で暇を取り暫らく世間にフラー／＼して居たが、元來が御店者かみりや世間に出て飯の喰へる氣遣がない、再び元の古巢へ舞ひ戻つたわけであるが、曾て自分の後

輩であつた人達が、今は上の方に居るので振はざること夥だしい、そこで暫らく中村さんの熊谷と一緒に、工場監督に來たのである、此男が亦天下の奇人でお天氣屋だ、機嫌の宜い時には頗る善人であるが、癪に觸つたら手が付けられない、半氣ひと云ひたいが本狂ひだ、よく／＼工場監督には變人を集めたものだ、そして此出齒の最上君と熊谷の中村君とは生れながらにして敵同志だ、同じ處に居りながら口を利いたことがない、曾て最上君が賣場員で威張つて居た時分、中村君は使ひ出しの外廻りで、小ツビドクやられたものだ、勿論其當時は手代と小使で資格が違ふ、如何に皮肉になぶられても齒が立たなかつた、然るに今は資格が轉倒して、相手は尾羽打枯らして自分の足許に屁古垂れて居るのである、小人熊谷たるもの此時に於てか、昔の仇を存分に討たざる可からずと手ぐすね引いて居る出齒の方では何アに此畜生昔は飯番めはんの壯藏じやないかと鼻の先であしらつて居る、夫に兩方が偏狹の半狂ひと來て居るから、折合ひの付く筈がない、處で此狂ひと狂ひの間へはさまつたのが僕といふ惡戯者である、何か問題の種を蒔いては二人をけしかけて喧嘩をさせ

る、之が又無類面白いのである。

或る時五六人大火鉢をかこんで雑談をして居た、フト熊谷がこう云つた、私も永年店には御奉公したが、五十になつたらやめ様かと思ふ、此老爺ふざけた事を云ひ居るわい、一つトリツクにかけてやらうと思つた。

中村さん貴方は随分永いこと店に勤めて居なさる様だが、もう何年になりますね？

そうさね、もう三十三年になりますよ。

へエ女なら厄年だ随分永いなア、それで貴方は幾つの歳に店へお這入りになつたんですウム十九の歳でやした。

ホイそれじや貴方もう五十二歳だ、一昨年おやめになる處でしたね、今じや一寸手後れだが辞表をお書きなさい、僕が支配人に届けませう。其時出齒は眼をギョロツとさせたが破顔一笑幸殿上手い！、熊谷どうした！とやつた、一同ドツと來る。熊谷先生満座の中で背負投げを喰つて烈火の如く憤つた、禿の頂邊は見る／＼青筋がうね／＼と持ち上つて湯穿

が出そうだ、然し何とも仕方がない、ギユツと僕を睨んで舌打ちをしながら、小シヤいぐせにシャガツテ！、僕は只にこ〜。今度は出齒と唾つばみ合ひを初め、有り合せた大火箸を振り上げたのである、出齒は立上るとクルリツと後を振り向て尻をまくり、號砲一發忽ち一陣の臭風来る、臭いと振り下したる火箸の下をく〜つて出齒の奴は雲を霞み、遠くの方でガラ〜笑つて居る。

之が互に五十面つら下げた老爺だから尙ほ可笑しい、餘り二人の折合が悪いので、中村さんは店の方へ出て諸官省を廻る様に命ぜられた、今度は相手が無くなつたので波風甚だ平かになつた。夏の日も傾いた三時頃であつた、工場の臺の上に大事な處を丸出しにして寝て居る者がある、近付いて見れば出齒の最上だ、餘り傍そばで見ても羨やましい様な恰好でない、それから有合せた細引で足を臺へ縛り付け、眼玉に赤い紙を貼り付けて見たが未だよく寝て居る、土瓶を持つて来て大切な處へお茶を掛けて、机の下へ這入つてガタ〜ゆすつて見た、アツと聲がして起きたらしい、僕は素早く身を翻へして逃げてしまつた。

暫くして知らぬ顔の半兵衛でブラリと来て見ると、政どんといふ筋ッほい、出齒とは平常仲の宜くない小供をつかまへて、貴様だらう悪戯らしやがつたのは、幾ら重役の子だつて、そんな事しやがると承知しないぞ！、僕はのそ〜出て行つて、オイ最上さんそんなに怒るな、足を縛られるのも知らずに寝て居たんじや仕方がない、反つて君のアラが出る怒るな怒るなと肩を叩いてやつたらケロリとして、ウムそれもそうだな。

此男僕が口を利くと直ぐに怒りを納める、誠に單純な可愛い奴だ、思ふに僕とは意氣がよく合ふのだらう、イヤ飛んだ奴と意氣が投合したものだ。其後熊谷は印刷局や陸軍省上野の鐵道會社など廻つて居たが、請求書一枚書くのが覺束ない、それでゐてなか〜のホラ吹きである、何時であつたか王子の製紙所へ納品に行つた歸りがけ、既に汽車に乗り遅れ様とした時やつと駈け付けて間に合つた、歸つてから其話が面白い、私が王子の停車場へ駈け付けると、汽車が煙りを吐いてもう出掛けやした、それから私が大ケな聲でオイ待つてくれ、三井の中村だつて怒鳴りやすと汽車が止まりやしたから、柵を飛び越えて

乗つて來やした、鐵道會社でも皆んな私の顔知つて居やすで、こういう時には都合が宜う
こわす、愈々之で熊谷も本物になつた。

中村さん例の殘金は取れたかね、ハア昨日掛合に參りやした、先方でも私の顔を見て何
だてやらかんだてやら云やしたから、私はがなつてやりやした、ヲコスヲコサンは兎も角
もカケツケオコスとか品物ヲコスとかせんにヤスカタラヘンと座り込みやした、相變らず
變な事を云つて居る、店では皆顔見合せてクスリ〜。

ある處へ蚊帳を中村さんと納めに行つたことがある、水が廻らない爲めに検査が馬鹿に
嚴重で、左程でもない物を不合格にするから直し物が多くて困る、検査人が臺の上に乗つ
て検査をして、合格と不合格を右と左に投げ出す、僕と小使は臺の下に居てそれを疊んで
居る、僕が合格と不合格とを臺の下でちよい〜すり換へる、知らぬが佛の検査人と中
村さんは正直者だ、頭から湯氣を出してホウ〜やつて居る、やがて不合格の分は車に積
んで仕立直しに搬出する、中村さんは搬出せられた二三十張の蚊帳を見て、こんなに直し

物が多くてはホントニ、スカタラヘン、僕はクス〜笑ひながら、中村さん之は皆合格品
だよ、流石の熊谷アツと云つて驚いたが、満面に相格を崩してウムヤツタネ〜、今日は
馬鹿に御機嫌が宜い、翌日はその儘再検査！合格々々。之あつて後彼の峇喬ン坊（ケチンボウ）の熊谷が
日本橋の立場茶屋で僕に晝飯を御馳走した、餘程嬉しかつたと見える、思へば稚氣愛すべ
き男だ。

呉服店の方では綿方（わたがた）の嘉兵衛さんが寄る年波でポツクリ死んだ、其後任とあつて我が愛
すべき中村君が轉仕した、堅い頭の老爺が柔らかい眞綿を引ツ張つて居る、之で頭が幾分
か柔らかになれば結構だが、とても死な〜けりや直るまいやれ〜。

明治廿九年には洋服店の商賣が引合はぬとあつて閉店し、係員はそれ〜呉服店に役換
へせられた、同時に中村君は外賣に殘金取立係として轉任し、最上君は其後任として綿方
へ廻つた、よく〜兩人は縁が深いと見える。中村君の熊谷とは其後交渉がないので變つ
た材料は少ないが、最上の出齒は相變らず例の持前を發揮して居る、最上さんお忙しそう

ですな、明朝迄には此綿の進物は出来ませないな、ア、いやチツとも忙がしくはない出来るよ！と来る、最上さん此進物は明朝迄には是非届ける約束なんです間違ひなく願ひますよ間違ふと困るんですから宜う御座んすか、出来ない忙がしくて出来ねえ、それじや困るんです、何とかありませんまいか、筥棒め出来ねえつたら出来ねえ、グツ／＼して居ると引つぱたくぞ、忙がしい處へ來やがつて。こう云ひ出したら挺子でも動かかん、ホト／＼困つて僕の處へ頼みに來る。

最上君どうしても出来ないかい、ナニニ出来るさ、云ひ草が氣に喰はんからコツビドク跳ね付けて呉れたんさ、それじや御客様に對して悪いよ、己れに免じてやつて呉れ、ヨシ引受けた。

實にこらいふ代物だ、之も死な／＼けりや直るまい、其後花は咲き花は散り最上君も中村君も亡き人の數に入つた、三途の川邊で殿り合ひでもして居るだらう、此喧嘩ばかりは當分留にも行かれまい、店でも此際ある點に於て誇るべき天下の難物が二つ片付いて、稚氣

愛すべき波瀾が少くなかつた。

お樂さん

お樂さんはある學者の未亡人で、其頃まだ三十になるやならず、金縁眼鏡に束髪でどこかツンとして居る處は、成る程學者の未亡人らしい、お茶は何やら千家、花は木偶の棒イヤ池の坊奥許しか師範代か、但しは御一人様御飯臺か、何やら牛肉屋の女中が怒鳴りさうな御身分でいらつしやる、之で此先生か聊か商賣氣を出して主人歿後に、小間物店をさる處に出したと思ひ給へ、其處へ兼ねて知合の某が御義理とあつて楠を一枚買ひに來た新店の御内儀さん之が生れて初めての御商賣で御世辭ダラ／＼、元が幾らで賣直が幾らですけれど、貴女のことですから幾ら幾らに致して置きませう、マアそれより一寸御上り遊ばせ、それ御茶よ御菓子よ御壽もじよ、御辨當はお美味くなくも御うなが宜いと、丸でお芝居見物宜しくの體たらく、之で算盤がとれたら天下の奇蹟だ、幾ばくならずして忽ち閉店

やつぱり天下に不思議はない。

そこで今度は職業婦人、今でこそ何でもないが其頃では一寸新しかつた、錦中庵の前にキッチンとすまして、濃い茶薄茶は御望み次第梅干も候ぞ。花は投げ入が御得意で取分け籠に生ける秋の材料が宜い、僕も見るのは好きなので、時折生ける手前を拜見に出かける、下手の横すき将棋の助言、オツとそれでは鎌倉河岸、イーエ之は立花と云ふものよ、いや失火でなくつて大仕合せ、澤山／＼それぢや御馳走が多過ぎる、金とん伊達巻玉子焼き、ア！其位ひ／＼それならキワダの刺身に茶碗盛り、丸で料理屋の夢でも見て居る様な批評が初まる、鉄みを小器用に持つてパチン／＼と不要な枝を切ッ飛ばす、あいつがなか／＼難かしい、僕だつて鉛筆の先なら一寸器用に生けても見るが、シャツチョコ張つた木瓜の畜生と來ては始末に負へない。

先生時折得意になつて、之れ一寸宜いでせう、筥棒に大きな聲を出す。

其頃〇〇君がよく三木何とか云ふ待合の女將と、一緒に錦中庵の四疊半裡にたて籠り、

あはいの襖ハツタと締め切り秘かに御飯の御接待、果ては打つたり抓つたり、膝小僧のグ／＼をやつたかやらぬかそれは知らない。

一度ならず二度ならず、度び重なれば中々に妙な噂も龍の口、主は一としほ數寄屋河岸それで相手は馬場先門、小判はどつちが出すのやら、追手聞かなきやわからない。襖一重が黒がねの、外には獨り宗匠が、膝も崩さず宿直の役、中なる音を聴きながら、眼だけグル／＼丸の内、日比谷の池に鶴が居るあれ龜が居る、ハテ珍しい眺めぢやなア！處へフラ／＼と僕が來て、澁茶一つと首を出す、宗匠無言に茶をついで、眼付きでそれと物を言ふ、フム！又か、後日の爲めに出て來る處を一應篤と見届けて、何かの時には一本御免と參らせんと、よくない考へをフラ／＼と起し今か／＼と待つて居る。處へ又天下の横紙破り京育ちには不似合な鼻ツ柱の馬鹿に強い丁君がやつて來た、三人揃つてヅラリと列んだ天下の悪者、折からスラリと障子が開いて、〇〇さんは三木の婆さんを後に從へ、三人の方には眼もくれず、ソツポを向いた横着者、狐の様に出てうせた。

エヘン！、凡そ人の行は、耳より入るものに非ずして眼より入るものなり、汝家に在つては妻を欺き子を欺き、店に在つては重役を欺き店員を欺き、京都の奴を欺き新潟の猫を欺き、新橋の小指を欺き柳橋の杓子を欺き、果ては汝自身を欺くとも、我等の眼を如何せん！新派の大根が見得を切る。

大阪の支店では堂々たる新築が落成して、百尺の屋上に箱庭の様な茶室が出来た、山縣公の筆で凌雲亭と記されてある、そこで差詰め確かな手前の宗匠が必要とある。利久頭巾に十徳羽織の梅干より、七三金縁のうば櫻、新しい様な古い様な、お堅い様なお柔らかない様な、フンワリとしたゴムの様な女性が宜しからうとあつて、東京の葉櫻は根こぎにせられ、浪花の籠へ投入れにされたのであるが、惜しい事には水が足りない、稽古に生けた紫陽花の、水揚げ兼ねたる風情である、どうせ永くは續くまい、果せるかなお樂さんは一年か二年で足を洗つて了つた。

住み馴れし都を棄て、遙々と、一人浪花の旅枕、紙より薄き人情の、親切とは口ばか

り、一も二も金三も金、御金がなければ埃及や土耳其の榮華は跡もない、如何にあづまの客ぢやとて、金の切れ目は縁の切れ、そないに世話はやけやせぬ、口に云はねど眼に知れて、永居は無用おさらばと、親はらからや鳥が鳴く、あづまへこそは歸り行く。

之でお樂さんの大阪生活は市が榮えた、かう云ふと大層人ばかり悪くて、御自分は體裁が宜いが、物事は必ずしもさうでない、實は血の出る様な御寶で拵へた東京の家が、戀しいお樂さんの家と云ふのは、キ印で名高い巢鴨の片ほとり、妹婿は武石さんといふ藝術家の邸内で、何とかいふ茶室の大工が、如何に廉く造らうかと慘憺たる苦心の作だ、丸窓に霞みの棚、向ふに細かい骨の障子を箆めて、ポツと骨ツほい蔭でも寫して見て、樂しまうと云ふ寸法なのだ、傍で見ては左程でもないが御本人大満足、それ計りではない、傍には玩具箱を引繰返した様な大家族の賑やかなのが居る、乾してあるおむつが風に翻つても問題にして、キャツキャと笑ひこけ様と云ふ無邪氣な手合だ、それに武石さんは天下の善人普請が好きで植木を育てる事が好きで、料理する事が好きで御酒が好きで、人に御馳走す

る事が好きで御婦人が好きで、借金がウムブル〜。エー閑話休題、エヘン、それから土をこねたり石を叩いたり、ヤレ〜毎日精々^{せつせつ}と忙がしさうであるが、存外お金が出来さうにない、勿論傍にお樂さんといふ軍師が付いて居る、例の小間物屋流の算盤で行くからたとに残る心配はない、イヤ之は話が妙な處へ戸惑どへをした、元へ戻つて出直します、さてお樂さんは今浪人の身、武士は喰はねど高楊枝、すまして居ればお釜が錆る、茲は一番奮發して腕に覺えの一刀流や小原流、さては古流に遠州流、眞影流に自慢流、他流仕合ひの道場荒し、彼方の富豪や此方の貴族と、段々殖える得意數、辨天様も何のその、餓鬼の時から手癖が悪くも何ともない、見れば小さな竈だが、立つる煙りは太くなり、近所ちや小火かと間違へた。

借も其後去る程に、大正十二年は九月の一日、天地も崩るゝ大地震、彼方の山々此方の峰々、一度にドツと臺灣坊主谷を埋めた物凄さ、折柄彼女は小湧谷の、M氏の別荘に避暑と洒落込んだ罰が當り、進退竝に谷まつたが、尻端折つて峰づたい、M氏の御供で京都に

こそは逃げ延びたが、彼女は更らに勢ひに乗じて下の關迄走つて了つた、何んぼ江戸の火事がこわいからとて下の關とは馬關遠い、暫らく門司々々して居たが、又も馬關を迷ひ出で、いつかは巡り大阪の、咳は工場の煙り故、京をうしろに近江路や、琵琶湖の月を横に見て、残り少なき三井のかね、遣ひ果して二分残る、之で都へ行けるやら、晩の御飯は抜きにして、都へこそは舞ひ戻る。

今では震災成金とあつて、彼方の御屋敷でもお樂さん、此方の料理屋でもお樂さん、やれお樂さんそれお樂さん、生れた時からお樂さん、今ちやほんとお樂さん……になつたかどうか？

彼女のお友達には、同氣相集まる變り者が大勢ある、先づ第一が山勘のお貞さん、浮氣のお治さん、ゆがみのお繁さん、澤庵石のお鶴さん、おさすりのお酉さん、萬年お増さん、アイスクリームのお照さん、萬引お何さん、擧げて數ふるに追なし、是からそろ〜皆様の棚卸しを初めます。大勢の婦人連怒氣滿面に溢れて、額に二本の角を現はし、髪はおど

ろに振り亂して蛇と變じ、眼は百鍊の鏡の如く、口は耳迄裂けて火烟を吐き、無念の形相物凄く、己れが／＼悪る口も程々にせねば取り殺すぞ、そも／＼女子に恨みの有るものか無いものか、思ひ知らせてやるぞいなあ、ブル／＼／＼桑原／＼。

嗚呼恐ろしや恐ろしや此悪る口は死ななきやとても直るまい、ヤレ／＼昨夜の夢見がチン……………悪かつたなア。

洋服屋の店頭

洋服店には此頃呉服店の誂方に居た織本さんが役換へになつて來た、もう年配は六十前後元來小柄の上に皺の多い人で、頭は禿た岡の上に、頭垢が塵捨場の様に散らかつて居る顔は三年びねの梅干みた様である、あまり何にも出來さうな人でない、誂方の方で持てあまして、結局洋服店へ伴食大臣として、飼ひ殺しによこした者らしい、昔は斯うした人物が殊に多かつた、之では商賣の振はないのも無理はない。此老爺茶が好きで年中茶ばかり

飲んで居る、外の小供には命じないで、僕にばかり云ひ付ける。勿論僕は一寸飲んで見て出がらしになつて居ると必ず新らしいのと入換へ、宜い加減の色合にして持て行く、お蔭で僕は此老爺に可愛がられたが、難有迷惑最負の引倒しで閉口千萬、何とか此人に可愛がられない工夫は有まいかと考へた。

今日は英國から注文の絨が新着して、店中總が／＼で見本を切つたり値札を付けたり、切り出した見本の裂は卓上に山と積まれ、なか／＼少ない金高ぢやない、織本の老爺さんを見て何時も見本は澤山切り出すが、無駄になりはせんかと心配しとる、……………あまりそんな事に心配しさうな男でない、僕は其時小さな聲で、心配しとるに違ひないかい？

皆んなはクス／＼笑つて居る、是を聞き付けた老爺さん怒るまい事か、ヤイ／＼サー勘忍袋の緒が切れた此處へ來い！、誰れがそんな處へ行くやつがあるものか、やがて老爺は太い竹の碼差を持つて追つて來た、僕はサツサと逃げて行く、老人もウヨチ／＼して居る、此方は素早い事鼠の如しだ、丁度ヨイ／＼が鶏を追つて居る様なもので、何時迄たつても

つかまる氣遣はない、老人は根氣よく僕を追ひ廻すこと小半日、是で二三日はお茶汲みからまぬかれた。

最上の出齒は手をたゝいて嬉しがつて居る、織本さんは何か叱言を云ひたいが、此方が氣を付けて叱言の材料を與へない。

ある日僕を呼んで仲通りの龜井といふ取引先へ殘金取立を命じた、此家は拂ひの悪い店で特に此頃は拂はない、毎度民藏といふ番頭が請求に行くが、兎や角云ひくるめられて歸るのである、現に昨日も民藏が請求に行つた筈だが駄目であつた、此老爺駄目と知りつゝ、小さいな僕をいぢめ様とする。ハイと従順に僕は出掛けた、途々どう仕様かと考へた、取らずに歸れば老爺め亦何とかぬかし居るに違ひない。今日は御拂を頂きに参りました、出て来たのは物馴れた三十格好の細君であるヲヤまあ昨日も民藏さんが御見へになりましたから宜しく申上げて置きましたの、誠に相済みませんがもう少々御待ち下さる様に、どうぞ御帳場へ宜しくと菓子を包んで呉れた。見れば一寸小意氣な細君で、勝男稿の名撰に黒襟

をかけ、絞りの半襟に黒朱子の帯、薄化粧して妙に秋波を送る。然もなか／＼言ひわけずれがして居て間拔けな民藏氏などより、役者が二三枚上である、いつも民藏氏は此手でコロリと乗つて、エー宜しう御座いますとか何とか云つて、襟でもしごいて膝でも叩いて歸つて来るに相違ない。へん今日の小僧さんはそんな手ぢや駄目だ。民藏は何と申ましたか存じませんがそれでは困ります、もう此御勘定は三月も延びて居ます、今日幾らでも頂いて歸りませんか、亦何處へか遊びに行つて居たらうと帳場で叱言を云はれます、今日は半分でも三分の一でも、御都合の出来るだけ是非頂いて参りますとキツパリやつた。ア！と細君は驚いてクヂ／＼した、茲ぞと思ふから僕はキツト口を結んで細君の顔色を正面に睨んだ。流石に細君も未だ若い、一寸顔を赤くしたが靜かに立つて奥へ行つて、何かコソ／＼話して居たが三十圓持て来た、それではどうぞ今日は丈け差上げて置きます、後はどうぞもう暫く、メタツ！と思つたが、何喰はぬ顔で内金三十圓の請取をして判を押し御後は何日頃頂戴出来ますかと念を押しした、細君は亦一寸驚いた顔して居たが、ハア！ど

うぞもう暫らく、イエ！何日頃と仰有るのですか？へエどうぞ來月の末迄、左様ですかそれでは左様に帳場の方へ申して置きます、菓子に遠慮せずには貰つて歸つた。

早速織本さんに報告すると、ウム、ヤツタか、是も一寸驚いた顔梅干の皺が一層ふえてパツクリ口が開いた中から種が見えた。

コラ、民藏！彼奴は散々油を絞られて頭をかいて居た。

古家さんは此間の地震に驚いて、今度地震が有つたら此臺の下へ這入れば大丈夫だと縁の厚板で造つた賣場臺を叩いて居た、丁度其時グラ／＼と地震の襲來、天井から下つて居る瓦斯燈のシャンデリヤはガラ／＼と音がして大きなホヤが落ちそうになつた、泡を喰つた古家さんはそら來た！と臺の下へ首を突き込むと、頭をいやと云ふ程打付けた、大變だあ！と云ひながら頭を両手でをさへてグル／＼廻つて居る、其中に地震は止んで了つ、是では人に吐言は云へない、後は皆んなで大笑ひ。

藤田さんは京都の人、中年で此店へ這入つたさうだが、歌も唄へばをどりも踊る、仲々

多藝な人だがいや味がある、第一情けなやかなさんは生れも付かぬ抱瘡で。顔はパンの切口の様な白あばたで、鼻の穴が中ばふさがつて居る、何時もジャンコの崖下から油汗が滲んで居る。諸官省の入札では、道ならぬ雑収入がどうしたとやら、同輩の噂とり／＼にどうやら大分金持ちらしい、板新道には猫の不見轉とやらが飼つてあつて、僕はある夏其猫の小屋へ使ひに行つたことがある、ガラリと開けた千本格子、出て來た奴は廿七八、紺絞りの浴衣に白縞博多の帯、一寸面長な白首で、格別特徴もない出來合ひの二の町であつた兩手に本物の白猫を抱へながら、婆やどなたかお人だよ。

ハハ！ジャンコの黒鼠が、こんな虎猫を飼ひ込んで彼奴今に喰はれて了うぞ。惜しいことに處は何町何番地、時は何年何月何日か、今はすっかり忘れて了つた。

初航海！

明治三十七年の二月は、日本國民にとつては忘るべからざる大事件の起つた時である、

即ち日露の國交は斷絶して日本の海軍は、スタルク中將の率ゆる露國の東洋艦隊を夜陰に乗じて旅順の港に襲撃し、彼等の誇りとなせる堅艦を、或は撃沈し或は爆破して、再び起つ事能はざる迄縦横無盡に蹴散らした。大方の將校は上陸して、火酒ウイスキーとダンスに夢中になつて居る最中の出來事である、其時のロスキヤ將軍連の面はどんなであつたらう、其夜もほの／＼と明け渡る頃には、仁川港外に於てワリヤークとコレーツは我が艦隊の爲めに撃沈せられ、命がらく／＼逃げ込んだ何とか號は、國際公法に依つて武装を解除せしめられた傲慢不禮な總督アレキシーフの面目玉は丸潰れとなつた、此位ひ痛快な事は滅多に有るものでない。

一方陸軍は彼等の未だ備へざるに乗じて、此處に彼處に連戰連勝、今や旅順の堅壘に向つて包圍攻撃にかゝらうといふ七月の事である、僕は室内裝飾研究の命を受けて、米國に向ふべく神奈川丸(六〇〇〇噸)の二等船客となつた、時に年廿五歳、生れて初めての洋行で、然も定まつた道連れとでもない一人旅、心細いやら嬉しいやら、未だ見ぬ先の取越苦

勞、其上言葉は不通も同然、どうなる物かと氣張つて見ても、後から湧き出す苦勞ツラサの黙もく追へども追へどもついて來やがる！

僕の體軀が人並なら召集されて今頃は、鐵砲かついで旅順の肉彈、草むす屍か白露か、高崎山の朝風に消えて果敢無くなるものを、五尺に足らぬ身の仕合せ、取り残されて何事か國に盡せの詔り、緊禪一番やらすばなるまい。

昨夜は鹿島灘で少々荒れて、大分氣持ちが悪かつたので早く寝たが、今日は大分波も平らかになつて、船客大方元氣が出て、喫煙室が賑やかだ。船がシヤトルへ着く迄に、旅順が落ちるだらうか？、無論陥落さし、いや／＼相手は支那とは少し遠うぞ、さう甘くはなか／＼行かない、見給へ南山のあの犠牲を、など、軍議が開かれた。それより浦鹽の露艦が現はれて、我々の船を撃沈する様な事はあるまいか、それは何とも判らない、何せよ旅順、仁川では泣き面に蜂が刺したから此仕返しは見當り次第さ、少々心細くなつて來た。波に暮れ浪に明けて、アリュウシアン島を左に望み、バンクーバへ這入つて來たのは、

二週日の後である。オレゴンパインの大森林は、槍を突き立てたやうに轟々として、見渡す限り海岸線を埋めて居る、中に赤瓦の家が玩具の様に、散在してゐるのも珍らしい景色である、ビクトリヤに一泊して翌日は午後にはシヤトルに入港した。露艦も出なければ旅順も落ちない、豈に計らんや旅順は世界の天險に、ステツセル將軍が人力の限りを盡した難攻不落の堅壘となつてゐる、一夫之を守れば萬夫も進み難き處、恐らく當時日本軍をおいで、此堅壘を落し得る者、世界に之を需めて得べき筈のものでない。

翌々年の正月には、累々たる屍山血河の間より、白旗が力なく翻つた、戦ひ終へて後本壘に立つた大山司令官は、「人間の力もあらいもんの」と、三嘆之を久うして、彼の眼底は新らしき涙に光つた。

篋棒に日本語の上手な移民官に、入國の目的や所持金の高を調べられて、上陸を許されたのは早や黄昏の頃である、手荷物の検査を受けて、車をシヤトルホテルに遣り、一泊と極め込んで發車時間を調べると、セントルイス行きは今晚八時であるといふ、宿泊の約束

を小便に流して列車のベッドに潜り込み、汽笛一聲シヤトルを早やわが汽車は出掛けて了つた、グレートノーザランで一路セントルイスへと向ふのである。翌朝眼を覺まして窓外を見れば、見渡す限り青草の廣々とした牧場に出た、流石に大陸は景色が大きい。山は過ぎて里は來り、町を出で、林を迎へ早や一日も暮れて了つた。翌朝寝過ぎて眼を覺ますとこはそも如何に汽車は海の中を走てゐる、不思議々々此處等に海はない筈と、よく見ればナインの事だ、見渡す限りの大平原に青々とした若草の絨氈を敷き詰め、薄い霞が棚曳いてゐる、何といふ雄大な景色であらう、僕等の様な心なき者でも一寸靈感に衝たれる。

打ち見上ぐれば空青く

打ち見渡せば野は廣し

山も木立ちも家もなく

流れも道も人もなし

海かと思ればそれならで

かすみて遠き原の末

山かと思ればそれならで

静かに遊ぶ雲の峯。

世界大博覽會

兎角して汽車はセントルイスに着いた、着きは着いたが夜の二時頃である、然も小雨はシヨボ／＼と降つてゐる、一體午後の三時頃に着く筈であつたが、前の汽車に故障があつた爲であるといふ、ヤレ／＼初旅に皮肉な事ではある。僕は兩手に鞆を提げて、知らぬ夜更けの町をトボ／＼、傘は御持参ですが手がふさがつてゐますよと来た、何も重い荷物を提げないでも、ステーションへ預けたらと仰有るだらうが、只今田舎からポット出の赤毛布、そんな氣のきいた處へは御氣が付かない、付いても不安心で堪らない、ブラ／＼當途もなく犬の川端歩き、愈々ホテルが見當らずば、ステーションのベンチで夜明しの覺悟此位ひ度胸が座つて居れば心配ない、やがて赤い文字で何とかホテルの看板を見つけた、

得たりと計りに飛び込んだ、早く道入らなければ兩手は抜けて、體はズブ濡れになる、硝子のドアを開けるといきなり梯子段、上つて宜いやら悪るいやら、度胸定めてトン／＼、貧弱極まる帳場には藥罐が机に轉がつてゐる、見れば白河夜船の老爺、恐わ／＼此藥罐をゆすぶり起し、部屋はないかと尋ねると、後ろの扉を指して、金一弗五十仙、鍵を受取つて中から錠を下しホットトと息真中の凹んだWベッドに埋まつて怪しい夢を結んだのである一體何の爲めにセントルイスに來たかといふに田舎者には持つて來いの萬國博覽會が聞かれてゐる、此處で一ヶ月程御丁寧に見物しやうといふのである、思へば呑氣なものであつた聖朝顔を洗つて部屋を立ち出ると、アーラ怪しや此處彼處の部屋々々から、如何はしい白首と、鼻の下の馬鹿に長いヤンキー共が喋々々々出て來る、後で聞けば、此家は淫賣の巢窟であるといふ、いや大變な處に泊り込んだものである、成程考へて見ればホテルとは名ばかりで、食堂もなければ應接も無い、只部屋を借りて寝る一方の家である、この柳暗花明の戰場に迷ひ込み、歴戦のWベッドはスプリングが延びて、真中に川が出來て居る

様なやつを物ともせず、荷物を抱へて怪しき夢を結んだに至つては、頗る珍なるものであつて、此家に取つては空前絶後の出来事であらう、屹度昨夜の藥罐がクス／＼笑つて居るに相違ない。

朝飯は近所の小料理屋で済ませ、教へらるゝまゝに電車をウォルツフェヤーに乗り捨て、入口に荷物を預けて、先づ日本村へ尋ねて行つた、石川五右衛門でも出て來さうな、朱塗の山門を這入ると瓢箪池がある、反り橋がある、喫茶店には赤前垂れの娘が居る、舞臺があつて藝者ガールのダンスがある、大道畫かき、竹細工、ドッコイ／＼の玉轉ろがし、輕わざ、玉乗り、獨樂廻し、玩具屋、雜貨屋、今出來の骨董屋、いや早や大した文化の陳列場である、之では日露戦争に勝てると思つて居る米人が尠ないのも無理はない、御國自慢の俵でさへ、正直な話がうんざりして居る。

先づ落付く處を探さねばならない、様子を聞いて見ると、東洋軒といふ日本人の經營して居る下宿屋がある、然も其主人が來て居るといふ、早速石田といふ人に面會して萬事を

頼んだ、其主人の案内でページアベニューの東洋軒へ落ち付いて、毎日博覽會へ通ふことにした。其處に同宿の連中は、皆博覽會へ稼ぎに來て居る人のみである、一枚廿五仙で席畫を書いて賣つて居る大道繪師が二人、竹細工や玩具を賣る大阪の夫婦者、ドッコイ／＼の玉轉ろがし一人、彼れ是屋が二人、其外一定の職業を持たない連中が二三人、大概は家内労働をした連中で、一週間働らいて二週間遊ばうといふ手合である、どうせ碌な代物ではない。

M公の話が振つて居る、新聞の廣告を見て某家のキッチンウオークに雇はれた、細君が非常な八釜しやで、少しでも手が隙いて居ると用を云ひ付ける、それ其處を掃け塵を捨てろ、芋の皮をむけ、茶碗を洗へ皿を拭け、洗濯物を庭に乾せと、延べつ幕なしに使ひ立てる、あまりの事に腹を立て、わざと茶碗を床の上に取落してガチャーンとやつた、細君怒るまい事か、盛んにまくし立てるが先生一向判らない。弘法にも筆の誤り、猿も木から落ちるとやつて見たが、日本語のわかる筈がない、そこで先生之を英語でやつた。

ミスターコーポーサムタイムス ミステークン ヒズベインテング エンド スマートモ
ンキーカムスダウン フロームツリードンチユーノー?

之では日本人にも西洋人にも判るものでない、仕方がないから細君はオールライト……、
此先生何でも直譯をする、第一国立銀行は、

ナンバーワン カントリー スタンド シルバーゴート来る、

お前はもう亞米利加に何年居るか云へば、

イエースサー ハンギングフート アバウトスリーイヤースとやる、

何の事かと思へば足かけ三年居るのださうな。友人が病院に居るので見舞に出たが處を
忘れた、通りかゝりの男をつかまへて、

セイ ホエイズ シツクマンゴイン エンド バイアントバイカムスアウト オールラ
イトハウス?

ウエル アイドントスピークフレンチ

之が相手に佛蘭西語と聞えたのは大笑ひ、此様な手合が米國にはゴロ／＼して居る、排
日の起るも一面に於ては尤もである。

根岸君は古くから知り合ひの経師屋である、博覽會の仕事に雇はれて原君と小川君と云
ふ二人の大工と共に稼ぎに来て居る、三人共に言語が不通である、聞き囁ちつて單語を少
し覺えた位なものである、それでも感心に婦人の先生を雇つて、英語の稽古を初めたが元
より少しも下地がない、何んぼ先生が骨を折つても、確かな事には覺える氣遣がない番が
廻つて来る、オイお前が先へやりネー、いやお前がヤレよと、四十面下げた大の男が十九
や二十の女の前で尻込みをして居る。

オイ根岸君今頃歸つて来て、昨夜は君何處へ行つたね? へーウフ、と頤を撫でよ
る、

怪しからんもんだねそれでも要領を得たかい?

フ、ハ、ハ、

驚いたなあ、どうも其方に掛けては天才だね、それで景氣はどうだつたね？

エツヘーへ……西洋人はどうも大味で……

原君は腕のよい大工である、忙しくなると一時間幾らで働いて随分金を取るが、随つて散ずる、酒は呑む女は買ふ手遊びはやる、底のない樽に水を汲み込むと同様、日本へ歸る時には船賃を友人に借りて歸つた。小川君は地味な大工で精々と働いては國へ送り、働いては亦送る、國へ歸つた時分には二萬圓からの貯金が出来て今では家作の上りで樂に喰へるといふ、人の心掛けは手許で一寸狂へば、先きは大變な違ひになるものだ。

根岸君は後に残つて紐育に行き、更に白耳義はリエージの博覽會迄出掛けて大分金を残したといふことである。言語は通ぜずとも死にもせず、働きさへすれば収入の多い豊かな國である。博覽會は當時僕に取つては非常に珍らしい、見る物聞く物一つとして珍らしくらざるはない、建築に美術に工藝に、電氣機械農産工業人種、あらゆる世界の文化が集まつて居る、井蛙初めて大海に出たやうなものである、赫々たる炎天をもともせず、毎日

鉛筆と手帳をポケットに納めて、隅から隅まで見て歩いた。朝の涼風にストローを頂いて旅宿を立ち出で、夕方の炎熱にへトへトになつて歸る、見物といふ奴もかう眞剣にやつては決して樂なものでない、稀には日本村に這入つて懐かしい日本語を聞き、如何はしい藝妓の踊りなど見たり、大道藝術家の淺ましい席巻や、ドッコイの玉轉がし、誤魔化し物の雜貨屋が、ビジョイングリッシュでヤンキーの赤毛布を呼び込んで居る有様など見るに付け、何となく情なさに胸が一パイになる、人間と云ふ奴は妙な處で涙が出るものだ。

聞けば藝者連は神奈川邊の喰ひ詰め者で、凡そ十五六人某とかいふ彼是屋が率ゐて、一軒の家を借受けて住つて居るが、興業の入場客が少ない爲めに、家賃も水道税も拂へぬといふ有様、そこで水道の供給を断たれて飲料水は元より、便所を洗ふ雑用水に至る迄一滴もない、汚ない話だが如何に藝者でも出る物を出さずには置かれぬ、十五六人の娘子軍が代りく排出する御芋が山と積んで始末に負へない、如何に自分で製造した代物でも之計りは結構な物でない、由來泣面をしながら他所へ用を足しに行く、思へば可哀想な者で

あると同時に、日本人の耻晒しである、こんな事で排日などぐづぐづ云へた義理ではない如何に旅の耻でもころ大膽にかき捨てにされてはたまつたものでない。

水道はミスシツビーの濁流を呑み、蠅は多いし喰ひ物は不味し、景色としては見る物もないし、同胞は多けれど耻を知る者とは少なく、嗚呼セントルイスは染みくぐいなや處である、兎角して見るべき物は見物し、聞くべき物は聞きあきて一ヶ月は夢と過ぎた。

紐育市(ファミリ)

途中ナイヤガラの大瀑布を見物して、紐育の對岸ジョージ市に汽車を乗り捨てたのは午前七時頃であつた、連絡のフェリーに乗つてハドソン河を渡り、そろそろ紐育へ近付いて来た、朝霧の晴れ間から、小山の様な建物が轟々として盛り上つて居る、當時は三十五階がレコードであつたが、それでも初めて西洋へ来た様な氣持ちがした、早速三井物産會社に岩原支店長を訪ふて來意を語り援助を頼んだ、兎に角下宿をと云ふので丁度瀬古君がこ

れ迄居たファミリが宜からうと、ミスター單武留といふ若夫婦暮しのアツパートメントへ世話になる事に極めて、一週間十二弗、賄付きでスペヤールームを借る事にした、何様生れて初めて西洋人の家庭の人となり、初めてアツパートメントの生活をするのである、段々勝手が判かるに従つてエレベーターもなき五階の生活が、非常に便利にアランチセラれて居る事に感服した、只閉口したのは人情と風俗の著しく日本と異なる點であつた。日本ならば人の前で遠慮すべき事でも彼は平氣であり、日本では平氣である事が彼は頗る八益しい、僕が自分の部屋で着物を着換へるのに、ブラインドを下さぬと云つて隣りの家から苦情が来た、途方もない事だとは思つたが、郷に入つては郷に従へ、かしこまつて之からは嚴重にブラインドを下してから上着を脱ぐ事にした。處が此若夫婦毎日手放しでのろけて居る、ある日曜の午後であつた、小さな食堂で二人サンデーの御馳走を了つてから、僕は片付いた食卓の上で繪の具箱とスケッチブックを持ち出して、スケッチの整理を始めた。やがて臺所の片付け仕事を了つた細君は、前のソファアに横になつて、新聞を読んで居る

單武留^{カインブル}氏の側に來て、彼の頬を撫でたり髭を引張つたり、果ては抱き付いてキッスをやる、鼻を鳴らす、甘まられる、御亭主は女房を抱き締めてパツテングをやつて居る、之が米國では人の前で失禮には當らぬと見える、幾ら人の好い僕でも一寸何とか云ひたくなる。

戲談ぢやないぜ確かり頼むよ!

細君が聞きとがめた、眞顔になつて、

ホワット ユーセイ ミスター ハヤシ?

僕も斯うなつては仕方がない、

アイミーン イツツベリー ファインウエザー、

イエス ラブリー、

エヘンもう退却、早速繪の具箱をかついで自分の部屋に引取り、心靜かに筆をとる。食堂では頻りに變な聲がする。

其晩食事が済んでから、夫婦相携へてお芝居見物とある、どうぞ留守を宜しく。

オールライト インジョーイ ユーアセルフス、

十一時頃にベッドに這入つた。

暫らくすると入口の鍵を開ける音がする、ハハハ歸つたなと思つてウト／＼して居ると隣りのベッドルームでは亦變な聲がする、細君の鼻を鳴らす様な甘へる様な、僕は夜な夜な此怪氣^{おかしき}なる聲に惱まされるのである、狗鼠! 又始まつたな。

やがて暫らくしてから洗面器で何かジャブ／＼洗つて居る様子、……人の疝氣を頭痛に病むでもない……やがて故郷の夢に落ちた。

翌朝七時頃に起き出で、顔を洗ひに行くと、アラ怪しや洗面所の片隅には絹半巾が……楮は昨夜深更に及んで此奴^{こやつ}を洗ひ居つたな、洗面器は外にはなしと、之で顔を洗ふと來ては有難くない、……が仕方がない、有合せたる石鹼を取つて、周圍を綺麗に洗ひ湯を汲んでは流し又流して、楮て顔を洗つて見たが餘り宜い氣持でない、夫婦は未だグツスリ寢込んで居る。

物産會社の誰れやらが評して曰く、ミセスタンブルが若い癖に羨びて居るのは、オーパーロードが掛かるからだよ、見て來た様なことを云つて居る。

研究難

其頃 フビフスアビニユ 五街は金持ちの住宅區域であつた、魔天閣の間に介在して、獨り此處のみは三階乃至四階位の物靜かな住宅が立併んで居る。執行君や物産會社の紹介でB氏やM氏やW氏の住宅を見せて貰つた。蓋し室内裝飾研究には立派な部屋を數多く見る事が、一つの方法であると考へたからである、然るに未だ其道のヒントを知らざる呉服屋の番頭育ちである、眼に付くものは徒らに色彩の調和にのみ傾いて居る、敷物壁紙窓掛け椅子張等の模様色合ひが華美であるとか地味であるとか、絹か木綿か毛織物か、彼處は色が褪めて居る、此處には汚みが付いて居る、丸で仕入の検査でも仕て居る様である、家に歸つて靜かに考へて見ると、何がどうしたのかさつぱりヒントが判らない、之ではならぬと翌日外の家を訪問

して、漸くの思ひで其家の妻君などに案内をして貰う、向ふは盛んに英語でマクシ立てる此方は大タジ／＼、御世辭なんどが出ればこそ、イエース／＼、サンキュー、位が關の山、背中に冷汗をかいて居る位だから、見る物がさつぱり身に付かない、之亦無効に終つて失望落膽、見物と云ふものは實に大變なものである

今度は河岸を換へて學校を探し初める、先づ學校に這入つて手ほどきをして貰ひ、それから兎も角もすべきであると思へた。ブルクリンのプラット、インスタイチチュートに參觀して、規則書を貰ひ調べて見ると、三年も費して壁紙の意匠を習ふとある、いやとても氣の永い話である。ボンヤリして物産會社へ出掛けたのは土曜日の午後である、さなきだに肩摩轂撃の下町は、土曜日の午後とあつて其混雑は一通りでない、馬車自動車電車荷車、車道などうつつかり横切れば命懸けである、歩道は男女老幼織るが如く、何の用があるのか足を早めて非常なる人出である、然も皆忙しさをうに臨眼もふらずに走つて居る、凡そ天下に茫然として居るのは、僕一人であるかと思はれた、茲に於てか僕も考へた、之は何

とかせすばなるまい、然し泡を喰つても仕方がない、先づ暫らく此土地に落ち付くべしと腹を極め、明日の日曜にゆつくり計畫を立てる事にした。

翌日朝飯の後、日曜の新聞を擴げて見て居ると、ポンド、インスチイチュート、オブ、マーカンタイル、トレーニングといふ馬鹿くしい長い名の、窓飾學校の廣告が出て居る之を三ヶ月で卒業すれば學校から百貨店に推薦して、一週間十五弗位は初めから取れるとある、ウム之に限る、此學校から百貨店に奉公して傍ら室内裝飾家具類を研究せんと考へた、先づ一方の活路を見出して、心密かに勇み立ち、ステッキを振り廻して中央公園へ散歩に出かけた、かうなると胸も開けて来る。

惜しき日を散歩に暮らす日和かな

ビーナツツ頂戴と木鼠肩に来る

風教は知らずラブイズブラインド

など、なか／＼餘裕が出て来る。

をや／＼大山蜻蛉のオツルミが来るわい、

ワン／＼的佳人才子の自然主義

シャツトアップ！。

装飾學校

翌日は早速五十九丁目の裝飾學校へ出掛けて、プレシデント、ミスターポンドに逢つて入學希望の旨を申入れた、但し聞いて見ると三ヶ月で月謝が百廿弗、筥棒に高い、校内を案内して貰つて、學生のやつて居るのを見ると屁の様なものだ、之なら不肖なりと雖も、拙者が明日から先生になつて相當にやれると思つた、そこで旅の耻はかき捨てだ、一番月謝を値切つてやれと、商人根性を出して覺束なくも掛合ひ始めた、僕は實際書生の身分で百二十弗の月謝はツヘビード、百弗に負けて呉れ、其代り誰にも云はんからとやつけたポンド先生ニコ／＼笑つて居たが、オールライト、ハヤシユーアールスマートボーイ、ベ

リーシャープ インデードと來やがつた、スマートでもシャープでも負けさへすればそれで宜い、早速入學して大勢の生徒に紹介せられた、亞米利加人は無邪氣である、ハツハーア スモールジャツプ、黒木、東郷、人を馬鹿にして居やがる。

毎日先生が無器用な手付きをして色々な、切地を取扱つて見せる、實に可笑しい位なものである、尠くとも僕は小供の時分から、洋服の裂地や呉服物を取扱ふ事茲に十有餘年、それに窓飾りも此二三年は實際に手掛けて、若干の獨創と充分の經驗を有して居る、只國情と品物が變つて居る位が難點とすべきで、プリンシブルに於て何の變りもない、僕は今日からでも先生に成り得ると信ずる。

僕は金槌とピンを持つて、直ぐに自己獨創の飾りをやり出した、見てゐた他の生徒達は驚いて、ヒーズ、ベリークレバー、イエス、エキセレントなどとやつてゐる、エヘン憚りながら拙者は己に歴戦の勇士である、昨日や今日の駆け出しとは聊か其選を異にする者である、其頃からちよいと寫眞をとる事を覺えて、デベロッパ、プリント皆自分でやる、毎

日試みた裝飾は皆寫眞に撮つて置く、すると僕のアルバムを見て他の生徒が、之を一枚に之を一枚などゝ注文する、ヨシ來た！と先生大得意で日曜日は生徒から注文のプリントで忙がしい、一枚十仙宛で賣飛ばす、お蔭で寫眞の費用は一文も入らず、却つて若干の餘裕を生じた。

此學校では巾の廣いペンを巧みに使つて看板を書く、之はなか／＼難かしい、之計りは先生に及ばざること未だ以て甚だ遠い、但し畫筆を執つて餘白を飾ることは、曾て日本畫を習つた御蔭で工合が宜い、某商店から學校へ注文が來て、新參の拙者が屢々之に筆を染めて大に得意であつた事もある、ある日校長のミスターポンドが非常に美事な額縁に、平凡な水彩畫を入れて持つて來て、ニコ／＼笑ひながら僕に見せて、

ハウヅニューライク、ジスピクチュア？と來た、先生御自慢の作である、僕も仕方がないから、

ウム！美事な額縁ですなとやる。

イヤ此晝はどうです？と来た、

あゝ晝は駄目です！とヤツ付けた、先生大分御機嫌斜めであつた！

生徒達は無邪氣に手を打つて大笑ひ、フレーハヤシ ユーアール ライト。

男物雜貨を専門に教へるミスターフェルダーといふ教師が、よく僕等を率ゐて下町のボーグルエンドソンと云ふ店の、ショーウインドーを飾りに行く。ある日僕がひと小間のウインドーを引受けて頻りに飾付けをして居ると、何者の悪戯ぞ、僕の處丈けスルスルツとブラインドを上げてしまつた、サア表には人が立つ、何が借て物見高い紐育の下町に、小さな日本人が小まめにちよい／＼ネクタイを結んでは飾つて居る、五人立ち十人立ち、ウインドーの前は黒山の様な人ばかり、僕も一寸閉口したが、今更悪るびれても仕方がない、其儘ズン／＼やつて仕舞つた、フェルダーの奴手を打つて喜んで居る、其次からボーグルでは僕に来て呉れる様にと學校へ名指しで頼みに来る、ヤンキーの畜生又人を廣告に使うとしやがる、僕はいやだと斷つた、すると校長のボンダが、頻りにさう云はんで行つて呉れ

と頼みに来る、仕方がないから其後二三度行つたが、何時も僕が行くと、フロアーウオーカーの爺さん愛想よく兩方の手をパット廣げてウエルカムサーと来る、現金な奴だ！ミスターフェルダーは九十八丁目に居る、下宿代が廉くて賑やかで、一つ空間が有るから來いと頻りに勧める、僕もミセスターンプルには少々當てられて居る、變つた家庭を見るも又經驗と考へたから、早速其處に宿換へをした。

次の下宿

之はミセス、ラグラサといふ未亡人で、アイリツシの者であるといふ、年は六十前後、丈けよりも横の方が廣い偉大なる胸中の持主で、ビヤ樽をゴムで造つて鍍だらけにした様な人のよい老婆である、娘が一人息子が一人、グラランテーといふ可愛らしい孫が一人居る、娘はジェニーといふ髪の黒い、眼のクリツとした美人である、今下町のさる會社に通つてオフィスガールをして居る、之が實はミスターフェルダーのスウィートハートであつた。

フェルダール先生ジエニーの御機嫌を取ること非常なもので、其鼻の下の寸法と來たら、何碼だか知れたものでない、學校から僕と一緒にイソ〜歸つて來て、ジエニーが居なからうものなら茫然として泣きさうな顔をして居る、歸つて來て、ハローなんてやらう物なら、忽ち破顔一笑御天氣が變る、何事を投げ出しても傍に行き、彼女の細き腰に手を掛けて引寄せる、娘は多少人前もあるし少々五月蠅ささうであるが、先生の方は一向お構ひなし、キツスミーキツスミーとやる、ジエニーが知らん顔して居るともう先生泣き出す、仕方がないから一つキツスをしてやると忽ち夕立はカラリと晴れて大はしやぎ、グールドジエニーと來る、それから芝居に連れて行くやら、寄席に行くやら、明いた眼では見て居られなう。

母親のラグラサは之を見て、オーマイマイ〜、僕は門前の虎を逃れて後門の狼に見込まれた様なものだ、何れにしても助からない。

茂野君は帽子屋の悴で、東京に居る時分から知合ひの間柄である、今百七丁目の杉本君

の處に居る、茂野君の母親から言傳を頼まれて居るので、日曜を幸ひ尋ねて面會し、同君の紹介で杉本君にも面會した、同君は元茶業組合の古屋氏の下に使はれて居たが、古屋氏の小間使のお達さんと結婚して、今ではバンタイン商會の中に茶店を出し、妻君が日本服を着て茶のお給仕をし、ライスケーキなどを添へて賣つて居る、夏になるとアトランテック、セテーなどへ出かけて、夏場で商賣をするといふ、何せよ今や日露戦争の眞最中で小さな日本が大きな露西亞と戦つて、連戦連勝して居る爲めに、日本の物とさへ云へば何でも喜ばれる、杉本君の商賣もお蔭で大分繁昌するとやら、吉原君は宗十郎町の二葉屋の悴で、今インキや染料の研究に來て居るが、毎日博物館に雇はれて、石版の下畫などをかきながら目的の仕事を研究し、杉本君の一室を借りて居る。日本飯の馳走になるやら、日本物の蓄音機をやるやら、寫眞をとるやら、永い日を短かく暮して歸る時も多かつた。

其歳も暮れの廿四日から三日計りは、クリスマスホリデーとあつて、生徒等は皆母の處に歸る、パーシーはジョージ市から、五六哩先の郊外に家が有る、是非僕に二日計り泊り掛けて遊びに來いと云ふ、僕は今歸るべき家もなし楽しきホームもない、下宿へ歸れば亦フェルダの長い鼻の下でも眺めて居なければならん、ヨシ君さへ差支なければ行かうと答へた、

グード！ベリウエルカム、ハヤシー

彼と相携へて、楽しき彼のホームへと押かけた、満目白皚々深くく雪にとざされた田舎の村へ着いたのは廿四日の夕方である。

パーシーの父は既に死歿し、今は母と二人の娘とパーシーとの四人暮りである、彼等は快活に喜んで遠來の客を迎へ、嬉々として相語る、其處に冷たき禮の煩もなく、胸中一片の障壁もない、ランプをやる、ピンポンをやる、チャッカーボール、ドミノ、オハジキ等他愛もなく遊んで遊んで遊び暮らす、徹底したものである、勞れ果て、寢室に案内せら

れた、立派ではないが清潔に保たれた部屋に、ストーブも焚いてある、洗面器も化粧臺も揃つて居る、君の家に居ると同じ心持ちで、何でも欲しい物は遠慮なく云ひ給へ……と彼は去つた、何等一片の他所行きの世辭はないが、飾らぬ處に厚い志が見へる。此フアミリヤ一な待遇には尠なからず敬服した、日本の民族には未だ一寸眞似の出來ぬ自然味がある、聊か羨やましいことである。

翌日も終日雪にとざされて外出は出來ぬ、室内にはカン／＼ストーブを焚いて、亦終日室内遊戯に耽ける、今日はクリスマスと有つて近處の娘達が三四人遊びに來る、打交つてそれ／＼ゲームをやつて居る、僕も最早十年の知己の如く、誰に何の遠慮もせず母親も娘も至つて快活に、楽しきクリスマスの晩餐の食卓についた、例によつてスーパのあとは七面鳥のロースト、クリスマスブチング、アイスクリームと來る、其アイスクリームが三種も出る、バナナ、ストロベリー、チョコレート。

屋外は積雪に埋れて、骨にも透る程の寒さである、室内は盛んにストーブを焚いて、汗

が出る程に温度を保つてアイスクリームを喰うといふ、餘程變つた習慣であると思つた、暑いと云つてもストロブのヒートである、何んぼ何でも三種のアイスクリームには屁古垂れた。其翌日は固い握手を交はして、パーシーと共に紐育へ歸つて來た、下宿の入口には皆が留守になつて淋しそうに悄然して居た、グラランテが僕の顔を見ると嬉しさうに飛び付いて、オエヤ、アブユービーン、ミチクアヤシ？と廻らぬ舌で問ふも可愛い、見れば兩手に大きな巡査のヘルメットを持て居る、お前大きくなつたら何になるの？と聞くと彼は眼を丸くしてポリースマンと答へる、なぜと聞くと彼は言下に、ピコース、マイグラランバ、ウオズアポリースマン。彼の祖父が巡査であつたからである、して見るとミセスラグラサは巡査の未亡人であつたかな。子供は無邪氣で可愛い者だ、彼はジェニーの姉の子であるが、祖母のラグラサがベツトとして手許に育て、居るのみならず彼は家中のベツトである

ボ ジ シ ヨ ン

其年も明けて春は未だ雪と氷柱に眠つて居る三月の半であつた、一と通りのコースも終り、大方のブラクテスも済んで、デプロマと共に推薦狀を五六通學校でくれた。そこで百貨店のメーシーや、シーゲルクーパー、シンプフンなどの人事課に入店希望の交渉をして見たが、何が偕て求職者は溢れる程多い紐育の事である、通り一片の推薦狀位で眼色の變つた押し出しの貧弱な僕など雇ふものでない、僕が地位を換へて向ふの身になつて見た處で、英語の自由に話せる押し出しの宜い者を探る、僕の落第は當然過ぎる程當然であるが、其處が慾目だ、五六本の推薦狀を皆試みたが更に効果がない、田舎の店なら有りさうだが此方は御免だ、もう斯うなつては永居は無用、近所の都市を一巡視察して渡英せんものと、先づヒラデルヒヤよりワシントンに至り、引返してアトランテツク市、ニューポート、プロピテンス、ポストンと廻つて紐育に歸る途中、ある停車場で日本海々戰の號外を賣つて居る、然も非常に大きな活字の見出しに、ジャツプ、ピーツ、ルシヤンフリートとか何とかが出て居る、日本人たる者讀めても讀めんでも、一枚買はざるべけんやである、見れば日

本の軍艦は二隻と水雷艇が三隻やられて、露西亞は戦艦を初め、巡洋艦を並べて七隻沈没、二隻は捕獲せられ何隻は逃れたと誠しやかに見て来た様な嘘が出て居る、半信半疑であるが兎に角嬉しい。翌日紐育に着いて見ると、昨日よりは更に大いに有利な報道となり、其翌日は全然日本海軍には沈没軍艦一隻もなく、露艦全滅と報ぜられた、外國に旅して故國の戦勝を聞く、こんな愉快な事はない、日本人たる者實に手の舞ひ足の踏む處を知らぬといふ有様、紐育の日本人會では金子堅太郎氏を主賓として祝賀會が開かれた、金子子爵は相好を崩して日本帝國萬歳の音頭とり、僕も生れて初めてシャンパンを二杯傾けて非常に酔ふた。

米國人は逢ふ人毎にフレイイジャブと来る、東郷は非常な金儲けをしたらうといふ、何故かと聞けば、今度の海戦で分捕つた軍艦を賣れば大した物だと云ふ、フム！亞米利加ではそんな請負見た様な事をするかと聞けば、勿論軍艦なり商船なり捕獲した場合には、適當なる價格で政府が買上げて、當局者に賞金として給與すると云ふ、ヘン！そんな事で戦

争に勝てるものか、道理で一人のホブソン大尉が出ると、米人は非常に鼻うごめかす、俾方がらそんな月並な大尉は、日本には腐る程居ると悪くまれ口も叩きたくなる。

大 西 洋

暫らく住み馴れた紐育を捨て、愈々ロンドンに向ふべくマジエスツク號の二等船客となつた、見送る家族送らるゝ旅人、相擁してキツスやら握手やら、バーで景氣よく乾杯する者もある、プオーと不粹な聲を残して、靜かにグレートセテイオブ ニューヨークの棧橋をはなれると、互に手巾を振つて愈々影の見えなくなる迄名残を惜しむ。僕はたつた二人茫然として此光景を眺めて居る、寂しいと云へば聊か寂しからざるにあらずと雖も、亦冷たき外交的辭禮を交す必要もなく、小面倒臭い挨拶をする世話もない、黙々としてさらば紐育！と心に叫んだぎり誠にさつぱりしたものだ、いや少しさつぱりし過ぎても居る様だ。喫煙室に来て見ると、煙草を燻らす者、ボンボヤージ！コクテルの杯を擧ぐる者、ト

ランプ、ドミノ、チェスなどのゲームに耽る者、無爲にして暮すは罪惡なりと云つた様な調子である。

僕はぼんやりとチェスを見て居たが、其ルールも働きも日本の将棋とよく似て居る、之なら自分にも出来さうだ、總じて米人のゲームは、其ルールが極めてシンプルな物計りで、日本のその様に深く考へて相手の打出した手によつて、其策戦を想像する様な物は極めて少ない、其中で此チェスが一番複雑で餘りやる人がない、僕は今一番勝つて鼻うごめかして居る烏天狗の様に鼻の尖つた男に、一つ教へて呉れんかと申込んだ、彼はフフンと鼻の先で笑つて、御前は嘗て此ゲームの経験が有るかと云ふ、イヤ一向ない、今日只今之から経験するのだ、いやそれは到底駄目だ、拙者は茲に七年間の経験者である、いや差支ない、勝てば宜いぢやないかと高飛車に出てやつた、此小僧がと云つた様な顔付でムツとして居る、押なべて西洋人の喜怒は忽ち面に現はれる、何んでも相手を少々怒らせるに限る、エキサイトすれば兎角ミステークが混むものだと云ふ兵法を思ひ出した、そこで先

づルールを聞きながら初めたのであるが、何せよ日本の将棋よりきゝ駒が多いから、其注意は馴れる迄容易でない、飛車と角と合した力を持ったのがクインで、角の働きをなすビショップが二枚、飛車の働きをなすキャツスルが二枚、桂馬の八方にきくやつが二枚、いや其ヤコシイ事一通りでない、何でも同資格の駒なら、ズン／＼取換へて互にきゝ駒を減じ、盤面を廣くして戦争するに限ると考へた、敵のクインが飛び出して來たから忽ち交換する、相手の烏天狗膽を潰してそれは亂暴だ、クインなどは最後迄保存すべきものだと思告する、いや戦争は亂暴なものだ一向差支ない、日本では敵の忠告など聞いて戦争するものでないとやり返す、烏天狗は何かブツ／＼口の中、亦ビショップの交換、キャススルの交換と、着々策戦通り實現して目的の通り盤面を廣くし、飛車先きの角と桂を働かせて敵將を苦しめる、先きに負けて居た、ビヤ樽は僕の顔を見て眼を光らし、ニツと笑ひながら、グールド！と叫ぶ、烏天狗は少々狼狽して來た、兎角して奇勝を制した、ビヤ樽喜ぶまい事か、フレード東郷！ユーアールグールドファイター。其後油斷すると負け注意すると勝つ、烏

天狗とは宜い相手になつて、アトランテックオーションは御蔭で面白かつた。

今日は船客と船員の演藝會があるので、若干の寄附金を取られた、やがて時刻に及んでピヤノヴァイオリン、獨唱、踊り、手品曲藝と段々番數を重ねて居る中に、委員の烏天狗が僕にも日本人を代表して(と云つた處が日本人はタツタ一人しか居ない)何かやれと云ふ自慢ぢやないが僕は人に見せたり聞かせたりする様な隠し藝は何にも持合せて居ない、そこで是計りはと辭退したが先生なか／＼御承知ない、大きなからだで小さな僕を演壇に運び出す、拍手が盛んに起る、狗鼠：日本男兒たる者、此ドタン場で惡びれては國民の耻である、どうせ此奴等には何を聴かせたつてわかる氣遣ひはない、何でも大きな聲で怒鳴るに限ると考へた、そこで四百餘州を唱ふのではない、怒鳴つたのである、調子が合ふが合ふまいが、文句が少々間違つてもそんな事が判かるものでない、斯うなりや大膽なものである、果せるかな大拍手大喝采、元より一人も分かつた奴は無いのであるから可笑しい。クインスタウンの大うねりに逢つて、一週間の後船は無事にリバープールに着いた。

棧橋の船付きやら税關の検査に暇取つて、漸やく何やらホテルに投宿した頃には大分空腹を覺えた、見れば時計は己に十時を示して居る、時計が間違つて居るに相違ないと思つて、ホテルの時間と合せて見ると違つて居らぬ、然も表は太陽こそ没したれ新聞が讀み得る程の明るさである、此邊のトワイライトは實に永い、未だ宵の口であると思つて居る間に東が白らむ、柳花の春を漁る連中が、往々格好な敵にめぐり逢はずに、翌朝ボンヤリその儘オフイスに出掛けるなど云ふクラークが有る、日の永い事夥だしい。

ロンドン

翌日は市中視察と云ふよりはロンドン行きが急がれる、英國の旅行は三等に限ると聞いて居た、早速三等の客となつて、手に餘る荷物を託した、オールライトと云つた丈いで、預りの札も切符も呉れない、非常に不安に感じながら、時間が迫るので列車に乗り込んだ成る程一等に乗るのは馬鹿か、亞米利加人であると云ふ程あつて、三等の客車でも日本の

二等より上等である、之で二百哩を四時間で走らうと云ふのであるから、日本の鐵道などは官營とか云つて居るが、やれ通行税だ、急行券だと餘計な金は如才なく取立てるが其急行の減法界遅い事お話にならぬ、つひ前途遼遠などと云ふ黄色い嘆聲が出て来る。途中の風景は亞米利加の大陸と違つて島國であるだけ、日本と趣きの似て居る處がある、只家の格好と煙突の多いのが非常に目立つ。

兎角して倫敦に着いたのは夕方であつた、先づ心配になつて居た荷物を受取るべく、手荷物取扱所に行つた、處が此急行は荷物を積んで來ないから明朝取りに來いと云ふ、僕は愈々不安でたまらなくなつた、然し僕ばかりではない、外の客も皆同様の取扱を受けて異議を稱へる者もない、僕たる者獨り悄然として思案投げ首して在るべけんやである、即ち豫て聞き及ぶトラフルガルスコエヤーの某ホテルに、ハンサムを賃して乗り付けた。然るに之は亦なか／＼亞米利加流には參らぬ、紹介状を持て居るかとか、前からアレンヂしてあるかとか、中々以て七面倒臭い、結局只今ベーカントルームがないと云ふ、思ふに拙

者の風采甚だ揚らず、斷る方が宜からうと云ふ支配人の意向らしい、狗鼠イママ々しいが仕方がない、キャツマンに頼んで然るべき宿屋へ案内してもらつた、それから身分相應な宿屋を五六軒探して、結局一軒の下宿屋のトツブフロアーの屋根裏（ツブ）に一室を借り受けて、茲に一兩日投宿する事に極めたのであるが、甚だ以て感じが宜しくなかつた。ロンドンの第一印象は、實に不愉快極まるものであつた。

翌日は早速不安ながらリバーブルステーションに出掛けて、荷物係に其着否を聞いた、一人のポーターが無雜作に手荷物の山と積んである部屋に僕を案内して、どれが君の荷物かと云ふ、見廻して自分の荷物を指差して之と之とこれ。彼は僕の指す手荷物を云ふが儘に取出して、表に出ると手を上げてハンサムを呼び、サツサと積み込んで僕の行先きをキヤブマンに告げる、六片のティップを彼の手の平にのせると、彼は一寸手を上げてサンキウサー、之で間違ひがないとは驚いた國である、預かる時には受取りを出さず、渡す時は云ふが儘に渡す、人の荷物を横取りしても知れるものでない、嗚呼日本などには未來永

劫此んな時代は来さうにない。

地下鐵道では定期乗車券が盛んに行はれる、然し嘗て改札に見せた事がない、持つ者も欺かず見る者も疑はず、誠に世話のない事である、それでも中にはするい奴がある、殊に年寄つた女に多い、或時車掌が一等客の切符を調べて居ると、中に三等の乗客が居る、靜かに彼女を別室に連れて行て曰く、貴女に注意する事已に二回に及ぶ、此次ぎ亦犯す事あれば告發致します、次の停車場で三等車に御乗り換へなさい、大概の奴なら背中にピツンヨリ冷や汗をかく處だ、兎に角人は悪い事をせぬ者と極めて規則を設ける、日本などは遺憾ながら人を見たら盜賊と思へと云ふ筆法で法律を作る、其出發點が裏と表程違つて居る宗教の力か教育の力か、勞働者などは随分日本のそれに負けない程汚ない風をして居る、然し同じ賃銀を出して電車に乗つても、隅の方に寄つて遠慮して居る、魚河岸に出掛ける阿兄の様にブリキの箱を肩にして、臭氣紛々たる耳白の伴天を一着なし、タイヤの古ゴムで造つた長靴を兩足にはきしめ、屋臺店の蟹の様に兩足をひろげて、寄らば土足で蹴飛ば

さんず物騒な奴は一人もない、往來を盲人が歩いて居ると、母親の手を離れた少女がチヨコ〜と近寄り、見も知らぬ盲人の手を引いて安全の地帯に導く、然も格別色めいた顔色もして居らぬ、何といふ美しい事であらう、巡查は小山の様な體をゆさ〜と運んで、今しもステーションから、手荷物を重さうに提げて出て來た老婆を助けて、馬車を雇ひ手荷物を積んでやる。見渡せば社會は恰も親しき一家の如きものである、力の餘る者が力の足らぬ者を助け、眼の見える者が盲目の人を導く、當然の事を當然にやつて居るに過ぎぬ、然も日本の旅行者たる僕的眼には此偉大なる不文律が非常なる光りを放つて、眼も眩まん計りに感ぜられた、何と情けない眼ではあるまいか、之で倫敦の感じが少しよくなつた。

三井物産會社に來意を告げて援助を乞ふた、小室さんが支店長で、宿はロンドン西北の郊外にある、三井俱樂部の一室を貸してやるといふ、川邊君の案内で地下鐵道に乗り、パークストリートから郊外に分かれて、ウイルズデングリーンに下車し、ブロンズベリーパークといふ町に出て、パンクサイドといふ家に落着いた、山本君が兼主事で淺岡といふ

クツクとウイルシャーといふ女中が居る、外には一疋の猫と、天井裏に若干の鼠が下宿して居る位なもので誠に静かで、忙しかつた紐育の生活から思へば、田舎の山の中に宿換へした様なものである、之から倫敦のセテイには凡そ三十分を要する、そこで毎日廣いロンドンの中を、地圖を便りに賑やかさうな處を見物する、米國の都市に比べて其不規則にして分り悪い事非常なもので、充分案内を知らば家から家を通り抜けて、わけなく行ける近道も、不案内と來ては始末に負へない、旅行者泣かせとは恐らく東京や倫敦の事であらう。

メーブル

トテナンコートロードに、メーブルといふ室内裝飾家具専門の店がある、資本金四千萬圓、従業員七千人と聞いた丈けでも、其規模の雄大なる事が知れる、店舗の廣い事は非常なもので、浮か／＼歩いて居ると歸り道がわからなくなる、モデル室が時代分けやスタイ

ル分けに、食堂、客室、居間、寢室、借は一十ポンドのフラットや、七百ポンド、五百ポンドとお好み次第なモデルがある、其持品の豊富なるにも一驚せしめられた、兎に角室内裝飾を研究する者は、宜しく此店に奉公すべきである、一番石にかちり付いても、此店に暫らく足を留むる事だと決心の臍を固めて了つた、そこで小室さんに頼んで紹介をして貰らい、木曜日の午前に重役に面會する迄の運びとはなつたのである、然し願みれば言語は不充分だし經驗はなし、何と云つて頼んで、何をさせて貰らうべきかと心痛やる方もない愈々其日となつて紹介状を取次に渡し、ミスターレグナードといふ重役に面會を求めた暫らく此處で待てと云ふ、陳列場の片隅に腰を下して、午前九時頃から最早や十二時にならうとするが未だ出て來ない、如何に忙はしいとて之は亦餘りに氣が永い、僕は實に此英國に於ける、ウエート・エ・モーメントの永いのは驚いたのである、それから亦取次に名刺を興へて、食事をすませて再び來る事を約して外に出た、飯を喰ひながら染み／＼考へたのである、餘り人を馬鹿にしてゐる、一層止めて方針を變更しやうか？。

然し待てよ、之まで待つたのである、今更短氣を起しては折角これ迄漕ぎ付けた甲斐もない、今日一日は座り込んで、挺子でも動かぬ意氣を示したら、亦どうにかならぬものもあるまいと、再びメーブルの陳列場に座り込んで、根競べをやり出した。午後三時頃になつてヒョッコリ出て来たのは、白髪童顔の小作りな老人である、永く待たせて氣の毒であるとも何とも云はない、此紹介状を持つて来たのは君か？、そして君の目的は何か？、此商賣に経験があるか？、何が出来るか？、實に立て續けに質問の矢を放つ、茲に於て拙者も背中に冷汗が出た、室内裝飾研究が目的で、米國の各都市を廻つて、學校や其他を尋ねて其道を得ず、計らず倫敦に来て此店を見て、是非此所で研究したいと思ふのである、元より何の経験もないが最善を盡して何でもやる……と、先づやつと答へた、老人はシャープな眼付きで、僕の態度を見て居たが、今度は徐ろに口を開いて、無經驗な者は困る、何にも出来ない者は使はぬ、僕は仕方がないから、持合せて居た寫生帖を取り出して、之は旅行中に各處で寫生したものであるが、畫は少し出来ると信ずる。

老人暫らく其寫生帖を見て居たが、オールライト、來週月曜日から午前九時に來い、設計部の下役に使つてやる、給料は出せぬ、晝飯と茶は給する、今裝飾係の主任に紹介しやうと、ミスタータトルと云ふ人と呼んで紹介せられた、契約書も要らず、保證人も要せぬ僕の住所さへ聞きもせぬ、簡單にして卒直なものだ、之で差支ないとは實に驚かざるを得ない。

凡そ日本で人を備ふ時には履歴書、誓約書、保證人二人公民権を有する者、かなり面倒な手続きを履んでも、使ひ込みなどして始末に負へぬ、保證人に掛合うと責任を負ふ保證人などは、十人の中に二人も難かしい、社會組織は益々複雑にして愈々其要領を得ず、此國では極端に簡にして要を得る、經濟上幾千の相違があるか知れたものでない、此一事丈けでも社會の經濟に相當の餘裕を作り得るわけである、實に羨やましい事だ。

兎に角僕は一ヶ年有餘の難産で、初めて生れ出でた赤兒である、一寸の光陰輕んずべからずとは實に今日の事である。月曜日の來るを一日千秋と待ちわびて、午前八時半にメー

ブルの門前に立つた、やがて眼玉と髪の毛の黒い、丈けの小さな新入生は、設計部の誰れ彼れに紹介せられた、米國人とは異つて英國人は誠に始めの付きが悪い、やがて製圖板に向つてT定木と三角定木、コンパス鉛筆等を興へられて、トレーシングペーパーに設計圖案の引寫しを命ぜられ、茲一生懸命にやり出した、英人は身體が大きいから、皆腰掛けて仕事をして居るが、僕は腰掛けては思ふ様に手が届かない、止むを得ず終日立つて仕事をすゝる、かなり苦しい。然し今日程愉快な事はない、日本を出てから今日迄、道を需めて其道を得なかつた、一日として頭がカラリと晴れて、眞に愉快を感じた日ではない、今日は仕事に一生懸命で、然も終日立ち詰めで、全身クタク／＼に勞れたりと雖も、初めて求めて得ざりし道を得たのである、茲に於てか初めて體驗したのは、

道を得て道に苦しむの苦痛は

道を需めて道を得ざるの苦痛に

比較すべくもないと云ふ事である。勞働の苦痛は精神の満足によつて、何の雜作もなく慰

する事が出来る。

爾來一日も休まず、一分も遅刻せず、最後の一分迄奮闘した。人は手を洗ひに行けども我は行かず、人は煙草を吸ひに行けども、我は行かず。人は暑中休暇に二週日を費やせども、我は休暇をとらぬ。日曜日でも多くは自室の製圖板に向つて研究に没頭し、夜はポルトクニツク美術學校に赴いて専ら技術の向上を計る、僕生れてから此様に勉強した事は曾てない、亦此様に愉快に、油の乗つた事もない。一ケ年間満月の如く張詰めた弓は、今一時に絃を放なれ、痺れを切らして居た鎗矢は、唸りを生じて眞一文字に飛んで行く、岩も物かは、何事も其道に入らなければ仕方のないもので、今迄非常なる注意を拂つて觀察した様々な室内裝飾も皆其見る處のヒントが違つて居た。毎日の熱心なるブラクテスに依てスタイルもわかり技術も進歩し、若干の設計も自ら成し得るに至つて、様々なる住宅を觀察すれば、明瞭に其巧拙やスタイルが分かる、初めて参考になる様になつたのである、今迄見たのは只徒らに苦しむ計りで、何の参考にもなつては居らぬ、何事も研究は本筋に這

入らなければ駄目である。

僕の働いて居るステュディオには、フェロースデビスと云ふ人が頭で、其下にチュイーボーザー、シヨープンと四人しか居らぬ、そこへ僕を加へて五人となつた、僕は丁度無人である爲めに、採用せられたかも知れない、兎に角僕は非常なる馬力を掛けて努力するので、下廻りの仕事はサツサと型が付く、此頃では僕も客の家に實測に出かけて、充分一人前の仕事が出来、不器用で薄のろな、シヨープン君などは不必要になつた、ある日シヨープン君が悄然として曰く、僕は來週から他所へ行くよ、なぜ？君此店がいやになつたかね、なアに、僕は居たいのだが此店でもう要らぬと云ふからさ、彼は主任からウイークノータイスを與へられたのである、成程僕が見てもシヨープンは將來見込のある男でない、次の週間から彼は姿を見せなくなつた、随つて彼のして居た仕事は、一切僕が引受ける事になつた、實は此頃段々様子が分かつて來て、紛々たる俗務より、自ら靜かに研究する時間が欲しくなつたのであるが、そう甘くは行くものでない。

暇を見てはコダツクを持つて、モデル室を寫して歩るく、家具類のスケッチをしたり、寸法を取つたり、其忙はしい事と云つたらお話にならない。嗚呼亞米利加で仇に暮した一年が、染みく／＼欲しい。

今日はヘントンと云ふ十六歳の小僧が入店した、今度は僕が新兵教育係となり、下手な英語で何や彼やと仕事を教へる、これでも一日の長である。僕は毎日立ち詰めで製圖をやる、朝は八時から夕方は六時迄、其間晝飯が三十分、午後の三時に茶が二十分、店を了うと直ぐに、ABCと云ふ飯屋で軽い夕食を取つて、直に美術學校に行く、宿に歸るのは毎晩十時である、随分くた／＼に勞れてかなり深い眠りに落ちるが、週末の休日があるので悉く洗はれて了ふ。土曜日の午後一時に、店を辭して俱樂部に歸ると、物産の連中が大勢來て居る。テニスをやる、碁が初まる、將棋を差す、最も盛んなのは花合である、時に或は深更に及ぶ、僕は決して此賭博に類する事には手を染めぬ主義で、サツサと二階で寝て了ふ。フト眼を覺ますと未だパチ／＼やつて居る、K君の如きは吸ひ掛けた卷煙草が短かくなつ

て、指の先が焼けさうになるのを、フー／＼吹きながら夢中である、Y君と來たら助平で
どんな汚ない手でも出る、狗鼠！ヤケジャーヤツテ來い外道！なぞと盛んにエキサイトし
て居る。

テ
ー
ム
ス

晚餐は一同食卓を圍んで、牛鍋などを突付く、明日の日曜はリッチモンドへ、ボートを
漕ぎに行かうと動議が出る、賛成！會費十志前納。

翌日は十時頃から船宿で六人乗のボート二つ位を借りて、リッチモンドから流れ静かな
る、テームスを上へ下へと漕いで遊ぶ、兩岸の邸宅は概ね洒落た別荘向きに造られ、河に
面して庭を取り、青芝の中に花壇を設け、紅黄紫白花取り／＼に實に美しい樂園である、
庭の一部に河水を引いて、池を作り水門を設け、中に船を繋いだのがなかく／＼多い、何處
の家の白鳥か群をなして放し飼ひ、柳の緑りは河に望んで糸をたれ、今にも水の面てを撫

でさうである、此深い緑の蔭に、クツキリ白いスワンが浮いて居る様は、實に泰平の春で
ある。近く獨逸のツエツベリンが、爆弾を投下しやうなどとは夢にも思ふものでない、若
い男女を乗せたボートは、右に左に數限りもない、日曜のテームスは、實に泰平の夢を乗
せたるボートを以て、埋められたるが如き觀がある。

日盛りになると勞れた船を彼方此方の柳の下に繋いで、綠蔭深き處若き星や莖が、相擁
して私語する者、密に酔ふて現なる者、その甘つたるい有様は開いた眼で見居られたも
のでない、日本なら忽ち問題になつて、水上警察の眼が光る所であるが、國情が違ふ、此
國でそんな事を彼れ是れ云ふのは野暮の骨頂。

テームスの柳の露にラブは濡れ

エヘン！

獨り者オール持つ手は露に濡れ

ホイ浮か／＼すると石垣／＼、ソーリー！何處かの女が聲をかけたかと思ふと、櫂ろの船
から水がピシャン！フ！女めオールで空をしゃやくい居つた。ヤレ／＼オイ飯に住やうと、

船を繋いで上がったのは、河端の何とか云ふ料理屋であつた、大きな鉢を付けた蝦の茹でたのに、マヨネーズソース、ピフテキの厚い奴が、芋と共に運ばれる、腹は空いて居るし涼しい河の面を眺めてビールを引く、之なら平常どんな労働をしても亦フレツシユになる筈である。

日本で年がら年中、ダラリシツクリと極りもなく、働いて居るのは譯が違ふ、働く時には大いに働らいて、遊ぶ時にはウンと遊ぶ、是に限る。

歡 迎 會

倫敦で名高い、霧の深い土曜日の夕方であつた、例の通り物産の連中が、倶楽部へ會食の爲めに集まつて、晚餐のあとで相談が始まつた、それは近日紐育支店長の岩原氏夫妻が来るから、一席歓迎の宴を催ふさうと云ふ。

萩田！貴様はお得意の義太夫を語れ、小牧と平山は詩吟に琵琶歌、川邊！貴様は己れと

茶番をやらう、之が吉富の發議である、それからN貴様は花合はなあひと女の外には無藝な奴ぢや、仕方がないから後ろの方で拍手でもしろ、林貴様はクレバーな奴ぢや、部屋の裝飾と小道具の製作方と、一同役割が極まつてあとは飛入勝手次第、イヤ大變なプログラムだ、僕にとつては部屋の裝飾などは御茶の子であるが、小道具には少々閉口した、毎晩コツクの朝岡を相手にして、カードボードの小手歴當や、ブラオンペーパーの陣羽織、武智光秀と眞柴久吉の衣裳、ゴワ／＼ガサ／＼した奴が出来上るまでかなりの苦心。愈々當日となつて岩原氏夫妻は、ランガムホテルから馬車を驅つて、ジメ／＼した夕霧の倫敦を出て、郊外のバシクサイドへと乗り付けた、待ち受けたる一同は歓迎の辭を交はして、歡談少時、晚餐福引等の後愈々餘興に取りかゝる。罷り出たる萩田延太夫は、口を曲げてお染久松野崎村を語り出す、三味線などの有らばこそ、間拍子などはどうでもかまはぬ。

『思ひのたけを友染の、袖にハラ／＼村時雨、晴れ間も……』何もあつたものでない。

次は誰れやらの一人茶番とあつて、小室夫人の長袴袴を裾長が一着なし、下にはズボ

ンも靴もはいたまゝ、散切頭に手拭のお高祖被ぶり、端を口にくわえて初花の積り、淺黄縮緬のシゴキを、碁盤の足に結び付け、引摺りながらシヅ／＼と出て来る、一見して一同ブツと吹き出す、凡そ天下にこれ位ひ不性にして輕便な初花が有つた者でない、精々女らしい聲を振り絞つて見るが、結局ウキスキーやローストビーフで製造した自分の聲色に過ぎない。

『モーシ勝五郎さん、此處は山家の事故に、紅葉の有るのに雪が降る、さぞ寒かつたでゴバンシヨ……』と碁盤をかついで這入り込む。

次は平山の鞭聲肅々と小牧の城山、何れも批評に價する代物でない、臺所で鹽味噌の樽が笑つて居る

愈々最後の出し物とあつて太閤記十段目、吉富の光秀がカードボードの鎧を一着なし、カイザーひげはその儘にズボンの上から脛當をしぱり付け、箒木の槍を引しめて現れ出ると、續いて川邊の眞柴久吉が、ブラオンペーパーの立烏帽子陣羽織を、ガサ／＼と着流

し、女中愛用の碼差を振つて不器用な腰付き、何やら譯の判らぬ臺詞暫らくあつて、互に得物を振りかざし一上一下と挑み合ふ、光秀は久吉の胴腹へ槍を突き込みキリ／＼、

(光) 何と骨身にこたえたか？

(久) いゝや一寸も堪へない！

(光) フム！ 借は汝は岩腹よなア！

之でも茶番の積りだから罪がない、之で愈々餘興も種切れとなつたが、未だ時間はなかなか早い、そこで僕にも何かやれと頻りに迫る、元來僕は人の前で見せたり聞かせたりする様な、隠し藝の持合せはないが、百貨店研究は僕の一つの仕事であるから、一つ講談の百貨店を開いて呉れんと大膽至極、臆面もなく妙な聲を絞り出して、立板に水を流すと云ふ大急行で一席辯ずる。

『頃は何日なんめりや天保の通用、象曆十八年馳の三月、炎暑赫々として寒風淋漓の眞最中、雪は鷲毛に似て飛んで散亂し、五巴と降りしきる、倫敦はテムス河の水上に富士

の山を控へ、アラビヤの沙漠に於て、ヒュードロ〜ドタバタ〜と戦争がオツ初まつたり、此時の先陣の大將新田筑後守正成の扮装を見てあれば、金の鯨しやまごを腦天に頂き、まよ三度笠を背中に背負ひ勘平の猪打鐵砲を小脇にかい込み、舶來の長靴を兩足に履きしめウ〜唸つて曰く、ヤア〜遠からん者は音にも聞け近くば寄つて鼻にもかけ、我こそは正一位稻荷大明神第一世ナポレオンの遺腹平やれがたの與一兵衛楠判官頼朝の親類、武藏坊辨慶清正の家來、番町皿屋敷お菊の化者とは即ち我が事なり、眞近く寄つて勝負を決せよと、サーベル抜いて突立ち上れば、遙か彼方の埃及は、ピラミットの物かけよりスフィンクスに打またがり、髪をおどろに振り亂して、丈八の青龍刀を水車の如くに振り廻し、砂の煙を後にして、天地に轟く大音あげ、ヤーレ比叡山の坊主共よつく承れ、汝等の首をチョン切つて近江の琵琶湖を埋め、明年よりは田植を致さん、斯く云ふ妾やまを誰れとかなす、賢くも清和天皇五世の孫天津彦根廟裔の大職冠録足の後胤、平の將門が娘瀧夜叉いよなるぞ、生命いのちいらすば其處動くなと、現はれ出でたる武智光秀、夕顔棚を引くり返

し、小田の蛙を踏み潰して、敵に我が意を覺られじと、抜き足さし足窺ひ寄り、ヒョツと突き出す手練の槍先き、ワツト魂たまぎる赤兒の泣き聲、合點ゆかじと引き出せば、婆さんお産の眞最中、そりや聞えません傳兵衛さん、お言葉無理とは思はねど、お前と私の其仲は、一年二年の仲ならず、屋敷に居りし其時にフツと見染めてお耻かしやと、かき口説かれ流石の大星由良之助も、稼いぐに追ひ付く貧乏なれば、質の流れを受け出して、幡隨院の長兵衛花川戸の助六等を頼んで、之より川中島に押し出すと云ふ事は、まづ明晩のお楽しみ……。

腹を抱へて散會したのは夜も十一時であつた、こんな馬鹿氣たことは流石他郷の倫敦なればこそ、日本内地では思ひもよらず、阿々。

難 問 題

日本から手紙が二三通、其中に珍しくも日比さんよりの通信がある、何時も此方からは

毎月二三回報告は送るが、滅多に返事が来た事がない、然るに今日は珍しくも日本流の巻紙に、達者な筆で長々しく書いてある、讀んで行くと其中に一大事件がある、巴里の帝國公使館は、今度昇格して大使館となり、本野氏に代つて栗野氏が大使として赴任する、就ては今度新たに巴里の何れかに家を見付けて、其處を日本流に裝飾して大使館とする、其仕事を一切三越で引受けた、それには丁度君が裝飾研究中であるから、其處女作として大に奮發せよ、自分は百貨店視察旁々栗野氏と共に、近日日本を出發するとある、いや途方もない事である、憚ながら僕は室内裝飾を本筋に遣入つて研究する事茲に一年、聊か西洋の室内裝飾の如何なる物かを知りかけた位に過ぎない、自信の有る設計など未だ出来るとは決して思つて居らるのである、況んや日本風に裝飾するとある、如何に金を掛けて見ても、佛蘭西へ同じ國のスタイルでは一向引立たない、寧ろ日本風の變つた處が、歡迎せらるゝに相違ないとある、成る程御尤であるが、日本に一體西洋の部屋を飾るべきスタイルの何物か、有ますか？僕は元來呉服屋の小僧で、室内裝飾の研究などは取つても付かない放れ業

である、其駈け出しに何物か西洋に於て、然かも美術の本場と云はるゝ巴里の眞中に於て喝采を博すべきオリジナルスタイルを意匠設計せよとは、何たる無法な事である、之が専務取締役として、幾千の人を手足の如く使ふ人の考へとは、あきれて物が言へない、結局我輩に腹を切れと云ふのか？拙者が腹を切つても三越の面目を如何にする？……………。

アツハツハ！獨りで怒つても仕方がない、まあ日比さんがやつて來たら、何とか説得する丈けの事、亦さう早く新大使館に適當なる建物が見付かるものでもあるまい、其中には雲散霧消するだらう、もう僕はそんな馬鹿氣た事が出来る物でないと高をくゝつて居る。

四月アプリルの夕立、五月メイの花も過ぎて炎暑赫々たる七月の中旬、印度洋を廻つてマルセーユに上陸し、執行君と松居君と三人で、日比さんはどうく／＼巴里を経て倫敦にやつて來た、其時分益さんは仕入の用件を帯びて、米國から倫敦に落ち合つた、ポートランドホテルに益さんと二人で日比さんを訪ね、三人鼎座して種々計畫を聽くに及んで、馬鹿々々しいと思つた巴里大使館の裝飾一件は、中々以て大眞面目である、出来ないなんぞ云はふ物なら大

眼玉を頂戴する、苟も三越の榮辱に關する事であるから、利害を放れて一大奮發をしろとある、意匠に付ては執行君が通であるから、専ら先生の指導を受け、横河氏や久保田氏も助力する筈、若干の設計圖面は、日本から追付け来る事になつて居ると云ふ、まあ助け船が有るなら、僕が全責任を負はんですむ、ナーエ努力なら幾らでもする。

そこで先づ執行君に質問を試みた、一體日本風に西洋室を裝飾するとは如何なる程度に日本風を加味せしむべきか、何か日本に適當なるエキザンプルとなるべきものがあるか、思ふに神社佛閣は住宅に不向きである、寢殿風にするか、武家造り風を取るか、御殿風にするか、質問は眞剣にして微に入り細にわたる、執行君只黙然として一言の明答もない、苦しい息を突いて曰く、結局適當に君が立案意匠して、それを日比さんが見て宜いと云へばそれで宜い。

いや早や心細い事に成つて來た、元來執行君の指導を受けよと云ふのが少し可笑しいと思つた、一體が執行君は御役人で、多少日本の骨董物には趣味もあらうが、室内裝飾に的

確なアドバイスが出来やうとは思はぬ、大使館の裝飾を日本風にしたらと云ふは此人の考へでは有るまいか。誤解イヤ買ひかぶられた執行君も聊か氣の毒ではあるが一番氣の毒なのは僕である、此事を日比さんに話したら日比さんも非常に驚いて居た、一體執行君の隨行は、同氏が外國通と云ふことを深く信じた結果であるに相違ないが、四五十日間の船中に寢食を共にし、マルセーユから巴里を経て倫敦に來る間に於て、執行君が英語以外は餘り得意とせざるのみならず、大陸の地理及び事情にも存外詳しくはないらしい、殊にあきたらず思はれたのは老齡敏活を缺き悠々たる役人生活に馴れて、烈しい氣難かし屋の日比さんなどの、セクレタリーが勤まるものでない、人を見誤つた見當違ひも之は亦甚だしいものである、殊に執行君は年既に老境に入り、蒲柳にして病多く氣位ひ許り高くて體は動かす、世話せらるゝ筈の者が、反つて世話する様な始末で惨々な事であつた。

僕が嘗てセントルイスに日比さんの添書を持て恐る々々同君の宿所を訪ねた時は、先生は博覽會の事務官殿で、人民共が小五月蠅い事を云つて來居つたと云つた様な、尊大な態

度で、今少し何とか世話して呉れるだらうと考へて居たに拘らず、一二本紐育の友人に添書を書いて呉れた丈けて、一向ファンとも仰せ遊ばさない、僕の第一印象が餘り愉快でなかつたので、其後は一向音信もせず、今度計らず特別の關係となつて親しく交渉するに及んで、愈々以て我々素町人とは反りの合はぬ事が痛感せられた。

暫らくして日本から設計圖面なる物が到着した、取る手遅しと聞いて見たらそのだらしないのに驚いた、一つも纏まつた物があるではなし、断片的な化者がガサ／＼と數計り澤山で、一つも之はと感心する物、いや採用して見やうと思ふ物がない、愈々心細い事になつた、考へて見れば無理はない、一體注文が無理なのである、何時の世にも無より有を生ずるは容易な事でない、エキザンプルなしに創作する事は、尋常一様な手腕で出来るものでない。

借て斯うなつて見ると是が非でも、僕が何とかコジ付けるより外に手段が無くなつた、参考書が有るではなし只僕が日本人として何物かを創作する外に道はないのである。それ

以來メーブルへは無斷缺勤、朝から晩迄バンクサイドの二階にとちこもつて一心不亂に考へた、寝る時は鉛筆と手帳を枕許に置いて考へ、何か案が立つと忘れぬ中に手帳に控へ、意識の有る間は考へ、勞れると眠る、覺めると亦考へる、斯くの如くすること凡そ一週間窮すれば通ずとは宜く云つたものだ、それでも何か朧ろ氣ながらも、先づ大體かうして見やうかと云ふ考へが纏まりかけた、それは各部屋共に皆趣を換へるので、客間は菊を主として菊の間となし、食堂は紅葉の間、婦人室は櫻の間、喫煙室は竹の間、其外に部屋があれば武器の何かの意で纏めて見やう、要は家が定まつてからの事である、先づ此大體の見當で如何なる家具を造るべきか、壁、天井、床、ストーブ等を如何なる體裁にするかを考へて、圖案の下準備を茲一生懸命とやつて居た、其間日比さんは三井銀行から經濟視察に出張して居た友人の馬島君を頼んで、ハロッツ、ホワイトレー等の百貨店に重役を訪問して研究を續けて居る、全體執行君が通辯すべき筈であるが、商買の研究などになると英語が談せる丈けでは不充分で、遂に馬島君を煩はすに至り、執行君の成すべき事が愈々少な

くなつた。

酔つぱらひ

物産の連中は遠來の客日比氏を歓迎するとして、例の通りバンクサイドで晩餐會を開いて松居君や白瀧君も丁度來合せて、差しつ差されつやり始めた、然るに日比さんは左が一向行けないのに、吉富が無理に強いる、いや飲め、もう行けん、……今夜は是非此盃を受けよと、愚にも付かない争ひをやつて居る、白瀧君が顔を出して吉富！其盃は僕が貰う……フン貴様日比君の代りに飲むか……オーヨシ……と互に強がりか飲みくらをする……彌次馬の悪戯ら者が早く此二人を潰せとあつて、ウキスキーを生のまま飲ませる、幾程もなく御兩人ベロ／＼に酔つぱらつて呂律も廻らなくなる、サツ！もう歸らう白瀧君一緒に來い、夜更けの田舎道を二人合せて八ツバライが、ヒヨロリ／＼とステーション目掛けてやつて來た、丁度曲り角の處へ來て右だと云ふ、いや貴様は酔つちヨル左だよと争ふ、變挺な日

本人がベロ／＼に酔つて頻りに引張り合つて居る、通り掛かつた巡査がテツキリ喧嘩と思ひ違へ兎に角警察へ來いとあつて、小山の様な大きな體に抱へられて、とう／＼二人はプロンツベリーの警察の留置場へ打込まれた、斯かる事とは白浪の白河夜船で寝て居ると、コツ／＼と表を叩く音がする、此夜更けに何者が何の用事だと立ち出て見れば雲突く計りの大男、然も巡査が丁寧に夜遅く起して氣の毒であるが、實は二人の日本人が酔つぱらつて争つて居たから、取り敢へず警察に留置いた故、引取りに來てくれるかと云ふのであるハハ！一人は吉富に相違ない、山本君早速衣服を改めて巡査と同行し、二人の酔つ拂ひを引取つて、其夜は倶楽部のソファアに寝かした。翌日吉富君と白瀧畫伯の二人は、裁判所に呼び出されて判事の取調べを受けた。

新聞の記事が奮つて居る、此二人の日本人が判官の取調べに對して、只二語を答辯したに過ぎない、曰くナイトウオズコールド(夜は寒かつた)、ウキスキーウオズストロング、(ウイスキーは強かつた)それで一人各五志宛の罰金を申渡された、すると一人の紳士吉

富は十志の金貨を取り出して、之で二人分の罰金を取つてくれと云ふ、凡そ英國の裁判有つて以來、他人の罰金迄支拂つた者は之が初めてである、吉富君と白瀧先生は、此話が出ると何時も頭をかいて居る。

絶體絶命

兎角して巴里からは、大使館の家が決定したから来いと云ふて来た、桑原くもう逃れることは出来ない……。ヨシジタバタしても仕方がない、最善を盡して天命を待つと云ふ事もある、元氣を出して、實測に必要な道具を携へ出發に及んだ。

「急きも致し候はぬ程に、いやでも應でもこれは早や、恨めしの花の都の巴里の里に着いて候ふ、アベニューオーシと申して凱旋門に程近き、立派なる石造の建物に案内なせられ、汗水たらいて實測な致いて御座る！」

エー面倒臭い所ぢやない、茲一生懸命だ、五尺の折差と手帳と鉛筆を持つて、脚達

の上に登つたり降りたり、オーナメントを寫生したり、部屋の廣さ、窓の大きさ、出入口の寸法、はては天井の高さと、助手もなしに獨りコツ／＼汗ダク／＼、朝は早くよりホテルを立ち出で、夕方は遅く綿の如く勞れて歸る、ベッドの中では相も變らず鉛筆と手帳を枕許に置いて、寝ながら考案に耽ける、若き精力の續かん限り、黙々として深き考へに沈む、何時眠りに落ちて何時覺めたやら、日比さんと部屋を同じうして枕を並べて居る、今枕許の時計は一時を示し、表の通りは只馬車の音のみシヤン／＼と耳に響く、枕許の手帳を取つて考案を記して居ると、日比さんは聲を掛けた、君まだ寝ないのか、ナー、僕の寝ないのは不思議はない、それより今頃迄寝付かれない貴方はどうしたのですか、酒でも少し飲んで眠らぬといけませんよ、明日はウイスキーでも命じまじやう。

翌日はウイスキーの大瓶を一本取寄せて備へた、それが亦なか／＼早く減るが、相變らず日比さんは寝付かない、聞いて見れば酒は一向飲まんと云ふ、然し此様に減つたぢやありませんか、成程のう。

其後用事が有つて晝前ホテルに歸り、部屋へ這入らうとすると、中から聊か狼狽した下男が酒臭い息を吹いて出て来た、ハハー、ウイスキーの行方はこれで讀めた、日比さんに話すと、ウム成る程。翌朝ガルソンが掃除に來たから、残りのウイスキーを瓶ごと彼に與へた、彼は眼を丸くして、兩手をバット擡げニツコリ笑つて、一寸首を左右に振りメルシビヤンと抱へて行つた、なか／＼横着者である。

兎に角巴里の宿には、三人一緒に宿泊して居たが、何時もスヤ／＼眠りに耽けるのは執行君一人である、日比さんは其頃から既に神經衰弱に罹かつて居られたらしい。

僕は家の實測も済んだので、製圖板と定木コンパスなどを、ホテルの一室に据えて製圖に取掛つた、毎日縮尺に當儀めてドロイイングをやり出し、疑問が起ると現場へ調べに行き、蓋し家主に返戻する場合には、現在の有型に直して返す約束であるから、微細なるオナメントに至る迄、落ちなく丁寧に控へて置く必要がある、殊に日本に歸つてから寸法に疑問が起つては始末に困る、念には念を入れたものだ。

巴里に於ける通稱は一切佐野君に託した、佐野君は永く巴里に住んで、骨董店を持つて居る好々爺である、聞けば東京には妻子もある、最早や六十にも成らうと云ふに、之は亦ハイカラなことではないかと聞いて見ると、なか／＼以てそんな次第ではない、彼は元北國筋の武士の家に生れ、維新後家運没落の後は、當時の高官連に引立てられ、歐洲に政府の金で留學を命ぜられた當年の才子である、白耳義のさる工業學校に學び、何やらインヂニヤ一の肩書も有るとやら云ふが、元來本職のインヂニヤ一が大きいので、當時豊かなりし政府の御手當が禍ひして、紅燈の蔭縁酒の香に酔ふてブラ／＼遊び暮した者らしい、西園寺、寺内、山本などいふ元老連にも、知り合ひの間柄ではあるが、彼は依然として一介の貧生である。嘗て巴里大博覽會の時、日本の茶業組合から代表者となつて、日本の茶を賣擴める爲めに、巴里に派遣せられたのである、蓋し永年巴里に居て知己も多し、日本語より佛語の方が達者である爲め、人間の素質を閑却して選定せられたものと思ふ、商賣にかけては一向不得手で、徒らに此處彼處と茶の見本を配り、信用もなき輩に貸付けて不拂

を喰ひ、結局各所に多大な借金が出来て國へ歸る事すら出来ない。多少日本の骨董がわかるとかで、骨董の店を開き知人の間を細そ々々と賣喰ひをして居る有様、日本から商賣の視察者や見物の旅行者が來ると、通辯兼案内役をして僅かに喰ひ繋いで居る、それでも元來正直な人だから、追々借金も返済して、今では餘程減つたとか、此分なら日本へ歸り得る時期も來やうかと呑氣な事を云つて居る、大使館の世話で、同君を通辯に頼んだわけである、何れ日本で家具や造作の下準備をして、再び巴里へ取付けに來る時には、亦此人を煩はす事であらう。

既にして實測圖面も出來上り、大體材木の必要數量も見當がついた、處て日本と歐洲とは氣候が非常に變化して居るので、日本の家具は往々非常に狂つて始末に困る、木材はロンドンのメーブル會社より、オークとマホガニーを買つて送る事にして、必要なる數量の倍數を買入るべく豫算書を取寄せた、巴里の宿からその可否を電報で返事する事になつた、即ち英國通の執行君が電報の文案を書き、日比さんに見せて居る、失禮ながら一寸覗いて

見ると豫算承諾の意味ではあるが、一寸吹き出した、曰く、ウイールアールアクセプテツド ユーア エステイメーション とある、成る程文法は正しいかも知らんが、電報は短かくて解かれよいのだ、失禮ながら僕が打てば、三字セーブして二字で間に合はせるとやつた、執行君聊かムツとして、それなら何と打つと云ふから、エステイメーション アクセプテツド之でも解かるだらう、日比さんは成る程のう、それでよか〜、のう執行さん！、執行君も仕方がないから、まあそれでも解かると濫々同意する。

兎角して巴里の用事も片が付き、僕等は行李を纏めて日本へ歸る事になつた、然るに日比さんは米國へ廻つて歸るから僕にも一緒に行けと云ふ、蓋し執行君では小廻りがきかない、到底隨行の役は勤まらない、そこで愈々リバープールから米國に向ふ事になつたが、僕は相變らず二等の船客とあつて、英國の平凡醫師に健康診斷をして貰つた處が、數日來の勞苦不眠の爲めに眼が充血してゐる、忽ちトラホーム乗船不許可となつた、要するに日本人の充血患者は、トラホームとさへして置けば安全第一である、たゞ安全第一で片付

けられた僕こそ甚だ以て宜い面の皮である。

結局僕は積んだ荷物を下して、再びロンドンに逆戻りして、郵船会社の丹波丸で東洋を廻つて歸る事になつた、勿論此方が僕に取つては呑氣で、大平樂に二ヶ月足らずは悠々自適し得る、それにポートセツド、コロンボ、シンガポール、ホンコンと未見の地を見學する事が出来る、少々暑い位は致方がない。

歸 路

明治三十九年八月末、暫らく住み馴れた倫敦を後にして、アルバートドックから船出して、一路故郷の空に向ふ、顧みればロンドンには僕の生涯にとつて思ひ出の多い處であつた、ブリテイレユチャネルで、少し荒れて氣持ちが悪かつたが、大西洋に出てからは浪も平らかになり、日々極めて平凡に暮した、僕と同室したのが海軍の兵曹長で鈴木某といふ男である、之が造船監督官付きとして英國に二年程滞在し、任期が終つて歸るといふ、此

男二年も英國に居て一向英語がわからず、一體向ふで何をして居たものか可笑しい位のものである、此男の話は何日もダークサイドの話題で持ち切つて居る、ちと憚りはあるが、餘り振つて居るから二三書いて見る、但し君子は之から先きを讀むべからず、オイそつちを向いて居給へと云ふに……。

ハイドパークの夕

彼の友人Sが薄霧のかゝつた夕方ハイドパークを散歩して、木蔭のベンチに腰を掛けた時、肉付き豊かな四十格好の婦人が彼の隣りに腰を下し頻りに何かと話しかける、聞けば彼女は去年夫に死別れて、淋しき生活を續けて居るといふ、話は段々妙に曲折して、黄昏のパークを去らうともせず、喃々としてSを誘ひ、怪しき木かげの星暗き處、遂に怪しからぬ夢を結んだとやら、一幕すんで彼女はSをステーションに送り來り、自から切符を買ふて興へ、固き握手を交していづくともなく立去つたとある。

此話を聞いた友人共は此仇きに廻り逢はんものと、毎日夕方からハイドパークのベンチを占領して、待てど暮せど遂に再び彼の女の姿を見た者はないといふ、馬鹿々々しいなどと云ふばかりない。

川と言ふ字

我が兵曹長殿一日肉の香に飢えて、ダークサイドをぶら／＼した、やがてスラリと丈の高い二人の美人連れに摺れ違ひ様、秋波と共にハローと聲を掛けられた、先生御参なれと計り之に應じて談判之を久うしたが、向ふの言ふことは充分わからず、此方も單語を並べて手眞似足まねの片言交り、イエス／＼オーライト、何が何やらさつぱり解らずに話は纏まつた、然るにこれは亦豈計らんや、この二つのバラとダリヤを両手の花と手折るべく餘儀なくせられたと云ふ、さなきだに重きが上の小夜衣、其夜の夢は如何なりしぞ、彼の猛烈なるパッションの権化、二人のアングロ美人に翻弄せられて、極東日本の兵曹長いかに

勇なりと雖も、衆寡終に敵せず其勢ひ當るべくもない、天晴れ色男は臺なしのフラ／＼となり、翌朝明くるを遅しと勘定を拂つて、其家を立ち出でたが、ヒヨロ／＼して下宿へ歸つてから二日計りグツスリ寝込んだとやら、忘れても西洋人は二人一緒に買ふたとある、誰がそんな馬鹿なことをする奴が有る者ぞ。

スケール

スミス君とボーザー君は、共にインチニヤード、何時も物差がポケットに入れてある、それで何事も寸法で解決しやうとする、久しぶりに此三人がロンドンに出て来たが、どちらも不良老年である、二人でピカデリーの夜中をぶら付きながら、彼かこれかと物色して居る中に、頗る御意に召した二人連れの逸物に、廻り會つて聲をかけられた、そこでスミス君が色々談判の結果、彼女等はクス／＼笑ひながら一時一ポンドの割合で約束に應じた、二人は各彼女等のネストに案内せられて、存分に意氣投合して、翌朝支拂を済して立ち出

ると、スミス君はボーザー君に幾ら取られたかを聞いて見たら、七ポンド十志拂つたといふ、然るにス氏は僅かに三ポンド與へて済んだとある、何んと僕はワイズぢやないかと同君の自慢話し、アングロなか／＼珍談を作り居る、エツ！わからぬ、説明の限りでないサ……。

ハービジネス

柳花の春を賣る階級にもピンからキリ迄ある、一夜に千金を要求するもあれば、十分間六片といふのがある、何れも淺ましい點に於て甲乙はないが、甲は美しく表面を飾つて世を欺き人を欺き、果は己をも欺いて貴婦人の如く取すまし深い罪を作つて居るが、乙は野天の赤裸々で野犬にも等しいのである。

ロンドンイーストエンドは東端のさる町外れ、肉付き豊かな一人の美人が、肉の香に飢ゑたる五六人の患者を一つのベンチに待たせて置いて、一群フロック繁る樹蔭をスクリーンとしエバードグリー

ンのベルベットを敷き詰めた彼女の假のネストに、一人／＼患者を引き來つ一十分間に六片づゝの診察料を取る、短き寸劇のフィルムが一回轉すると、彼女は立ち上つて手を舉げ待たせてある次の患者に向つて、

ゼネーキスト……。

と叫ぶ、かくする事何回に及んでも、彼女は平氣の平三であるといふ、抑も彼女は人か鬼か？

ララツララツラツラー……。

ザットイズマイビジネスシーセツド。

牛のお産

鈴木兵曹長の猥談も聞きあきて、楮て心に掛かる大使館裝飾の考案を進めやうとするが、何分船は前後左右に動揺し、ジブラルタルを左に望んで、地中海に乗り込んだ頃には非常に暑さを加へて、考案などは一向纏まるものでない。

二等船客の甲板には英國から日本に送る種牛や、豚や鶏の御客様がオーニングもなしに照らされて、プー／＼／＼と不平を云つて居る。漸く赤道に近付くに随ひ、海面は油の如く平らかに風はそよとも吹かず、赫々たる炎熱益々加はり、甲板に照り付けられて居た豚公は、第一番に尻古垂れてフー／＼と苦しんで居る、付添ひの英人B君が水をかけるやら灌腸するやら、鶏は羽毛が抜け落ちて瘦せ衰へ、丸裸かとなつてヒヨロ／＼して居る、俄かに甲板には覆ひを掛けるやら、手當をするやら大騒ぎ、其中に牛が産氣付いたといふ、B君シャツの袖をまくり上げ、兩の腕を局部に突き込み、子牛の足を引摺かんで力任せに引き摺り出す、牛は苦しんで眼を白黒させて居る、やがて子牛の後足が半分程外に出ると、麻紐で確かと縛り大勢でそろ／＼引張つてくれといふ、兎角して生れ落ちると、子牛は大犬位の大きさで甲板に横たはる、親牛は子牛の全身をベロ／＼なめ終ると、子牛はブル／＼と身をふるはせて、ヒヨコ／＼と立ち上りヨタ／＼歩きながら、母親の乳房にかぶり付く、誠に以て無雑作なものである。

風なきて油の如き地中海

日は傾きて牛の子生る

兵曹長殿御覽じて曰く、フム一體此りや何んだい、成る程我ながら之は又何だいと云ひたくなる。

ポ ー ト セ ッ ド

マルセーユを彼方の岸と睨んで寄りもせず、日を重ねて初めて投錨したのはポートセツドである、何が借て之はこれでも埃及の一角、兎も角も上陸してと、土人のサンパンに飛び乗り向ふの岸に着いた、兵曹長殿ポケットから、六片の銀貨を取出して土人に與へる、土人は手を振つてモリア マネーサーとやる。

先生一向解らんから、此度は一志しんぎを取出してこれが欲しいのかい、此ん畜生めと日本語でいふ。

イエスサーと請取る。

アツ、此奴日本語が解かる。

先生は何でも日本語でヤツつける、どこ迄も日本語で押し通す、勿論先方に解かる氣遣ひはないから可笑しい、黙つて居るよりは増しだと見える。

暑いのに眞黒な裂を頭からスツポリ冠つて、眼だけむき出して歩いて居るのが婦人だといふ、町の兩側には寫眞屋が軒を並べて居る、ブラ／＼見物して居ると、中から亭主が手招きをしてカムヒヤ／＼といふ、店の後ろに別室があつて怪からん寫眞を盛んに出して見せる、それが軒並であるから驚く、警察も取締りも有つたものでない。

兎角不案内の町をブラ付いても一向面白くない、只亡國の悲しさと眼の眩む程の暑さを感じずるに過ぎない、之からカイロー迄は道程も遠く、船の出帆迄には見物は思ひもよらずそこ／＼にして船に歸る、甲板には既に色々な土産物賣りが店を開いて旅客に押賣りをして居る、皆怪し氣な物ばかり、取分け悪賢い眼付きの小僧が、かるたの包みを密かにポケ

ツトから取出して、五十枚の寫眞がタツタ一志と、さも此中には怪からぬ寫眞が五十枚で一志だ、これは秘密に賣るのだといふ風をして、間抜けな助平客を欺かうとする、なか／＼しつこい、愈々以て亡國の悲哀を痛感せしめられる、寧ろ憎まんよりは惘然として涙を催ふせしめられる。

助平なる大阪のボンチ君が、欺かれて一志を投じて之を購ない、出帆後密かに船室で開いて見たら、使用にも耐へない粗悪なランプであつた、何んやあほらしい、人を欺まし居つたな小僧めと憤慨して居る、何んやあほらしい助平がと云ひたくなつた、今は嚴めしい政務次官殿に御はす〇〇〇閣下なども怪しからぬ寫眞數葉を家土産に購はせられて、秘かに船室内に開いてニタ／＼笑つて御座る、いや早御他愛もないことで御座る。

スエズ運河

スエズの運河は非常なスローで進行する、勿論運河の幅は僅かに汽船が摺れ違ふ丈けの

幅員を有するのみである、先きから汽船が来ると合圖をして向ふか此方かと停船して、靜かにやり過ごした後、徐ろに運轉を始める、そのまだるい事は齒がゆい程であるが、この運河の御かげで近道を行き、その行程の短縮は六七週間にも及ぶと云ふに至つては、苦情ケ間敷い事など云へた義理ではない、謹んで先人の努力を感謝すべきである。

然し其暑い事は全く以て御話にならぬ、あはれ一と風吹けよかしと希ふ。

處が其願つて居た風が偶々吹いて來た、アラビヤの沙漠を吹き捲る熱風である、よく紅塵萬丈と云ふが正に此事である、其暑くして不愉快なること言語同斷、風は涼しいものと心得て居た僕は、この時風は必ずしも涼しいものでないといふことを體驗した、焼け切つた沙漠の上を吹いて來た風は實に暑い、恰も熱湯の中にチツと辛抱して居た者が、忽ち勢ひよく引かき廻された様なものである、あゝアラビヤの風は眞平御免、一遍でコリつくした。

印 度 洋

兎角して船は漸く運河を越えて印度洋に出る、今迄は平靜砥の如き船が、忽ち前後左右に動揺して、烈しい風が吹きまくる、今度の風は聊か涼しさを加へて、結構であつたが少頭が痛む、すれ違ふ船を見ると、何れも煙突が眞白くなつて居る、猛烈な潮をかぶつた爲めであらう、食堂の客もボツ／＼齒抜けになつて來た、酔ふまいとするには勝負事をやるに限る、アルゼンタインの老人M君を引張り出して喫煙室でチエツスを闘ふ、僕は日本將棋の筆法で進退するから、運動極めて輕快であるが、先方は考へて考へて、執念深く考へて容易に動かない、他愛もない勝負に一時間餘を費やす、先生流汗淋漓として一番で尻古垂れる。

もう一番と挑む。

ナットナウメークミータイヤドと逃げ出す。

下手の考へ休むに似たりとは、M翁に呈する最も適切なる言葉である、今度は船醫のK君と黒白を争ふ、最初三目置いて向つたが物にならない、一足飛びに六目置いて見たが未

だ駄目、これは逆も我が敵にあらずと引下る。

パーサーは長椅子に横はつてクス／＼獨り笑ひながら、怪し氣な小冊子を読んで居る、見れば佛蘭西で賣つて居るイングリツシブックで、英國で賣つて居るフレンチブックだといふ、之を要するに、公然とは賣る事も買ふ事も出来ない怪からん本である。

オイ、パーサー怪からん者だねー、

ウフ！

ドントピークイツクゴースローリー、

アツハツハツ……………。

コロンボ

コロンボの波止場は、世界三大難工事の一つであるといふ、成る程コロンボの港は只ゆるやかに灣曲したる海岸に、一直線の石垣を以て大海の波濤を喰ひ止めて居る、外海の荒

波は彼の石垣に打突かつて、數丈の水柱を間斷なく打上げて居るが、波止場の中は鏡の如く平らかである、如何にして此荒海に此石垣を積んだものか敬服の外はない、船は靜かに港に入り込んで安全に碇泊する、見れば外にも二隻程、日本國旗を翻した貨物船が先着してゐる、外國に旅する者が國旗を見る程嬉しい事はない。

これは印度のセイロン島にて、生捕りしましたる大蛇で御座い！と、よく子供の時分に見世物で聞き馴れた、セイロン島とはこんな所か。

甲板に立つて島の景色を見て居ると、カツパの如き小僧が板子一枚づゝを抱へて、我が丹波丸を目掛けてまつしぐらに泳いで来る、船の周圍を取り巻いて、船客に錢を投げる手招きす、全身澁紙の如く日に焼けて、白きは眼と齒ばかり、蛤の如き唇を開いて蕃歌を唱ひ、海底に潜つて錢を拾ふ。

ボンビヤ／＼／＼／＼アールラボンビヤイ

日本に近付くに随つて、段々人種が下等になる様な氣がして實に心細い。兎も角も上陸

して見る、蟲々と立ち並んだヤシの中に、草葺きの小屋が不規則に並んで居る、肩に大きなコブのある小牛に車を引かせ、馱者はアンベラの屋根の中から、手綱を引いて鞭を振つて居る、眞黒な顔に眼ばかり白く、口からは眞赤な木の實をかみながら、ベツベと種子を吐き出す、黒鬼が血の出る生肉を、舐ぶつて居る様に見えて物凄しい。

やがて公園の様な廣場に出た、只見る一町四方位に廣がつて鬱蒼として繁茂して居る、大樹の何れが幹で何れが枝か、枝から乳がたれて根を生じ、亦更らに其處から枝を生じて際限もなく擴がる、此調子で捨て、置けば、全島悉く此樹の爲めに占領せられるかと思はれる、これがバンヤンジといふのである、初めて見る眼には頗る珍らしい、殊に奇異に感じるのは、其下かげに人力車がズラリと並んで、土人の車夫が客待ちをして居る、其人力車は正に日本から輸出したもので、竹に虎だの、牡丹に唐獅子などの蒔繪が施してある。

兵曹長殿鼻うごめかして、なあんだ之は皆日本から輸入したもんだらう、ヘン、車夫の畜生そんな事は知らんと見えて、妙な面して人を見やがるな、途方もない氣焔を吐いて居

る、人間が馬の代りに引張つて驅けて歩く道具などは、餘り御自慢になる様な代物ぢやない、何しろ百二十度もある炎天、浮か／＼歩いて居られず、そこ／＼にして船に歸る。

甲板には例の通り土人が土地の名産を賣りに來て居る、やれサファイヤだのルビーだのと云つて、どこの工場で製造したものか知れたものでない、稀には慾の皮の突張つた旅人が、挿出し物位に思つて篋められる、飯の上の蠅と同じでうるさいこと夥だしい、早く出帆すればよし……。

シンガポール

鏡の如きコロンボの港を、船足ゆるやかに出帆した丹波丸は、波止場の水門を出ると印度洋の荒波が打寄せる、風が加はつて烈しいローリングを始めた、茲暫らくは食堂が淋し

空は綺麗に晴れて居るが、海は少しく荒れ氣味である逆巻く浪の間から飛との魚が、群を

なして右に左にうね／＼と飛び廻る、夕日に輝やいてピカリ／＼と光る有様は、勇ましくんと云ふ計りない、勇士が鎗襖を造つて敵陣に飛び込む様に、殊更ら燃え立つ様な夕焼けの空を背景として、流石に熱帯の景色は亦格別な趣きがある。

燃ゆる空逆巻く波を飛びの魚

青海原に鎗ぶすまして

朝の怒濤に櫓削り、夕べのなぎに身をこがし、……と言へば、頗る大袈裟であるが、赤道直下の船中は樂なものでない、兎角して一週間の後、馬來半島とスマトラの間に船が這入つて来る、沿岸の樹木は深緑滴るばかり、其間に枕上家屋が不規則に立並んで居る、之はおそらく太古よりの遺風であつて、沿岸の水中に杭を立て、其上に根太を置いて床を張り、小屋を組んで屋根を造り、棧橋で陸と連絡して居る、これが皆土人の住宅である、海上から之を望むと、如何にも未開の蕃地を探見して居る様な心持ちになる。

兎角して南洋の樂園シンガポールに投錨した、此處の植物園は世界で有名なるものである

といふ、早速上陸して海岸に出ると、支那人の車夫がズラリ並んで居て頻りに乗れとすゝめる、多分我横濱と同様此處らの車夫は、多少英語が判かるだらうと獨り呑み込んで、進めらるゝ儘に廿歳前後の車夫に、ポタニカル ガーデンへやれと英語で命ずる、彼は唯々として挽き出し一散に走る、凡そ七八丁も眞直に走つた頃、車を止めて後をふり向き、何かチヨンゴ／＼とやり出した者は此奴英語が解からんのか？……はて拙者は支那語がわからず、彼れに日本語などの解かる筈も有るまい、仕様事なしに手帳を取出して一枚を引破り、植物園と書いて見せた、彼は之を受取つて讀んで見やうともせず、其處等の家並みに見せて歩くが、菓子屋でもパン屋でも洗濯屋でも、一向に字の讀める奴が居らん、見渡す限り市街は大方支那人を以て埋めて居るのに、文字の讀める奴の居らんのには一驚せしめられた。

其辭軒に釣るした看板や、壁に張られた赤紙には、御大層な文句が連らねてある、貧弱極まる駄菓子屋にも赤紙に、此大業を興して福自ら湧くとやら、不老門前がどうして、長

生殿裏春秋に富むとか、やれ海日三神の山を照らして、長風萬里の波を送るなど、御託を並べて置きながら、一人も解かつて居らんなどは頗るユーモアに富んだものである、日本なら小便無用と書く處を、君子自重が聞いてあきれれる。

如何にあきれても仕方がない、車上の僕は此熱帯國の炎天に、照り付けられて眼も眩らむ計り、何と思案も投げ首で、助け舟もがなと閉口して居る、折から西洋人が一人向ふからやつて来る、早速車を降りて英語で話しかける、此車夫は英語が解からんで非常に困難して居る、どうか植物園と日本人の居る町へ案内する様に命じて頂きたいと頼む、先生支那語が解かると見えて、親切に車夫に傳へて呉れた、車夫も安心の胸をなで下ろす、車上の僕も一と安心、車は風を切つて走ることなか／＼早い。

急ぎ候程に之ははや、世界で名高いシンガポールの植物園に着いて候、アドミツツヨンを門番に渡してそろり／＼と参る、廣ろ／＼致した芝草の園には、いと廣やかなる池が御座る、ピクトリヤリリーとか申して、直徑一丈に餘るまん丸な蓮の葉が浮いて

ある、古への人が蓮のうてなに半座を分つとやら申したも、此様な蓮の事でがな御座らう、惜ても見事、名も知らぬ色美しの鳥が彼方此方と飛び廻る、得も言はれぬ花の香りに、鼻の穴は開いたりつぼんだり、はてラツチもない事で御座る、空を蔽ふ大樹の幹には、葉蘭の様な宿り木が、鷹揚なる緑の袖を翻して、危ぶなげなるダンスを舞うて御座る、電信草とやら申す天狗の羽團扇に似た草は、小高い幹に腰掛けて電線の様な細長い根をたらし、彼方此方に網を張り廻す、惜ても／＼見るもの／＼皆珍らしい、極樂淨土とやらんに参つた様で御座る、それに致しても極樂淨土は何ぼ暑い處で御座る、此様に暑うてはなか／＼ゆる／＼も致して居られぬ、どうりや地獄へでも参つて一と涼み致さうか……。

再び車上の人となる、今度は一言も發せずして走り出す、やがてとある町の角に車を止めて右を指さし、之が日本人の居る町であると云ふこなし、何やらチヨンゴ／＼云つたが元より通ずる筈もなく、五十錢銀貨一個を取出して與へる、受取つた彼は先づポケットに

納めて亦手を出す、もつと呉れと云ふのであらう、又十錢銀貨一つ與へる、又手を出す、仕方がないから今度はステツキを振り廻して追つ拂ふ、彼はなほ少し離れた處で手を出してねだる、幾ら與へても此通りと聞いて居た、此國の民は哀れな者である。

市街はと云へば熱帯の殖民地、何れの建築も窓は少く庇は深く壁は厚く、強い光線を避けて薄暗らい、如何にも陰氣な造りである、一軒の家を覗き込むと、中から顔を出したのは正に日本人の而も女である、髪は引詰めほじり巻き、上着は筒袖の白襦袢に下はジャバ更紗の長きを腰に巻き付け、脂粉を施したも薄氣味悪く、長屋の山の神然たる不器用な格好に、どこか艶めかしい處もある、妙な代物が居ると思つたが、取あへず此邊に日本料理を喰はす家はあるまいかと聞いて見た、すると彼女は三軒先きの右側の家で聞いて御覽なさいと云ふ、發音から語尾の調子が餘り聞き馴れないなまりがある、兎も角も教へらるゝ儘に其家へ這入れば、土間に丸卓子が一脚、廻りに六脚程の曲け木の椅子、ブーと醬油の香が鼻を突く、殺風景極まる食堂である。

いらつしやい、何か差し上げますかと出て來たのは、此家の料理人兼亭主と見える、垢だらけな白シャツを、釦もかけず胸毛あらわに、袖は二の腕迄まくり上げ、下には紺セルのズボンをはき、それでも流石に前の釦はかけて居た。

晝飯が欲しいが何が出来るかね？

ハア、甘煮に御わん煮肴位ひなもので、

それで結構急いで頼む。

小半時も待たせられて漸く出て來たのは、竹の子の罐詰めと鳥の煮付け、松茸の罐詰めと鳥のわん盛り、何やら名も知らぬ魚の煮付け、それに南京米の御飯、陽氣は無類暑いので食慾はなし、久しぶりの日本料理だが、餘り結構で手を付ける勇氣が出ない、それでも折角誂らへたものだ、勇を鼓して箸をとり突つきながら亭主に近所の様子を聞いて見る。

話によれば先きの女は天草あたりから來た賣笑婦で、近所に澤山巢をくつて居るといふ、成る程それで讀めた、日本人の殖民する所必ず先づ婦人を先頭とす、日本婦人の勇氣驚く

べし……と云つた處で、此種類の勇婦では餘り御自慢にもならず、何の事はない流行感冒の微菌を、大威張りで世界中へ撒き散らして居る様なものである。

勘定を拂つて表へ出ると、先きの車夫が未だ待つて居る、呑氣な奴だ、御馴染とあつて早速飛び乗り、丹波丸！と云へば今度はよく了解して走り出す、海岸でヤシの實とパイナップルを買ひ込んで船に歸る。

甲板から棧橋を見て居ると、例の賣笑婦が七八人何れも筒袖の半襦袢にジャバ更紗の腰巻き、日和下駄をカラコロさせながら日傘をさして船に出入して居る。大方水夫や船員に馴染客があると見える、兎に角不思議な風體をしたものである。長い海上生活の船員が偶々碇泊した時、積日の鬱憤を晴らす道具となつて居るのであらう、聞けば土人をも相手にするのだとやら——。

オロシヤ怖いしバンヂは臭し、

意氣な日本人は金がなアイアコリヤ——。

と彼等は唱ふ。

香 港

シンガポールを船出して、南洋の樂天地ときくジャバ、スマトラは指呼の間にあれど、立寄る自由もなく波の音に明け水夫の船歌に暮れて、茲一週間は何と仕様もない、飯時に食事して、三時に茶を飲んでブラ——としてそれでおしまい、誰やらが、人間は喰ふて糞して寝て起きてそれから先きは死ぬるばかりだ、とどうやら其通りに成りさうで心細い。

七日間を費やして漸く香港の港に投錨した、見れば四面突出たる秃げ山を以て、圍まれ恰も井の底に水を湛えて船を浮べた様に見える。周囲の市街は山の中腹に段を成して、家が並んで居る、香港に来て初めて、南畫の山水が單に作畫の描法のみではなく、全く寫生から出發したものである事を知るに至つた。周囲の山は悉く凹凸したる巖石で、樹木としては更でない、殖林もせぬ様なさまだから萬事締りが付かず、僅かな事から英國に占領せられて

了ふのだ、道樂息子が親譲りの山林を伐拂つて、賣飛ばし遣ひ果たして坊主山を殖林もせず、一東三文で手放なす様なものではあるまいか。

山高きが故に尊からず、木有るを以て貴しとなす……

誰れだ……大きに御世話とぬかし居る。

偕て我々の航海は颯風の後を追つて来たものと見える、數日前の香港は非常な颯風で、灣内は恰も盪をゆすぶつた様な有様、纜橋は繋留船の動搖で無慘に破壊し、海岸には小蒸汽、ジャンク等が打揚げられ、破れた船腹を現はして横たはる、船具や木材の破片が散亂して當時の慘狀を物語るも哀れである。

當時灣内の船舶は難を避ける爲めに妙な話だが沖へく〜と押し出す、狭い灣口の混雜、風浪の激怒は、一と通りの騒ぎではなかつたといふ、我等の船が投錨すると、待ち構へて居た物賣りの支那人が先を争ふて上つて来る、

タイフーンこわいね、

など、片言交りの日本語で話しかける、蓋し何か賣付け様といふ下心、之は日本大人の證明書ある、と名刺に何か書き付けたものを見せる、手に取つて見ると、何の某と云ふ日本人の名刺に、

此男は掛け値をするから充分御注意とか、此男の時計は非常に時間が狂ふから決して買ふべからず、

など、いふ證明書を見せる、本人は何が書いてあるか一向知らんなどは呑氣で寧ろ可愛い。水夫のA君が嘗て此種の支那人某から、銀時計一個三圓で買った、それ程古くもないに三圓は馬鹿に安い、どう踏み倒しても十圓の値打はある、これは確かに掘出し物だと獨り喜んで居た處が、出帆以來一日の中に二三時間位狂つてどうにもならない、横濱の時計屋に見せたら、石は抜いてあるしゼンマイは合つて居らんし、外形は頗る健全に見えるが内臓は悉く不健康で玩具に過ぎないとある、A君憤慨之を久しうして見たが、相手は香港の黒鼠、何と仕様もない、それから遂に一策を案じて、一日神奈川の某青樓に登り、一夜の

春を恣まゝにし、翌朝勘定の時金七圓の支拂ひに、二圓丈け金を出して残金は此時計を預けて行くから、明日現金と引換へに來たら渡して呉れと云ひ置いて去つた。即ち三圓の時計は某樓へ金五圓に賣飛ばしたわけになる。なアに彼奴等はどうせ正直な商賣を仕て居るわけぢやない、これですつかり溜飲が下つたとある。

成る程A君は溜飲が下つたらうが、青樓の主人は溜飲が込み上つたに相違ない、上には上の有るものだと感心した、其話を聞きながら時計屋の持つて來た、格安の時計をひやかす、成る程一見堂々たる金側の時計が筥棒に廉い、然も皆カチ／＼活潑に動いて居る。

之れ時間合ふか？

皆時間大丈夫ある、請合ふ、

何が大丈夫だか知れたものでない、時計に無智識な者が、一パイ箆められるのは尤も至極である、そして此種の商人の手に渡る時計は、大方掏摸や窃盜の故買品で、世界中の不正品が無警察の支那に集まると、誰れやらが知つたかぶり、或はまんざらでないかも知れ

なり。

感心したのは洋服屋である、白リンネルや白綾木綿小倉地などの見本を持つて、夏服の注文を取りに來る、聞いて見ると今寸法を取つて、夕方迄にはチャンと仕立てゝ來るもし悪ければ手直して、出帆迄には必ず間に合せるとある、勿論代金は出來上つてから引換へである、誤魔化される心配は斷じてない、此種の支那人の勉強には敬服せしめられた、然も價は非常に廉であつた、船客中二三注文した者があつたが、皆その出來ばえに満足して居た様である。

船へ賣りに來る物で廉いのは籐椅子である、日本なら五六圓もする肘掛椅子が二三圓、寢椅子で三圓五六十錢、餘り廉いから寢椅子を一脚買込んで甲板に置き、途中使用して横濱へ歸つた時、家兄が横濱で新家庭を營んで居たので、土産に持込んだ處が、マツチ箱の様な小さい借家に、六尺もある寢椅子を貰い込み、置き場に困つて大笑ひした事がある。

サムシング イズ ベターザン ナツシングとは限らぬものである。

兎も角も上陸して見る。海岸通りは流石に美しく、建築は皆西洋風であるが、人間は大
方支那人である、日本人経営といふ某料亭に登り、久しぶりに日本料理二三品注文して待
つ間に、別室から艶めかしい音色が聞えて来る、聞けば内藝者が二三人居るといふ、日本
人の至る處に、必ず賣笑婦の居らぬ處はない、此點に於て最も發達して居るのは日本では
あるまいか、と云つた處が餘り自慢になる代物でない。

如何です？と水を向けられたが、總揚げにする程の通人でもなければ、懷中と雖も亦昨
今の陽氣程暖かではない、茲は一番御遠慮申上げて御飯丈け頂戴し、甚だ以てやすからさ
る勘定を支拂ひフィと飛び出した、それでも日本に近付いた御蔭か、シンガポールよりは
若干増しであつた、やがて賑やかな坂路に掛かる、此處は純然たる支那町で、紅黃青綠、
色とりどりの看板が釣られ金文字で素晴らしい文句が並べてある。芝居か寄席か支那一流の
音楽が聞える。

チン〜チャカ〜チャーと投げる様な哀調で何やら歌ふ聲もかすかに、然し不案内の

僕には、何處か入口か一向解からぬ、一トつ珍しいから支那芝居を話の種に、一と幕と思
つて探して見たが、それと覺しき小屋が見當らぬ、音楽の聞える方に耳を傾けて段々尋ね
て行くと、一軒の門口が開いて居る、多分此家だらうと中に這入つて見たが、梯子段計り
で他の部屋の扉は固くとざされてある、先づ階段を登つて二階に行き、三階に行き、四階五
階と登り詰め、最後の天邊に行き當ると、二ヶ所の扉が開いて居る、中を覗いて見ると寢
臺が幾つも並んで、其上に支那人がゴロ〜と寝ころんで、長いパイプをくはえて居る、
寢室の中は何やらモー〜したる煙りでさつぱり解らない、其中に二人計りの支那人が僕
を怪しと見てか頻りに何かチョンゴ〜云つて居る、拙者も少々薄氣味悪く、永居は無
用と急いで階段を駆け下る、大急ぎで表へ飛び出してホツと溜息をつく、何せようつかり
つかまつたら始末が悪い、天下禁制のオピウムでも吸つて居たのであらう、要するに物
凄いだークサイドの一部である、最早や時間も黄昏時、餘り赤毛布をやらぬ中、そこ〜
にして船に歸る。